D×D×D

美人だから…　うちの美心は…

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｄ×Ｄ×Ｄ

【Ｎコード】
Ｎ１９４６Ｕ

【作者名】
美人だから…　うちの美心は…

【あらすじ】
近未来、現実世界で地球を救った主人公。しかし暗殺されてしまう。女神にご褒美としてワンピースの世界に転生させてもらうことに。
そんな主人公が適度に暴れるお話。
処女作ですので駄文になるかと思いますが、作者はメンタルが弱いのでお手柔らかにお願いします。
基本週一更新です。ストックが貯まれば週に３回位更新する時もあります。

プロローグ（前書き）

能力等、作者のイメージで作っていますので何か不都合があるかもしれませんが、そこはそういうものだと思っていただけると嬉しいです

プロローグ

ｓｉｄｅ　？？？

俺は今非常に困っている。どれくらい困っているかというと、クレームをしたら店員の女の子が泣いてしまったくらい困っている。まあそんな経験なかったけど

目の前にいる綺麗な女の人が土下座をしているのだ。

「ありがとうございました！！！」

いや、ありがとうと言われても何に対して言ってるのかも分からないし、大体俺とこの人は初対面だ（多分）

「よく分からんが、どういたしまして。とりあえず顔をあげてくれ。俺は土下座されて喜ぶほどＳじゃない」

こういうタイプの人は（といっても、会って１０秒もたってないから分からんが）一度「どういたしまして」と言っておかないと延々と頭をさげ続けるから言っておく。

「それは失礼致しました。」

正解だったようだ。女の人は割とすぐ頭をあげてくれた。

「で、俺なんかあんたにしたっけ？
つーか、初対面だと思うんだけど？
てゆーか、あんた誰？
そーいや、俺死んだんじゃなかったっけ？
つーと、ここ死後の世界？そーすっと、あんた神か閻魔か？
そりゃ初対面なわけだな。」

「…一度にまとめて質問しといて、自己完結しないでください…。
まあほとんど合ってますが」

やっぱりか。俺はさっき死んだ記憶がある。痛かったから夢じゃないと思うし、俺は死後の世界を全く信じないわけではない。
だって死んだ人の話なんて聞いたことないから、あるもないも分かる訳がない。だからあっても驚かないし、なくても驚かない。なかったら驚けもしないだろうが…。神についても同様だ。

「で、なんで俺に感謝する？正直言って俺は無神論ｓｙ…、おっと目の前に居てそれはないか。お前の存在を否定するところだった。まあ新有神論者になったわけだが…それでも俺は神にすがったことはないからな。感謝されても余り嬉しくないんだが」

「…よく本人の目の前で言えますね…。それくらいでは腹はたたな

いので別にいいですが。
質問に答えましょう。ズバリあなたが創った装置のことです」

あれか…。まああれ以外ないか

２０ＸＸ年、日本は大きく変わった。

俺が「原子レベル分解、結合装置」を創ったからだ。

この装置は、人間が排出したゴミやＣＯ２など地球にとって有害な物質も原子レベルまで分解し、それらを結合し新たなエネルギーや金属といった人間にとってなくてはならないものに結合することを可能にした。

以降、日本は爆発的に経済が発展することになった。
俺はこの装置を日本のために使ったのだ。正直この装置があれば湯水のように金を稼げたが、そんなに稼いでも使い道はないし、俺は一人っ子で両親も死んで結婚もしてなかったから金を残してやる相手も居なかったから。まあそれでも使い切れない位の金は手に入ったが…

具体的な使用方法を言うと、今まで莫大な税金を使ってきたゴミの収集や下水処理などに使用。それらは全て分解、結合され民間企業に安価で売却され、逆に莫大な収入源へと変わった。
結果国の歳入は莫大に増え、国の借金は全てなくなった。

必然的に税金も安くなり、企業は発展し雇用が拡大。労働者は余った金を使い好景気がうまれる。

こうなってくると面白くないのが外国の方々だ。
そんな装置があるのならばうちの国にも使わせろと言ってくる事になる。
めんどくさいのもあったが俺は一科学者。そういった事は政治家の方々にお任せしていたのだが、日本の政治家がここまで無能とは思わなかった。

もったいぶったせいで他国から怒りを買った挙句、納得してないのは日本国じゃなくて俺みたいな発言をかましやがった。
そのせいで俺は某国から怒りを買って（完っ全に逆恨みだが）暗殺される羽目になった。マジ民〇党使えない

「で、俺が死んだ後どうなったんだ？」

「最初はあなたが暗殺されたことに怒って使用許可は出さないっていう方向だったんですけど、所詮多勢に無勢ですから。
すぐに特許使用料をある程度日本に払えば使用できるっていう流れ

になりましたよ」

まあ妥当なところだな。最初からそうしろよ…　俺死に損じゃん

「私は人間を生みだしたことを後悔していました。自分たちの都合で世界を汚し、喰らい、絶滅させた生物の数は数え切れません。」

「まーそうだな。人間ほど地球にとって有害な生物はいないな。俺も一般人の枠にもれず害虫Ｇが、てゆーか虫全般が大嫌いだが、それはあくまで人間だからだな。地球レベルで考えると人間の方が１０００倍有害だ」

「しかしあなたは人間の最も大きな有害を見事に取り除いてくれました。だから是非ともお礼をさせてください」

神のお礼って一体なんだ？俺を殺した奴に天罰でも与えｒ「ちなみにあなたを殺そうと画策した某国の方々には既に天罰を与えておきました」ではないようだ。

「あなたをワンピースの世界に転生させます」

…平行世界か…。これもあっても驚きはしない。時空間移動が理論上可能なのだからあっても不思議ではない。例えば『俺が装置を創った世界』と『創れなかった世界』では進む方向性が全く違うだろう。こんな分岐点はそれこそ無数に存在する。だからワンピースの世界があっても不思議ではない。

とりあえずありがたい。ワンピースの世界と言うのはおいといても、あんな死に方じゃ死にきれないからな。もう一度人生楽しめるのなら万々歳だ。

「いくつか特典をつけましょう。あなたは私を後悔の念から救ってくれました。私の力が及ぶ限り好きなだけどうぞ」

そこまでか…

俺はやりたいようにやっただけだから別にそんなに気にしなくてもいいんだが、もらえるもんはもらっておこう。

「じゃあまず俺が転生する時に俺のワンピースの記憶を消してくれ」

俺がそう言うと女神は驚いたように目を開いた。

「何故ですか？記憶があれば未来が読めます。未来が読めるというのは治安の悪いこの世界では凄いアドバンテージになりますよ？」

「簡単な話だ。

未来が読める事ほどつまらないことはない。人間は未知に飢えているからな。既に知っている内容の授業はつまらんものだろう？

まあ俺が話に絡む事によって、また分岐点が出来て知らない方向へ話が進む可能性も高いが、俺が何より嫌なのは漫画の世界にいるという事だ。

転生した先で出会った人たちを『所詮こいつらはマンガのキャラクターなんだ』と思ってしまうかもしれない。そうしたらせっかくのもう一度の人生が楽しめなくなる。

だから正確に言えば『転生したという記憶が残っていても、この世界が漫画の世界だと認識しないようにしてくれ』という願いだ」

「なるほど。あなたの言うとおりですね。分かりました。」

女神も納得したようだ。

これは最低条件だ。

この願いが聞き入れられなかったら俺は転生を拒否していただろう。

「さて次だが、ＨＵＮＴＥＲ×ＨＵＮＴＥＲの念能力を使えるようにして貰いたい」

念能力は俺が読んだ漫画の中で一番使い勝手がいい能力だ。

「制約と誓約」次第ではどんな能力でも手に入れる事が出来そうだ。

例えば「ネギま」の魔法も、呪文詠唱するという誓約としなければ発動しないという制約を付ければ発動することが出来そうだし。神字を使えばいい道具が出来そうだ。装置を創った俺にとっては楽しすぎる研究分野だ。

「ダメです」

即答された

「マジか…。ヤバい、すげぇショックだ…。研究楽しみにしてたの

に…」

鬱だ。転生やめて成仏しようかな…

「あの…　凄いショック受けてるところ申し訳ないんですが、ムリじゃなくてダメなんです。」

「??どーゆーこと?」

「えっと、ワンピースの世界では念能力はまだ確立されてないだけなんです。
武道の達人レベルになれば無意識に使っている人もいますが精孔が開いてない状態ですので、念能力とは言えないと思いますけど…」

「……結論を言うと?」

「その願いは叶える意味がありません。もともと使えますから」

…よかった　ダメかと思った。

女神の言う無意識に使ってる人は、おそらく精孔を開いていなくてもにじみ出るオーラを凝で固めたりしているのだろう。

「じゃあ俺の攻撃で他人の精孔が開かないようにしてくれ」

これは今決めた。俺の攻撃で相手を強くはしたくない。俺しか使えないんだったら、攻撃しても精孔が開かないだろうから必要なかったが、使える世界なのだから必要になってくる。

「分かりました。ワンピースの世界はアホみたいにしぶとい奴が沢山いますからね…　この設定がなければあっという間に念能力者だらけになってしまうかもしれません」

全くだ。ギャグ補正かもしれんが大した運動能力のないウソップも不死身なんじゃないかと疑うしぶとさをみせる。

さて最後だ。

「んじゃ最後ね。トリコの食材が欲しい」

これは完全に娯楽のためだ。
前世（でいいのか？）では金が有り余ってたからいいもんを結構食って、舌が肥えてしまった。
転生すれば舌は関係なくなるだろうが、前世の記憶が残れば味は覚えているはずだ。

ワンピースの世界は前世と違って品種改良とかは行われてないだろうし、素材の味が数段落ちていそうだ。

「それは少し難しいですね。可能と言えば可能なのですが、生物ですから世界に種を生まなければなりません。種は勝手に成長しますので強力な動物によってほとんどの人類が死滅してしまいます。」

うむ、想定の範囲で拒否られたな。問題ない。

「それは分かっている。俺は念能力の研究を始めたら、箱庭を創ろうと思っている。ネギまのエヴァの別荘のようなものだ。ま、時間軸はずらさないつもりだが…　だから俺が箱庭を創ったらそこに種を生んで欲しい」

「しかしそれなら最初から箱庭を願いで要求すればいいのではないですか？」

「俺は転生するのだろう？トリップではない。つまり俺は生まれ直すことになる。その時箱庭があったら不自然だろう？

と言うのは建前だ。本音は別荘を創ってみたいからだ」

おそらくいけるだろう。ネギまの魔力より、念能力の方がそういったものを創るのに向いていると思う。

「分かりました。貴方が別荘を創り次第、種を生みましょう。しかしこれだけでいいんですか？まだ私はいけますよ？」

「いや十分だろう？正直俺には神字があれば大抵のものは創れると思うし…」

これは本音だ。

「分かりました」

と女神が答えたところで意識が朦朧としてきた。

「それではささやかなお礼ですが是非もう一度の人生を楽しんでください。貴方が次に気が付く時にはワンピースの記憶は消えているでしょう。最後にもう一度言わせていただきます。ありがとうございました！！」

女神が言うと同時に意識が途絶えた……

ｓｉｄｅ　？？？　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　女神

あの方の望みを叶えたが、思ったより願いが少なかった。正直これでは私が納得いかない。

よし！もう少し特典を加えて転生してもらいましょう

満足してもらえればいいのですが…

side 女神 end

プロローグ（後書き）

この小説はご都合主義ですので、よろしくお願いします。

第一話　生い立ち（前書き）

この話から主人公はワンピースの記憶だけがなくなります。
主人公は「なんかよく分からん世界に転生した」と考えていると思ってください。
それ以外の記憶は全てあります。
ただワンピースの記憶がある感じで書いてしまいそうなのが怖いです。気を付けます。

第一話　生い立ち

ｓｉｄｅ　ドゥアイス

無事（？）転生した。
ドレクスラー・Ｄ・ドゥアイスと名付けられた。
無事に？が付いているのは生い立ちがいいとはとてもじゃないけど言えないからだ。

「あの子には近づいてはダメよ！ウイルスが移っても知らないわよ！！」

「シアンもかわいそうよね…　忌子なんか生んでしまうなんて」

俺が生まれたのは、アマゾンリリーという場所だった。
このアマゾンリリーは女人国で男は一人もいなかった。国を挙げて海賊をやっているらしいから、海賊団のメンバーに選ばれた戦士が外界で妊娠して帰ってくることもあるが（てゆーかそれ以外に子供が産まれる原因がない）生まれてくるのは全て女の子だった。

しかし俺が生まれてしまった。
俺は前世と同じ性別に転生出来たことには喜んだが、産まれるとこ

ろが悪かった。

しかも俺の母親は俺を産んですぐに死んでしまったらしく、それもまた疎まれている原因のひとつになっている。
俺の母親は、俺を生んでることからわかると思うが海賊団の一員だった。海賊団に入れなければ俺を宿す機会すらなかったからな。だからこの国では強いほうだったらしいので、「あのシアンが子供を生んだくらいで死ぬはずがない」という考え方も生まれて俺は「忌子」として島中から嫌われている。

まあまだ生後一ヶ月だから目も見えないし「アー」とか「ウー」とかしか話せないから、耳からしか情報が入ってこないが。

そんな俺がまだ生きていられるのは、面倒を見てくれる人達がいるからだ。

ボア・ハンコック、ボア・サンダーソニア、ボア・マリーゴールドの三姉妹だ。上から8歳、6歳、5歳だ。
どうやら彼女達は幼い頃（今も幼いが）に母親を亡くしてしまったらしい。
そんな彼女達の面倒を見てくれたのが俺の母親であるシアンだったらしく、彼女達を実の娘のように可愛がっていたそうだ。

そのため彼女達は母に恩を感じているらしく、俺を実の弟のように可愛がってくれる。
俺は人並みとは言えないが、優しい姉達に囲まれそれなりに幸せな生活をしていた。

しかしそれも長く続かなかった。

ｓｉｄｅ　ドゥアイス　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　ハンコック

私達の母は末妹のマリーを産んだ後、すぐに死んでしまった。

そんな私達をここまで育ててくれたのがシアンだった。

彼女は母と親友だったらしく、何一つ嫌な顔をせずに私達に愛情をくれた。

妹二人は母の記憶がないため、実の母親のように慕っていた。

シアンがある日、いつもより機嫌良く外海から帰って来たので理由を聞いてみたら、子を宿したと嬉しそうに話してくれた。

私達は新たに家族が加わる事が本当に嬉しかった。

特にマリーは末っ子だったため、妹が出来る事が嬉しくてしかたがなかったようだ。

新しい妹とシアンと5人で暮らすという幸せな未来を想像していた。

しかし、それは想像で終わってしまった。

シアンが死んでしまった。

子を産む事に全力を尽くしたシアンは、力尽きてしまったのだ。

しかも産まれたのは妹ではなく弟だった。

産まれるはずのない弟。

しかしそれでもシアンは力尽きる直前に息子を愛おしそうに抱きしめた。

「…もしかしたらと思っていたわ…。

私はアマゾン・リリーで産まれたわけではないから…」

シアンは昔、海で漂流していたところを九蛇の海賊団に拾われたらしい。

行くあてがなかったところを、先代皇帝がアマゾン・リリーに迎え入れてくれた。だから前皇帝には感謝しかないと、常々言っていた。

「だから男の子の名前も一応考えていたのよ…

ドゥアイス…
ドレクスラー・D・ドゥアイス…
それがこの子の名前」

「ハンコック、ソニア、マリー。ドゥアイスをよろしくね…
男子禁制のこの国ではこの子は疎まれるかもしれない……
私もよそ者だったから、最初は疎まれたわ。でも貴女達のお母さん
が優しくしてくれたから私は生きてこれたわ…」

「嫌だよシアン！！！最期みたいな事言わないでよ！！」

「そうだよ！！！死んじゃやだよ！！」

ソニアとマリーが泣きながらシアンに縋り付いている。

「ソニア…、マリー…。ちゃんとシアンの話を聞くのだ…」

私も縋り付きたい衝動にかられたが耐えて、そう言い聞かせた。

「ありがとう、ハンコック…
ドゥアイスをよろしくね…」

「うん！！任せてくれ！
男だって関係ない！この子も大事な私の家族だ！」

私がそう言うとシアンはにっこりと笑って、ゆっくりと目を閉じていった。

シアンを亡くしてから一ヶ月がたった。

予想通り、ドゥアイスは島中から疎まれる存在となってしまった。

アマゾン・リリー発足以来の初めての男という事で「忌子」として扱われている。

もちろん私達姉妹はそんなことはない。

シアンの望みであるし、何より大切な弟なのだから。

私達は疎まれながらも幸せな生活をおくっていた。

しかしその幸せも長くは続かなかった。

「何故ドゥアイスを外海へ連れていったのですか！？」

そう、ドゥアイスが九蛇の海賊団によって外海に連れ出されてしま

った。
私達が寝ている間に家に忍び込まれ、海賊船で連れていかれてしまったのだ。

私は今、皇帝と話している。
ドゥアイスは大切な家族。勝手に連れていかれて黙ってはいられなかった。

本来ならとても話が出来る方ではないし、話せてもこんな口の聞き方など出来るわけもない。

だが冷静に話が出来るような状況ではない。

「何故？決まっておるじゃろう？あやつは男。ウイルスを持っておる。島にウイルスが蔓延したらどうするのじゃ？」

「しかし、ドゥアイスはこの国で産まれました！男であってもウイルスを持っているとは限りません！」

「確かに持っていないかもしれぬ。しかし持っているかもしれぬ。そんな不確かな存在をこの国には置いてはおけぬ。
事実、島中から不安な声が挙がっている。
お前は忌子一人のために島中の者の不安を押し潰せと言うのか？」

もっともな意見だが黙ってはいられない。

「っ！？し、しかし！」

「大体、先代がよそ者を国に入れるからこんな事になるのじゃ。所詮よそ者なのじゃ。男なんぞ産みおって」

「っ！？取り消してください！！シアンは優秀な戦士です！」

育ての親のシアンを悪く言われては黙ってなんかはいられない。

「確かにあやつは優秀な戦士じゃったが、よそ者はよそ者じゃ。そもそもあやつ自身がウイルスを持っていたかもしれん。全く親子揃って迷惑な奴らじゃ…」

っ！？この国の皇帝がこんな人だったなんて…

私は怒りで腹が煮え繰り返りそうだった。

「よくそんな事を言えますね！？亡き国民を愚弄するなんて、それが皇帝のする事ですか！？」

「そなたは口が過ぎるぞ！まだ子供だと思って大目に見ておれば付け上がりおって！

そもそも本来男がこの国に足を踏み入れた時点で極刑は免れん！

それを国外追放だけで済ましてやったのに文句を言われる筋合いはない！！
もう話は終わりじゃ！出て行け！」

そう言われて私は城からたたき出された。

「姉様……」

城の外で待っていたソニアとマリーはたたき出された様子で、皇帝の説得は無理だったと悟ったらしい。

私は決意した…

「ソニア、マリー。済まない。説得は無理だった…」

「うん…
正直無理な願いだとは思っていたから…」

ソニアが気を使ってくれた。

「ああ、だが私は諦めない。必ずドゥアイスを連れ戻す！」

「っ！？無理よ！私達は海賊団のメンバーじゃないから外海に出られないわ！」

「そうよ、姉様！遊蛇がいないとカームベルトは危険過ぎるわ！まずは海賊団のメンバーに選ばれないと！！」

「分かってる。今すぐに連れ戻す事は無理だ。それに連れ戻したとしても、今のままじゃ結局国外追放されてしまう。いや、次は極刑かもしれない。」

「せれじゃあ意味ないじゃない！」

マリーがヒステリックに叫ぶ。

「私は皇帝を目指す。」

「「え？」」

ソニアとマリーがポカンとしている。
こんな時なのに思わず笑ってしまった。

「私が皇帝になればドゥアイスが戻って来れる状況を作れる。そうすれば４人でまた暮らせる。」

この国の皇帝は世襲ではない。国で一番強い者が皇帝を名乗る事が出来る。

１０年に一度、もしくは現皇帝がなんらかの理由で退位した時に国を挙げて行われる武々の大会の優勝者が次の皇帝を引き継ぐ。

今年行われたばかりだから次の大会は恐らく１０年後だ。

正直言って厳しい道だ。

現皇帝はまだ若いから次の大会では老いによる実力低下は期待出来ないし、私はまだ外海に出ることが出来ないため経験を積む事がなかなか出来ない。

しかし私はもう決意したのだ。

「でもドゥアイスはまだ赤ん坊よ！その時まで生きてられるか分からないわ！

それにもし生きていられたとしても私達を覚えてるはずないじゃない！」とマリーが言う。

もっともな意見だ。

普通生後一ヶ月の赤ん坊が捨てられて生きていられるはずがない。

だけど…

「マリー！！私達を覚えてるかどうかなんて関係ない！

私達は家族なんだ！ドゥアイスが帰ってくる場所を作る事が私達の勤めだ！

それにドゥアイスは必ず生きていてくれる！

私達はそう信じてやれる事をやらなきゃいけないんだ！」

「そうよね…
分かったわ姉様！私も協力する！」
ソニアが賛成してくれた。後はマリーだけだ。

「マリー。貴女が悲しむのも分かるわ。ドゥアイスがシアンのお腹の中に宿ったと知った時に一番喜んでいたのは貴女だもの…
でも、だからといって悲しんでいるだけじゃ、ドゥアイスに何もしてあげられないわ。
私達に出来る事をしないとドゥアイスは帰って来れない。
また４人で暮らせる様に頑張らないと！」

「…分かったわ、姉様。ドゥアイスが生きていてくれる事を信じて、私も協力する！」

ソニアが私の言いたい事を言ってくれて、マリーも協力すると言ってくれた。

「それじゃ、早速今日から今まで以上の鍛練をするぞ！
まずは海賊団の一員にならなければな！」

そう言って私は妹達を、そして自分を奮い立たせた。

後日、シアンと仲の良かった海賊団の一人がドゥアイスの事を教えてくれた。

彼女がシャボンディ諸島という所にドゥアイスを捨てたらしい。
ゆりかごに名前と拾ってくださいという手紙を入れて…
彼女はドゥアイスの国外追放を反対してくれた数少ない人の一人だったので少しホッとした。
彼女なら余り酷い所には捨てたりしないだろう。

後は私達が頑張るだけだ。

待っていろ、ドゥアイス！
必ず迎えに行くからな！！

ｓｉｄｅ　ハンコック　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　レイリー

今日は久しぶりにシャボンディパークにやってきた。
札付きの身には多少危険な場所だが、人通りが多く女を引っ掛けやすい。昨日博打で全財産をすったから飯も食えんのだ。まだシャッキーのところに帰る気はないので適当な女を作ってしばらく過ごそうと思ったのだ。

しかし今日は生憎の雨。人がほとんどいなく、適当な女も見当たらず途方に暮れていたんだがシャボンディパークの入口に何かが落ちているのを見つけた。

近づいてみるとまだ生まれたばかりと言ってもいいような赤ん坊だった。
こんな時代だ。子供を産んだはいいが自分の命を守るのが精一杯という人間が子供を捨てるのも珍しくはない。
いつもなら見てみぬ振りをするところだが少し気になることがある。

赤ん坊が泣いていないのだ。
赤ん坊が雨の中放置されているのに泣いてないのは異常といってもいい。
別に死んでいるわけではない。こちらをジーっと見ているのだ。

思わず気を惹かれて近づいてみると一通の手紙が添えられていた。
「訳あって故郷で育てることができなくなりました。お願いですから彼を育ててください。
名はドレクスラー・D・ドゥアイスといいます。どうかよろしくお願いします。」
と書かれていた。

……『D』か……

ロジャー、これも何かの縁かな？

気が変わった私は、その赤ん坊を連れてシャッキーのいるバーへと帰ることを決めた。

side　レイリー　end

第一話　生い立ち（後書き）

しばらくは週一で更新予定です。思ったよりストックがたまってきたら更新スピードをあげたいとおもいます。

第二話　修行まで

ｓｉｄｅ　ドゥアイス

俺がレイリーに拾われてから3年が過ぎた。
レイリーとシャッキーには本当に感謝している。
シャボンディパークの入口に捨てられた時はダメかと思った。
捨てられた日に限って雨が降るとは、俺には運がないんだろうか…
ともかくレイリーのおかげで命拾いした。

この三年間はこの世界について調べたり、自分の能力を把握したりした。
一年は話すことも歩くことも出来ないからひたすら『点』でじっくりと精孔を開こうと頑張っていた。
といっても一ヶ月程で精孔は開いた。
念を使えない世界から使える世界に来たので、若干違和感を感じたのだ。
そこを意識しながら『点』をしてみたらすぐに開く事が出来た。

開いた後は『纏』でオーラを安定させた。
『纏』をすると老化が進まないと原作に書いてあったため、成長が遅くなってしまうと考えていたが大丈夫だった。どうやらマイナス面はないようだ。

ハッキリ言って不気味な子供だろう。
腹が減った時とトイレの時しか泣かないのだから。

しかしそんな俺を、レイリーもシャッキーも
「頭がいい子なんだな」と受け入れてくれた。

ある程度話したり歩いたり出来る様になったら、次はこの世界について調べてみた。

どうやら今は「大海賊時代」と呼ばれているらしく、世界に海賊が蔓延っているようだ。
元いた世界の大航海時代に似ている。科学技術も似たようなものだろう。
最初は、なんつー治安が悪い世界だ、と思っていたが、どうやら海賊イコール悪というわけでもないらしい。
それどころか海賊が守っている国もあるくらいだ。
魚人島も「白ひげ」という海賊が守っているらしい。

てゆーかレイリーもシャッキーも海賊だったらしい。
まあ店の名前が「シャッキー，Ｓ　ぼったくりＢＡＲ」だからな。
とてもじゃないがまともな人が経営してる店とは思えない。
そーいや俺の母親も海賊だったなと、ここで思い出した。

海賊には『モーガニア』と『ピースメイン』の二種類がいるらしく、『モーガニア』は俺の想像通りの海賊、『ピースメイン』は『モーガニア』をカモにしたり、財宝を見つけたりする海賊らしい。

レイリーもシャッキーも『ピースメイン』だったみたいだから良かった。

てゆーかレイリーの名前は目茶苦茶有名だった。
世界で唯一世界一周を達成した海賊「ゴールド・ロジャー」の海賊団の副船長だった。

海賊団が解散した後、ここでシャッキーと暮らしているようだ。
まあレイリーは自由人だから、別にシャッキーと結婚しているわけでもなく、たまに出かけては1ヶ月帰らない時もあった。

逆に「天竜人」は馬鹿みたいな権力があるらしいが、やっていることは海賊よりひどいらしい。

さらにこの世界には「悪魔の実」という不思議な実があるらしい。
この実を食べると一生泳げない体になってしまうが、不思議な能力を得る事が出来るらしい。
念能力がある俺にとってはそんなに魅力的な実とは思わないが、一億ベリーで売れるらしいので探してみるのも面白いかもしれない。

俺は別にわざわざ賞金首になるつもりはないが、冒険はしてみたい。
ゴールド・ロジャーが残したワンピースも見つけてみたい気持ちもある。
海賊を目指そうとは思わないが、レイリーもシャッキーもわざわざ『ピースメイン』とはいえ海賊を名乗っていたのだ。海賊を名乗ることに誇りがあったんだろう。

だから将来旅をしたとき、賞金稼ぎをしながら世界を見て回るつもりだが、気に入った海賊がいたら仲間にしてもらってもいいかもしれない。

神字の研究は思ったとおりとても興味深いものだった。
この三年で俺は二つほど神字の描かれたモノを生み出した。

一つは『呪念錠』。
割とＨＵＮＴＥＲ×ＨＵＮＴＥＲのｓｓではお決まりの物体だ。
幽々白書の『呪霊錠』の念バージョンで、念を封じ込めるようになっている。
ちなみに指輪である。

もう一つは『呪体錠』。
名前からわかるとは思うが、今度は筋力バージョンだ。
これはリストバンド型である。

一年前に二つとも付けたのだが、ようやく普通に動ける様になってきた。
これでまともに体術の修行が出来る。

レイリーが帰ってきたら頼んでみよう。

ｓｉｄｅ　ドゥアイス　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　　レイリー

ドゥアイスは本当に面白い子供だ。
まだしゃべることも出来なかったときも、何かようがあるとき以外は泣かなかった。
泣くときも、まるで喋ることができないから仕方なく泣いているように見えた。

一歳を過ぎると歩きはじめ、つたないながらも（ろれつが回らなかったのだろう）一歳とは思えないほど言葉を使いだした。
何やら部屋に閉じこもって何かをしだしたのもこの頃からだった。

余りにも成長が早いので（体は普通だが）最近一度聞いてみたら、どうやら生後一週間以降の記憶があるらしい。私と出会ったときには既に物心が付いていたようだ。

つまり、どこからこのシャボンディ諸島に捨てられたかも覚えていて、話を聞くとあの女ヶ島のアマゾンリリーで産まれたらしい。

思わず友人である先々代皇帝グロリオーサの顔が浮かんだ。
女しか産まれるはずのないアマゾンリリーで男が産まれてしまったため捨てられてしまったようだ。

家族を恨んでないのかとドゥアイスに聞いてみると
「俺を捨てたのは俺の家族じゃないからな。
俺の母親は俺を産んですぐに死んじゃったし、一ヶ月だけとはいえ俺と一緒に暮らしてた義姉達は俺を大事にしてくれた。
そんな義姉達に黙って連れてこられたから、俺の家族は誰も悪くない。
それにここに捨てられたからレイリーとシャッキーに会えたんだ。
そう考えるとある意味ラッキーだったのかもな！」
と、3歳児のセリフとは思えないことを言ってきた。

最初はグロリオーサに引き渡す事も考えたが、このセリフを聞いて思いとどまった。

こいつの行く末を見てみたいと感じてしまったからだ。

ある日、一週間ほどふらついて、少し早いが家に帰ろうとしたら途中で懐かしい顔に会った。

「おお、ハチ！久しぶりじゃないか！」

「ニュ～、ご無沙汰してんなーレイリー」

ロジャーが海賊団を解散した後、海で漂流していたところを助けてくれたのがこのハチだった。
そのあと仲良くなったんだが、一年ほどしたら余り来なくなってしまった。
まあ私が頻繁に来るのはやめるように言ったんだが。この諸島は魚人や人魚にとっては危険な場所だからな。

「丁度よかった。これからシャッキーんところ行こうと思ってたんだ。レイリーはいついるか分かんねーからな。」

「ハハハッ!!それはタイミングが良かったな!私も今日一週間ぶりに帰るところだ。」

「ニュ?レイリー、前会った時より楽しそうな顔してんな〜。なんか良いことでもあったのか?」

そういえばハチはドゥアイスを拾ってからはまだウチに来たことは無かったな。

「ふむ、分かるか?三年ほど前に面白い子供を拾ってな。それ以来シャッキーのところで育てているんだ。ハチ、お前にも紹介したかったから丁度良かったな。」

「ニュ〜。そいつ人間の子供か?俺人間の子供に虐められたことあるからな〜。
俺のこと虐めたりしないか?」

「大丈夫だ。私とシャッキーが育てたんだぞ？
それにドゥアイスも一回魚人に会ってみたいと言っていたからな。」

「ニュ、それもそうか。いい奴なら友達になってみたいな～。どんな奴だ？」

「表現が難しいな。強いて言うなら、子供っぽい大人をまた子供に戻した様な奴だ。」

とっさに出た言葉だが、我ながらドゥアイスの特徴を良く捉えた表現だと思う。

「シャッキー、ドゥアイス、今帰ったぞ。」

「あら、お帰りなさい。」

「お帰り、レイリー。今回は早かったじゃん。」

いつもは一ヶ月位は家を空けるからな。そう言われても仕方がない。

「二人とも今日はお客さんが来ているぞ。」

そう言った時にハチがドアを開けて店に入ってくる。

「ニュ～、ご無沙汰してんなシャッキー。」

「あら、はっちゃ～ん！！久しぶりね！元気にしてた？」

シャッキーとハチが再会を喜んでいる。

「おお！スゲー、魚人だ。

レイリー、こいつがあんたが言ってたハチか？」

初めて魚人を見たドゥアイスは興奮している。

「そうだ。

ハチ、こいつがドゥアイスだ。」

「ニュ～、初めましてだな。俺はハチだ。よろしくな～」

「ああ、俺はドゥアイス。よろしくな！」

予想通りドゥアイスとハチは仲良くなれそうだ。

ハチは1日だけうちに泊まって、翌日の昼頃に帰っていった。

ドゥアイスは初めての友達だったから少し寂しそうにしていたが、

ハチならまたひょっこり顔を出すだろう。

そんな事を考えていたらドゥアイスが私に話しかけてきた。

「そうだレイリー、頼みがあるんだけど…」

「お前が頼み事なんて珍しいな。なんだ？」

「俺に戦い方を教えてくれ！！」

これは半分予想通りだが、半分は驚いた。

ドゥアイスは好奇心旺盛なやつだ。
海賊時代の話をした時は目を輝かせて聞いていたので、いつかは旅に出たいと言ってくることは分かっていた。その準備のために戦い方を請いてくることも。

驚いたのは思ったより早かったことだ。まだ三歳、戦闘を教える歳ではない。

しかし私もこの時を待っていたのかもしれない。
ロジャーが創ったこの時代にドゥアイスが飛び込んだらどうなるのかを見てみたいと思っていたのだ。

「…分かった。私に教えを請うとは、覚悟ができてるんだろうな？
私は厳しいぞ？」

「ああ！！望むところだ！」

「返事は合格だな。それでは明日の朝、修行場所に出発するからな。今日中に荷物をまとめておけ。」

「分かった！」

ドゥアイスはそう言うと、早速自分の部屋に駆け込んで準備を始めた。

「あら、二人とも出て行っちゃうの？」

シャッキーが少し寂しそうに言う。

私がどこかをふらつくのはいつものことだが、ドゥアイスがこの家を出るのは初めてのことだからな。

「仕方あるまい。鍛錬とはいえ私がこの島で暴れる訳にはいかないだろう。近くの無人島を使う。
電伝虫を持っていくからコーティングの仕事が入ったら連絡してくれ。」

「分かったわ。それにしても寂しくなるわね…」

「なに、年に一回は帰らせるさ。航海術も身に付けんとイカンからな。」

「ちゃんと前もって連絡してよ？せっかくはっちゃんとも友達になれたんだから、はっちゃんが来てくれた時に二人が居なかったらかわいそうだから…」

「ああ、分かってる。」

さて、それでは近くの無人島のエターナルポースを探さなくてはな。

side　レイリー　end

第二話　修行まで（後書き）

思ったより転生者なのに原作知識がないってムズイです。
なんか世界観の説明が多くなっちゃいます

第三話　修行開始（前書き）

書くのムズイですね。毎日更新する人マジで尊敬します。

第三話　修行開始

ｓｉｄｅ　ドゥアイス

レイリーとの修行が始まった。
シャボンディ諸島の南西にある無人島だ。この無人島は今まで人が暮らしていた事はなく、名前がない。

レイリーに覇気の存在を教えられた。
覇気の説明を受けて、こういうところに念能力を使っているのかと思った。
武装色の覇気は多分『凝』だ。見聞色の覇気は『円』に近いものがあるが、絶で気配を殺したらレイリーは感じる事が出来なくなったため多分違う。
覇王色の覇気は良く分からない。強いて言うなら、『練』による威圧に似ているが、コントロールして周りにいる無関係な人間に害を与えないようにも出来るみたいだし、適正のない人は一生使える能力ではないので違う。

分かってはいたがレイリーはめちゃめちゃ厳しかった。
まずは体力作りだと言って、三歳児に腕立て１０００回１０セットさせるのは虐待の域に達していると思うのは俺だけか？
この世界は前世の世界とは人間の構造が違うのかもしれない。レイリーの無茶とも思える課題はクリア出来るし、そんな事が出来るのに俺は別にマッチョではない。それに巨人族でもないのに身長が６メートル以上ある人間も居るみたいだし、ある程度は常識を捨てて置かないと疲れてしまう。

子供の頃に筋肉を付け過ぎたら身長が伸びなくなるんじゃないかと心配もしたが、レイリーが大丈夫というのだから大丈夫なんだろう。

俺の一日は朝６時にレイリーに叩き起こされて始まる。
まずは朝食と昼食の食材を取りに動物を狩りに行く。この世界の俺の体は燃費が悪いのか前世の比じゃない量の食事を取らないと、すぐに腹が減ってしまう。もしかしたら女神が、将来箱庭を作ってトリコの食材を手に入れることが出来る状態になった時のためにそうしたのかもしれない。ありがたいのかありがた迷惑なのかよくわからんな。おかげでシャッキーのところに居る時は家計を圧迫してしまい、シャッキーのぼったくりにあう被害者が増えてしまった。

朝食を済ましたら体力作りだ。
レイリーは、それは無理だろうと思うような課題でも死ぬ気になれば出来るという絶妙な課題を毎回出してくる。おかげで今は腕立ての時に背中に岩を乗っけられている。

それが終わると昼食だが、これの調達は前述した通り朝のうちに済ませてある。理由は筋トレのせいで動物を狩る力なんか残ってないからだ。しかしそれでも飯を食えば回復するのだからおかしな体である。

午後はレイリーとの組手がメインだ。
レイリーは世界一周をした数少ない人間だ。それに比べて俺は、前世では研究第一で喧嘩もしたことないような人間だった。戦闘の経験値がまるで違うので歯が立たない。まあ、まだ立つとは思っていないからいいと言えばいいんだが、それでもやっぱり悔しい。
だから念の本格的な修業は、レイリーに一撃入れてからだと決めた。多分念を使えばレイリーに一撃位は入れる事は出来ると思うが、な

んか悔しいので使わない。だから修業中は纏も解いている。
レイリーには一撃入れたら後は旅に出て自己流で腕を磨くと言ってある。

夕方五時位で組手は終わる。
その後は夕食まで自由時間だ。初日は案外早い時間で切り上げるんだなと思っていたが、俺の研究時間を作ってくれてるんだなと思った。レイリーは休むのも修行の内だと言っていたが、俺が内緒で研究しているから話を合わせてくれたのだろう。こういうところもあってレイリーには頭があがらない。

後は夕食をとって１０時には寝る。成長期の子供だから８時間は寝ないと成長しないからな。

レイリーはたまにシャボンディ諸島に帰る。
コーティングの仕事が入るとシャッキーから連絡が来るからだ。その時は好きに鍛錬していろと言ってからシャボンディ諸島に帰っていく。

この時はひたすらに筋トレをこなし、基礎体力の向上に努めた。この世界での自分の体は鍛えれば鍛えるほど強くなれるので筋トレは前世よりも遥かに楽しい。自分の成長が目に見えて分かるからだ。
とは言ってもツライ事には変わりないが…。

４歳になる頃に箱庭が完成した。まだ当分レイリーとの修行が終わりそうもないのでまだ入ってない。だから本当に中がちゃんと機能しているかは確かめていないが、理論上は大丈夫なはずだ。しばらくは研究を休んで打倒レイリーに集中しよう。

ある日、レイリーがいつものように仕事を終えて、無人島に帰ってきた。

「ドゥアイス、土産だ、喜べ。」

そう言ってレイリーが一冊の本を渡してきた。この2年間、いやレイリーと出会ってから5年間で初めての土産だった。
タイトルを見てみると「六式教本」という本だった。

「海軍から盗んだものだ。お前の修行にいいと思ってな…
六式というのは海軍や世界政府の諜報員が使う体技の事だ。私も昔使い手に追われた事があるが、厄介な体技だったぞ。身に付けて損はあるまい…」

レイリー…今までなんで土産持って来ないんだとか、筋トレキツすぎじゃボケとか、そのヒゲいつか剃ってやるとか思っていたけど俺のために危険をおかしてまで海軍に忍び込んでくれるなんて…」

「……ああ、そうだとも。私はいつでもお前の為を思っているぞ。
さあ今日は15時間耐久組手だ。早くお前も旅立ちたいだろう？そのためにはもってこいの修行だ。
さあ死ぬ気でよけなければ死んでしまうぞ。」

……
声に出してしまっていたようだ。ヤバイ！なんか旅立つ先が違う気がする…

「いや～、きょ、今日はレイリーが持ってきてくれた本を読ませて

もらお～かな～って」
「なに、本はいつでも読めるさ…
それより今日は天気がいいから体を動かしたほうがいいと思うぞ」
雨で濡れたヒゲを触りながら言うレイリーに「俺死んだかも」と思った。
レイリーは「剣など久しぶりだ」とか言って、刀を振りながら広場に向かっていった。

後日、年に一回の帰省の時にシャッキーから聞いたが、「六式教本」はシャボンディ諸島に帰ったレイリーを見つけた海軍の軍人が、レイリーを捉えようとしたのを返り討ちにしたときに手に入れたものらしい。

side　ドゥアイス　end

side　ハンコック

ソニアとマリーとの鍛錬の成果が出たおかげで九蛇海賊団のメンバーになることが出来た。私はドゥアイスの一件で皇帝に嫌われているからか、メンバーに選ばれたのが妹達と同じタイミングだったがそれはよしとしよう。

これでまだ迎えに行く事はできないが、ドゥアイスの情報を手に入れる事が出来るかもしれないと三人で喜んでいた。

しかし現実は残酷だった。

「お次の商品は～、あの伝説の女ヶ島からやってきた九蛇海賊団の美少女三姉妹、ボア三姉妹だぁ～～！！左からサンダーソニア、ハンコック、マリーゴールドの三人セットでのご提供！！価格はセットですのでサービス価格の１２０万ベリースタートでいきま～～す！！それでは入札スターーートッ！！」

初めての航海、初めての海戦、初めての殺人で身も心も疲れきった私たちは買出しの途中に攫われてしまった。
普段なら勝てる相手も、状況が状況だったので大した抵抗も出来なかった。

連れてこられた先はシャボンディ諸島。
そう、ドゥアイスが捨てられた場所だった。いつか来たいとは思っていたが、こんな形は望んでいなかった。

「２００万ベリー！！」

「３００万ベリー！！」

「５００万ベリー！！！」

どんどん釣り上がっていく自分たちの値段に、釣り上げていく人間

たちに吐き気がする…

こんな…

「６００万ベリー！！」

こんな…

「８００万ベリー！！！！」

こんな醜い人間達のそばに捨てられてしまっただなんてっ！

「１０００万ベリー！！！１０００万ベリーで買うえ～～！！！！」

「さぁ～～！！１０００万ベリーが出ました！！他には居ないですか！？

はいっ、決まりました～～！！九蛇海賊団の美少女三姉妹は、世界貴族ジャルマック聖の１０００万ベリーにて落札が決まりました～～！！お買い上げありがとうございま～～～す！！」

ドゥアイス、私はお前がこのような者達に染められていないことを、ただただ願う…

それから私たちの地獄の日々が始まった……

ｓｉｄｅ　ハンコック　ｅｎｄ

第三話　修行開始（後書き）

ハンコックは一度奴隷になってもらいました。助けても良かったんですが先のストーリーがうまくいかなかったです。

第四話　修行一時終了（前書き）

戦闘シーンはムズイって本当なんですね…。苦労しました。
今回まだ単行本に乗ってないところが多少出てくるので気を付けてください

第四話　修行一時終了

side　ドゥアイス

修業を初めてからそろそろ5年がたつ。

年に一度シャッキーの所に航海術の訓練を兼ねて帰る以外は修業浸けの5年だ。

レイリーがくれた『六式教本』はとても有意義なものだった。恐らく体術ではこの世界で1番と言ってもいい格闘術だろう。一通り『六式』は使えるようになった。

この『六式』も念能力を活用している所がある。

『指銃』は指に『凝』でオーラを集めて打ち込むものっぽいし、『鉄塊』は『堅』に近い。まあ精孔が開いてないのに『堅』が出来るわけないから、『纏』かもしれない。

『纏』なら精孔を開いてなくても体からにじみ出るオーラを使えば出来るからな。

と思ってたけど違ったな。六式は純粋な体術みたいだ。

一月に一度午前と午後の修業の順番が逆の日がある。この日は卒業試験の日だ。流石に筋トレ後の体でレイリーに挑んでも一撃入れられるとは思えないからだ。

まあ今まで59回落ちてるわけだが…。そして今日が60回目の卒業試験なわけだ。

「レイリー!!今日こそは一撃入れてやるぜ!!」

「やれやれ、その台詞は５０回は聞いたぞ…
まだまだガキのお前には、無理だ。」

「うるせー！今日はぶっ殺す気で行くからな！」

「分かった分かった」

チクショウ、レイリーの奴どうせ無理だと思ってやがるな。
まあ５９回も同じやり取りしてるからな…
天丼にも程がある…

「じゃあ行くぞ！剃！」

レイリーの後ろに回り込んだが流石に読んでいる。
見聞色の覇気を使って俺の位置を把握して、見もせず竹刀を振ってくる。
覇気を纏わせているから（これ完璧『周』だよな）とんでもない威力なので鉄塊で受けずに紙絵でかわす。

「流石に無理か…」

「当たり前だ。そんなんじゃ一生かかっても無理だぞ！」
そう言って追撃の一撃を打ち下ろしてくるのを月歩でかわす。

「嵐脚！」
俺の嵐脚がレイリーに向かって行くが、当然のようにレイリーはかわす。
そして剃を使ってるわけでもないのにとんでもないスピードで俺に接近して突きを放ってくるのを鉄塊で受けるがダメージを負う。

「ぐっ！やっぱり武装色の覇気は鉄塊じゃ無理か！」
多分『堅』なら大丈夫だとは思うが、俺はこの試験は念能力（俺しか使えないだろう能力）を使わずにクリアすると決めている。
鉄塊を使えばダメージを軽減する事は出来るが無傷は無理だった。

「その程度の鉄塊を破れんでどうする？海軍にはもっと強い鉄塊を使う奴がいるぞ！」

レイリーが追撃をするのを剃でかわすが、レイリーの見聞色の覇気の前には余り意味がなく、すぐに追いつかれて竹刀を振り下ろされる。

その後、攻撃を仕掛けても見聞色の覇気で見破られカウンター。仕掛けなくても鉄塊ではダメージを負ってしまう攻撃を剃か月歩でかわしたところを追撃を受け、俺の体はボロボロになっている。
紙絵を使えばダメージを負わずに済みそうだが、紙絵は全身を脱力して攻撃をかわす体技なので攻撃に転じづらいし、覇気を纏った攻撃を喰らったら死にかねないので使えない。

レイリーもそこを分かってるから見聞色の覇気を多用して反撃の糸口を掴ませないようにしている。

だがここまでは読み通りだ！

俺は剃を使ってレイリーから距離をとる。
今まではレイリーの近くに移動していたから先読みされて追撃を喰らっていたが、剃を使えないレイリーは速さでは俺に劣るので追っては来ない。

「どうした！逃げていては私に攻撃出来ないぞ！」

「レイリー！次が最後の一撃だ！ケリをつけよう！」

「…ケリはもう５９回ついているだろう…」

「…そこは流せよ…これだから空気読めないオッサンは…」

「ほう…お前は私のことをそう思っていたのか…いいだろう、受けてたってやる…」

…思わず言ってしまった発言にレイリーが静かに怒っている。
なんか予定外にレイリーの攻撃力を上げてしまったが、最後の勝負に受けてたってくれたので良しとしよう…。
うん、ラッキーだ。
そう自分に言い聞かせて俺は構えをとる。

「剃！」
レイリーの後ろに回り込む。
今回の試験の最初の攻防と同じだ。

「何も変わってないぞ！」そう言ってレイリーは竹刀を振ってくる。

そう、何も変わってないからレイリーも同じ攻撃をしてくる。

「だから避けられる！」
レイリーの竹刀は最初の攻防と同じ軌道で俺に向かってくる。
最初の攻防では紙絵で避けたが、今回は剃でまたレイリーの後ろに回り込む。

連続して剃を使うのは足に負担がかかるが出し惜しみはしない。
「甘いっ！」
だがレイリーはそこまで読んでいた。
今までで最高の覇気を込めた一撃を俺に放ってきた。
だがレイリーがここまで読んでいる事は俺も読んでいる！
「獣厳！！」
俺はレイリーの一撃を喰らいながら渾身の一撃をレイリーにぶつけた。

「はっ！？」
「気がついたか？」
俺が飛び起きたのを見てレイリーが声をかけてくる。
「気絶してたのか…」
「私の渾身の一撃を喰らったんだ。気絶して当たり前だ。」
…どうやらＫＹ発言は思ったよりレイリーを怒らせていたらしい。
まさか渾身の一撃を繰り出してくるとは…

「そうか…また駄目だったか…」
今回こそはイケると思ったが仕方がない。また鍛え直して再挑戦だ。
「…まさか鉄塊拳法を身につけていたとはな…」
そう、最後は鉄塊拳法を使ってレイリーの一撃に堪えて、渾身の一撃をぶち込む作戦だった。
「うん、隠し玉として取っておいたんだ。だけどレイリーの一撃は耐えられなかったみたいだな…」
耐え切れずに気絶してしまっては意味がない。
「…確かに耐え切れずに気絶はしたが、私の裏をかくとはな。予想してなかった一撃だった。」
そう言ってレイリーは服をめくりあげる。
そこには拳型の痣があった。
「十分な一撃とは言えないが、一撃は一撃だ。」
「……へ？」
「合格だ。好きにすればいい。」
「……マジで？」
「なんだ、不満か？」
「いや不満じゃないけど、実感が…」
「湧かんか？まあ気絶しながらだったからな。半分はマグレみたい

なもんだ。」

「いや、マグレじゃ困るんだが…」

俺はこれから賞金稼ぎをしながら旅をするつもりだ。マグレに頼っては生きていけない。

「半分だと言っただろう。それに、もう私が教えてやれる事はない。」

目を少し伏せながらレイリーが言う。

「お前の基礎は鍛え上げているし、もう覇気の使い方を覚えている。後は体の成長と経験を積めばいい。」

確かに俺はレイリー以外の人と戦った事がないし、所詮まだ8歳だ。

「それに強くなるアテもあるのだろう？自分にあった戦い方を身につけろ。」

「……本当に、いいのか？」

「お前もしつこいな…」

少しレイリーが呆れたように言う。

「っ、よっしゃあぁ～～！！」

思わずガッツポーズをしながら仰向けに倒れてしまった。

「全く…一応言っておくが世界には私より強い奴がいるんだぞ。私に一撃入れたくらいで慢心するなよ。」

「ああ、分かってる！レイリーも本気じゃなかったしな。」

「ふん、分かってるじゃないか…」
当たり前だ。『冥王』と呼ばれたレイリーに今の俺が一撃を入れるなんて手加減してくれてなきゃ無理に決まってる。
「ともかく修業は終わりだ。シャッキーの所に帰るぞ…」
「了解！」
そうして俺は5年の時を過ごした無人島に別れを告げた。

「シャッキー、ただいま！」
一年ぶりにシャッキーの所に帰ってきた。
「あら、ドゥアイス、レイさん！お帰りなさい。連絡もしないでどうしたの？」
いつもは帰る日をハチがくる日に合わせる為に連絡するからシャッキーが驚いている。
「ドゥアイスの修業に目処がついたんだ。後は好きに旅をすればいいと思ってな…」
「良かったじゃない、ドゥアイス！それにしてもまた背が伸びたんじゃない？」
「まあまだ8歳だからな。1年会わなきゃ背も伸びるよ」

俺の今の身長は１４５ｃｍ程だ。前の世界で言えば歳の割にはでかい方だろう。

「そっか…それじゃ旅に出るのね？いつ頃出発するの？」

「う～ん、出発する前にハチに会っときたいし、船とかも手に入れなきゃいけないからしばらくはいると思うよ。」

俺はある程度の強さは手に入れたが、船や賞金首のリスト、ログポースなど旅に必要なものを持っていない。
船とログポースがなければ旅も出来ない。

「そう、良かったわ！すぐに出発するなんて寂しいもの。それじゃ今日はお祝いしなきゃ！」

「よし、ドゥアイス。海でなんか採ってこい。」

「え～、俺が？俺主役じゃないの？」

「ほとんどお前の腹に収まるんだから当たり前だろう。」

「う〝っ」
それを言われるとどうしようもなくなる。

「分かったよ。」
そう言って俺は海王類を捕まえに海に向かった。

ｓｉｄｅ　ドゥアイス　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　シャッキー

「寂しくなるわね…」

ドゥアイスが出ていった扉を見つめながら私は繰り返し呟いた。

「…そうだな。」

レイさんも同じ気持ちみたいだ。

「どうして修業を終わらせたの？」

正直答えは分かってるがあえて聞く。

「分かってるだろう？…もうドゥアイスに教えてやれる事はない。それに寂しい気持ちより楽しみな気持ちの方が強いんだ。あいつは大物になる。」

言葉通り、寂しさと楽しさが入り混じったような表情でレイさんが呟く。

「今でもあいつを拾った時を思い出すよ。もう8年になるのか…。」

恐らくドゥアイスとの思い出を回想しているのだろう。

「そうね…貴方があの子を連れてきた時は驚いたわ。でも嬉しかった。息子が出来たみたいで…」

そう、あの子は私達の息子。血の繋がりはなくても、実際に一緒に過ごした時間は少なくても。

「ああ、あいつは私達の息子だ。男の船出だ。笑って送ってやらなきゃな。」

「分かってるわ。私も貴方と同じよ」
私も楽しみな気持ちが強い。

そんなことを話しているとドゥアイスが帰って来た。

「シャッキー！採ってきたけどこのドアじゃ入んないから外で食おうぜ！」
外に出るとドゥアイスの１０倍はある海王類がいた。

「あら随分おっきいの採ってきたわね。それじゃ今日は外でバーベキューでもしますか。」

本当にドゥアイスは強くなった。あの子の未来を考えたら思わず笑みがこぼれた。

ｓｉｄｅ　シャッキー　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　ドゥアイス

あれからしばらくは、船やシャボンディ諸島に売っている全てのエターナルポースとログポース（逆走用）を手に入れる為に金を稼いだ。

ログポース（逆走用）はグランドライン出身の人たち用のログポースだ。
特に俺の様にシャボンディ諸島で育った人や、新世界生まれの人間に重宝する。これがないと俺は前半の海を順番に航海することができない。

金を稼ぐ方法は海に潜って海獣や魚を狩って売るだけだ。買取額はキロ単位なので大型を仕留めていたら結構すぐに金が貯まる。一応５００万ベリーほど貯める予定だ。

今日の漁を終えてシャッキーのところに帰るとハチが遊びに来ていた。

「ドゥアイス！聞いたぞ～！旅にでるんだってな～。お前はスゲェな～。まだこんなにちっこいのにな～。」

「うるせぇよハチ！これでも年の割にはでかいほうなんだよ！」

「ニュ～、そうか。けど寂しくなるな～。お前は俺の初めての人間の友達だからな。」

「うん、俺も寂しくないって言ったら嘘になるな。けど俺はもっと強くなってスゲェ冒険を沢山したいんだ！だからハチも俺以外にも

人間の友達作れよ！この島じゃ難しいかもしんないけどさ…」

この島はかつての名残が残っていて、魚人族と人魚族は魚類として扱われている。聖地マリージョアが近いせいで天竜人の思想が根強いからだ。なんで政府は天竜人の権力を認めているんだろう？正直意味が分からない。あんな奴らが偉そうにしてるからモーガニアが増えるんだと思うんだけど…

「ニュ～、分かったぞドゥアイス。俺もいつか旅に出て、人間の友達を作るぞ！」

「よし、その意気だ！そんでもって、もって人間と魚人族や人魚族が仲良くなれたらいいよな…」

よりによって魚人島から一番近い島がここだからな…

おかげで魚人島の人たちは俺たち人間を怖がっているらしい。全く政府は本当に魚人族と仲良くする気があるのか、疑問である。

「ニュ～、そうだな。今魚人島ではオトヒメ王妃が人間との共存を訴えてるから、俺も友達を作ることでオトヒメ王妃の手伝いが出来たらいいな～」

「そうだな…。

ハチ、一つ覚えて置いて欲しいことがあるんだ…」

そう言って俺は話を切り出す。

「なんだ？」

「おまえ達魚人族や人魚族が俺たち人間を怖がっているように、俺たち人間の中にもお前たちを怖がっている人たちがいるんだ。」

「ニュ～、そうなのか？俺の知る人間はお前たちみたいにいい奴か、俺をいじめる怖い奴しか知らないぞ？俺は人間に怖がられたことがないぞ。」

「俺もレイリーやシャッキーも特別だ。レイリーやシャッキーは昔海賊だったから魚人は見慣れているし、俺はその二人に育てられたからな。お前をいじめた奴らはこの島の人間だろう？この島では魚人たちは魚類として扱われているせいだな。」

おっと、話がそれた。

「俺たちみたいに魚人を受け入れられる人も、魚人を怖がってしまう人もいるんだ。お前たちだってそうだろう？人間を受け入れる人と、怖がる人が別れているからオトヒメ王妃も苦労してるんだろう。」

「ニュ～、そうだな。」

「だから、もしお前がいつか旅をした時に魚人を怖がる人間がいたらお前から優しくしてあげて欲しいんだ…。そうしないと相手はいつまでたっても魚人が怖いままになっちゃうからな。それで優しくした相手に魚人という種族を知ってもらえ！そうすれば今度はその人が魚人に優しくしてくれるはずだ。」

「…よし、分かったぞドゥアイス！たとえ怖がられても虐められそうになっても、俺は人間に優しくしようとするよう頑張るぞ～！」

「ありがとうハチ！約束だ！そのかわり俺はお前以外の魚人に会っても優しくするぞ。」

そう約束を交わしてハチは帰っていった。

side　ドゥアイス　end

第四話　修行一時終了（後書き）

逆走用ログポースは独自設定です。あってもおかしくないと思ったので創ってみました。
ストックが少し貯まったので今週は水曜と金曜も更新します。二つともいつも通り日付またぐ時間に更新予定です。

第五話　出航

ｓｉｄｅ　ドゥアイス

あれからひたすらに漁をして、目標の５００万ベリーにもうすぐ届く所まできた。

いつものように漁に出ようとしたら海岸に一人倒れている人がいた。

シャボンディ諸島の無法地帯は政府の手が届いていないので、こういう事態も珍しくない。

よく見てみるとどうやら魚人みたいだ。

先日ハチとあんな約束もしたし、見捨てるのも目覚めが悪いので近づいてみることにした。

「おい、あんた大丈夫か？」

声をかけてみるが反応がない。どうやら気絶しているようだ。

軽い怪我をしているみたいだが、命に別状はなさそうだ。おそらくこの怪我のせいで食料の調達が出来なくなってしまって行き倒れたのだろう。

軽く手当をしてから、いつもとは別目的な漁をしに海に潜った。

海獣を２匹仕留めて戻って来て、内蔵処理をしたあと丸焼きにして

いるところで魚人が目を覚ました。

「うっ…。ここは…？」

「目を覚ましたみたいだな。大丈夫か？」
多分大丈夫だろうが、俺の知らない魚人の病気とかにかかっている可能性もゼロじゃないので一応聞いておく。

「っ！人間！？」
俺が人間だと気づいた途端に警戒する。
ハチ以外の魚人と会うのは初めてだが、もし会ったらこういう反応をするかもしれないとは思っていたのでべつに驚きはしない。

「確かに俺は人間だがそう警戒するな。
腹減ってんだろ？これ焼けたから食えよ。」
海獣の丸焼きを指しながら言うと同時に魚人の腹が盛大に鳴り出した。

「……」

「……」

「…スマン…」
そう言って魚人は海獣の丸焼きにカブりついた。

魚人は丸焼きを三分の一程食べたところでお腹いっぱいになったらしく、食事をやめた。

「なんだ、もういいのか？だったら残りは俺が食うぞ？」
既に俺は海獣（体長５メートル程度）を一体完食していたが、まだ食い足りない。

「あ、ああ。もう結構だ…」
魚人からみても俺の食事量はおかしいらしく、若干引きながら残りを俺に差し出してくる。

「…何故俺を助けた？」
俺が残りの肉にカブりついていたら魚人が俺に聞いてきた。

「それは何故行き倒れなんかを助けたという意味か？それとも何故魚人を？という意味か？」
俺は答えの分かっている質問をする。

「…後者だ…」
やっぱりな。予想通りの答えだった。

「オトヒメ王妃の夢に協力したいからだ。」

「っ！？何故その事を知っている！？」
魚人は驚いた様に聞いてくる。
確かにこの事はべつに秘匿という訳ではないが、まだ人間世界には公になっていない事だ。驚くのも無理はない。

「俺には魚人の友達がいるからな。そいつから聞いたんだ。タコの魚人のハチって奴だ。」
と言ったところで気付いた。
…俺、ハチ以外友達いないじゃん…
という事は人間の友達が一人もいない。

「っ！それじゃお前がハチの言っていたドゥアイスか？」
軽く鬱になりかけたが会話に集中する。

「なんだ、知り合いか？だったら話が早い。
っと、そういえばあんたの名前は？」
名前を聞くのを忘れていた。

「あ、済まない。俺の名はフィッシャー・タイガーという。」

……
……
……
…

「マジで！？あの冒険家のフィッシャー・タイガー！？」

「あ、ああ…。知ってるのか？」

「当たり前だ！あんたの書いた『グランド・ライン～世界冒険の旅』は俺のバイブルだ！」
俺はこれを読んで旅する事を決めた。多少冒険家とは形を変えるかもしれないが、俺もこの人みたいに未知を探求したいと思ったのだ。

「そ、そうか…。楽しんで貰えたのならいいが…」

「おっと、話が変わってしまったな。
タイガー、あんた最後にハチに会ったのはいつだ？」
俺は興奮した心を落ち着かせて、話を元に戻す。

「確か一年程前だな…」

「そっか。
実は一週間くらい前にハチと人間と魚人の共存について話したんだ。
」
それから俺はハチと話した内容をタイガーに話した。

「そうか…。人間の中にもお前の様な奴もいるんだな…」
タイガーは少し嬉しそうに言う。

「ああ。
海賊王の船を作ったのはトムという魚人の船大工だって聞いた。その人はまだウォーター7で船大工を続けているらしいし、魚人と人間が共存している所は既にある。」

「だが本当に共存が出来ると考えているのか？
俺は天竜人たちを許す事が出来ない。今も仲間達が天竜人の元で奴隷として扱われてると思うと、怒りでどうにかなってしまいそうだ！！」
言いながら怒りが込み上げて来たらしく、声を震わせながらタイガーは下を向いている。

「天竜人達を許せないのは人間も一緒だ…。あいつらは人間にも手をかけている。
だから俺は俺のやり方で世界を変えたい。」

「…それはさっき話したハチとの約束の事か？」そんなんじゃ甘いと言いたそうに聞いてくる。

「もちろんそれもあるが、それだけじゃない。
とにかく俺が言いたいのは、悪いのは人間という種族じゃない。世界政府だという事だ。」
世界政府が天竜人の権力を認める→天竜人が暴走する→天竜人がやってるからいいんだと勘違いする貴族達が生まれる。
そんな連鎖が生まれてしまう。

「しかし人間たちは何もしようとしないじゃないか！」
どうやらタイガーは人間という種族を憎んでいるらしい。

「…タイガー、俺の事も憎いか？」
俺は少し考えてそう切り出した。

「…お前は命の恩人だ。人間は憎いがお前を恨むような事はしない。」
良かった…。俺の事も否定されたら、この会話は不毛に終わってしまう。

「人間は染まり易い生き物なんだよ。育てられ方で全く違った考え方が生まれる。
俺みたいに育て親が魚人と友達だったから魚人と仲良く出来る人間もいれば、シャボンディ諸島の住人の様に魚人は魚類だと育てられた人間もいる。
だから魚人と共存すべきという考え方が一般論になれば世界は変わる。」

正直育てられ方の話は人間に限らず魚人や人魚の様に思考能力のある生物全てに当て嵌まる事だと思うが、あえて口にはしない。
今のタイガーに言っても「人間と一緒にするな！」と言われるかもしれない。

「だからといって黙っていろと言うのか！？お前のやり方で世界が変わるのを黙って見ていろと言うのか！？」

全く何を言ってるんだか…

「俺は俺のやり方で、と言っただろう。あんたはあんたのやり方で世界を変えればいいさ。」

俺は俺一人で世界を変えられると思うほど自惚れてはいない。

「っ！？」

「確かに今の人間世界はクズが多いからな。強引なやり方も必要だ。だから俺はタイガーが強引な手段をとってもいいと思ってるよ。結局俺が言いたいのは怒りの矛先を間違えるなという事だ。あんたが戦うべき相手は人間という人種じゃなくて、人間の思想を形作っている政府なんじゃないのか？今の魚人島を守っているのは人間の白ヒゲだろ？」

もしタイガーが無差別に人間を襲う様になったら、俺はいつかタイガーと戦うかもしれない。尊敬する冒険家だから戦いたくはないので慎重に言葉を選ぶ。

「……そうだな…。お前の言う通りだ。感謝するぞドゥアイス！お前のお陰で戦うべき相手を見誤らずに済んだ。俺は政府と戦う！」

覚悟を決めた表情でタイガーが宣言する。

「気にすんな！俺は俺で世界政府を変えたいんだ。」

「ははっ、そうか！そうだったな！」

ようやくタイガーは笑顔になった。

「それにしてもドゥアイスは、ちっこいくせに考え方がしっかりしてるな。」

「ウッセー！ハチと同じ事言うな！これでも年齢の割にはでかいほうなんだよ！！」

最後に余計な事を言ってから、タイガーはシャボンディ諸島を後にした。

タイガーとの会話の二日後、俺はついに旅に出る事になった。

レイリーが「ここで買える船なんか高いのでも大したものはないから1番安いものにしとけ」と言うから結構金が余った。

確かに一人乗りの船は大した船はおいてない。

ログポースとエターナルポースを買って、食料を一ヶ月分買い込んでも３００万ベリーも余ってしまった。

船に食料を積んでから一回シャッキーのところに戻る。最後に挨拶はしとかないとな。

「ドゥアイス、最初の航路は決めたのか？」
シャッキーのところで最後の食事をしていると唐突にレイリーが聞いてくる。
逆走用のログポースは、双子岬と同じ様に魚人島から出る７つの航路から選べる様になっている。
だからどの航路を選ぶかが重要になってくる。

「いやまだ決めてない。」
「ならウォーター７にしておけ。お前の船ではグランドラインの航海は厳しいだろう。ウォーター７で船を作ってもらうといい。」

「ああ、だから安い船を買っとけって言ったのか。」確かにどうせすぐに乗り換える船なら安い方がいい。
「でもウォーター７のトムって人、今海列車を造ってんじゃないの？」
以前、ウォーター７からログを辿って来た客が話していたが、トムは海賊王の船を造った容疑で死刑が言い渡されたが、海と海を繋ぐ夢のような列車、海列車の開発期間として１０年の執行猶予がある。今は９年目だ。（ちなみにその客は有益な情報をおいていったからいつもよりは安めの値段でぼったくられていた）

「これを持っていけ。トムへの手紙だ。私からの頼みなら多分断らんだろう。それにいい気分転換になるだろう。」

「そっか…。ありがとレイリー。」
世界で唯一世界一周をした船を造った船大工だ。必ずいい船が出来るだろう。

「気にするな。餞別代わりだ…」

「それじゃ私からはこれね。」
どうやらシャッキーからも餞別があるらしい。
「レイさんとあなたのビブルカードよ。
前もって作っておいたの。もし貴方が気に入った子がいたら分けてあげなさい。」
「マジで！？ありがとうシャッキー！！」
これがあれば旅先で出来た友人にレイリーを紹介することが出来る。

「さて、そろそろ行くか！」
「ええ、気を付けてね！」
「ああ、大物になってこい！」
シャッキーとレイリーが答えてくれる。
「それじゃ行ってくるな！二人とも８年間ありがとう！長生きしろよ！！次会ったときは面白い土産話持ってくるからな！！」
「ええ、楽しみに待ってるわ！」
こうして俺は８年間過ごした（実質は３年位）シャボンディ諸島を出航した。
まずはウォーター７だ。そいじゃ出航ーーー！！

ｓｉｄｅ　ドゥアイス　ｅｎｄ

第五話　出航（後書き）

ハンコックたちは間接的に助ける形にしました。直接助けると賞金首になってしまうので賞金稼ぎになれなくなってしまいますので

第六話　新しい船（前書き）

今更ですがドゥアイスのキャラが変わってるのは体に引っ張られているからとお考えください。

第六話　新しい船

ｓｉｄｅ　ドゥアイス

さて、途中てフロリアントライアングルに入ってしまったが、ある程度の航海術はあったのでそれ程問題なくウォーター7に着いた。

聞いていた通り、今はこの上なく活気がない。

今はトムが造っている海列車の完成以外希望がないのだろう。

とりあえずトムの造船会社「トムズ・ワーカーズ」に向かって船を造ってもらわなきゃな…

「すみませ～ん！」

会社の前に着いた俺はでっかい声で呼んでみた。

「あら、見ない子だね。子供が一人でなんのようだい？」

出て来たのは顔はなんとも言えないおばちゃんだった。

「えっと、俺ドゥアイスって言うんですが、トムさんという船大工の方はいらっしゃいますか？

船を造ってもらいに来たんですが…」

おばちゃんの怪獣みたいな顔は置いといて用件を話す。

「なんだい、あんた余所から来たのかい？

その歳で大したもんだが、今トムさんは海列車の開発中でそれどころじゃないんだ。
一見さんの依頼は断ってるんだ。悪いんだが帰っておくれ。」
予想通りに断られた。

「確かに俺はシャボンディ諸島から来ましたが、トムさんが海列車の開発中という事は聞いています。
俺も最初は他の船大工の方に頼もうと考えていたのですが、紹介してくれた人が『絶対にトムに造ってもらえ』と言うので手紙を預かって来ました。」
俺は手紙を渡して言う。
少し俺を見る目が険しくなったのは、恐らくシャボンディ諸島から来たからだろう。トムさんは魚人と聞いてるし、この人もハチに似た匂いがするからもしかしたら人魚なのかもしれない。

「紹介者がいるのかい？どれどれ…」
そういって怪獣ばーさんは手紙を読んでいくが途中でフリーズした。

「あ、あんたレイリーの紹介かい！？」
やっぱり冥王の紹介はびっくりしたらしい。ていうかこのばーさんもレイリーの事知ってるみたいだから、この人も長い間このトムズワーカーズに勤めているのだろう。

「はい、レイリーは俺の育て親です。俺が旅に出る時に餞別代わりに手紙をくれました。」

「そうかい！それじゃ断れないね！ちょっと待ってな、今トムさん呼んで来るから！」
そういって怪獣ばーさんは奥に引っ込んでいった。
どうやら大丈夫そうでほっとした。

しばらく待っていると、大きな魚人がやって来た。
彼がトムさんだろう。

「たっはっはっ！お前がレイリーの息子か！良く来たな！わしがトムだ！」
トムが自己紹介をして俺を歓迎してくれる。

「そういや自己紹介してなかったね！私は秘書のココロだよ、よろしくね」
そういってココロさんも自己紹介してくれる。

「俺はドゥアイスっていいます。」

「ああ、話は聞いてる！わしにドンと任せておけ！いい船をドンと造ってやる！」

「良かった。ありがとうございます！」
本当に良かった。もしかしたら本当に海列車の開発で断られるかもしれないと考えていたから

「中に入ってくれ。お前の希望も聞かんとな！」

中に入って俺の要望を説明していると、二人の青年が起きてきた。
一人はあごひげを生やした真面目そうな青年で、もう一人は海パンにアロハシャツを着た青年だ。

「おはようトムさん、ココロさん。」

「ん？そいつ誰だ？」

「おお、アイスバーグ、フランキー！こいつはドゥアイスって客だ。」

「どうも、お邪魔してます。ドゥアイスっていいます。」

「俺はアイスバーグ。敬語はよしてくれ。俺はまだ見習いだからな。」

「そうだぜ、ドゥアイスとやら！バカバーグなんかに敬語は使わなくていい！俺はフランキーだ！俺様には敬語使え！」

「バカンキー！てめぇ何言ってんだ！お前こそいらねぇじゃねーか！」

「言ったなこの野郎！」

なんかいきなり取っ組み合いの喧嘩が始まった。ちなみにトムさんは声が出ないくらい爆笑していて止める気配すらない。

１０分後見かねたココロさんが止めてようやく喧嘩がおさまった。今はトムさんの爆笑を止めている。

「みっともないトコ見せちまったな。とりあえず本当に俺にもフランキーにも敬語はいい。」

アイスバーグが傷だらけで俺にいってくる。

「ああ、分かった。んじゃよろしくなアイスバーグ、フランキー！」
俺も喧嘩してんの見てたらそんな気がしてきたから素直に応じる。

「そういやお前客って言ってたけど、なんでトムさんお前の依頼受けてんだ？今依頼は受け付けてねーのに。」
フランキーが俺に聞いてきたが答えたのは爆笑が止まったトムさんだった。

「こいつはわしの友人の息子でな！友人の頼みは断れんから久しぶりに船を造る事になった！」

「いいのかよ、トムさん。後期限は一年しかないんだぞ？」
アイスバーグが心配そうに言う。
トムさんは死刑の執行猶予中の身だから、後一年で海列車を開発しないと死刑になってしまうからだろう。

「いいんだ、アイスバーグ！わしらは船大工だからな。たまには船を造らんとストレスもたまって、かえって仕事がはかどらん。」

「よっしゃー！久しぶりの船大工だ！」
フランキーは喜んでいる。アイスバーグも一理あると思っているのか笑いながらため息をしている。

「さて、話が途中だったな。他には要望はないか？」
ようやく話を戻してトムさんが聞いてくる。
今まで伝えた要望は、
一人でも航海が出来る程度の大きさの船である事。
途中で誰か乗せるかもしれないので４人は乗れる位にしてもらう事。

キッチンを広めにしてもらう事。
無風でも進める様にパドルを付けてもらう事だ。
「後は船底に少し空洞を入れてほしいかな。」
「？何故だ？」
トムさんが（むしろトムズワーカーズ全員が）不思議そうに聞いてくる。
「海楼石を敷くためです。俺はグランドラインだけじゃなくて他の海にも行ってみたいですから。海楼石は海のエネルギーを発生させますから海楼石を船底に敷けば海王類に気づかれずにカームベルトを渡れるかもしれませんし…」
と説明していたら全員が俺を驚愕の表情で凝視していた。
「「「「それだ！！！」」」」
全員が一斉に叫んで俺を指差してきた。
「え！？な、何が？」
そんなハモられながら指さされたら、ドラクエの雑魚キャラのごとく驚き戸惑ってしまう。
「感謝するぞドゥアイス！お前のお陰で海列車の開発が進みそうだ！」
「ああ！これで問題が解決しそうだ！」
トムさんもアイスバーグも興奮しながら俺の手をとる。
「よし、みんな！恩人のドゥアイスの為に最高の船を造るぞ！まずは図面を引くぞ！」

「「おっしゃーー！！」」
そういってトムズワーカーズの男陣が作業場に走っていくのを、俺は呆然と眺めるしかなかった。

後で残ったココロさんに話を聞くと俺の説明が今海列車の開発中の問題を解決しそうだと皆が思ったらしい。
今トムズワーカーズを悩ませていたのは列車が渡る線路を壊す海王類だったみたいだ。トムさんはそれを防ぐ為に、線路を列車が通る時に魚が嫌がる不協和音を流すつもりだったらしいのだが、逆に言えば海列車が走っていない時には不協和音が流れない。その時に海王類が現れて線路を壊してしまっていたらしい。
近海に住む海王類達が嫌な音が流れていることを記憶する前に線路を壊してしまうので困っていたらしい。
偶然とは言え、役に立てたのなら良かった。

夕方になったら3人が作業場から出てきた。
「ドゥアイス！いい図面がドンと引けたぞ！」
トムさんはノリノリで図面を引けたからか嬉しそうに俺に図面を見せてくる。
「ああ！俺もアイスバーグもいいアイデアが出せた。小さいけど最高の船が造れるぞ！」
二人もアイデアを出してくれたらしい。

図面を見たが、とてもこの世界の技術とは思えない様な画期的な技術も使われていた。
これは確かに最高の船になってくれそうだ。

「ああ、ありがとうみんな！」

「ンマー、お前のアイデアのお陰で海列車の開発が一気に進みそうなんだ！礼はいらないさ。」
アイスバーグがそう言ってくれる

「それでいくら位で出来ますか？」
実は待っている間気になっていた。世界一の船大工に造ってもらうのだから金が足りなそうだ。

「たっはっはっ！お前からは金はとらねぇさ！
といいてぇんだがな。普通の木材を使えばただでもいいんだが、お前には『宝樹・アダム』で造った船にドンと乗ってもらいてぇんだ。そうなると木材の原価はもらわねぇと仕入れられねぇんだが…」
苦笑い気味にトムさんが言ってくれる。
確かに『宝樹・アダム』で造れば原価は１００倍以上に跳ね上がる。
俺の船程度のサイズでも２０００万ベリーはかかりそうだ。
今の俺の所持金じゃ、全く足りない。

「ん～、ちょっと考えさせてください。せっかくだし街を見て回りながら決めてきます。」

「ああ、大事な事だからな！ゆっくり考えてこい！」
そうして俺は街に向かった。

活気のない街に着いた俺は考えながら歩いていた。
といっても、もう結論は出ている。『宝樹・アダム』で造ってもらいたい。問題は金だけだ。
どっかに賞金首でも居れｂ「おい、海賊がガルク・カンパニーの造船所で暴れてるらしいぞ！海賊は３７００万ベリーの賞金首らしい！」…いたみたいだ。

造船所に着いた俺は海賊達を見てみた。回りの声を聞いてみると、どうやら金額が高すぎると言って暴れ出したらしい。昔の活気ある時代だったら船大工が片付ける事が出来たらしいが、大海賊時代が始まってからは戦闘力の高い船大工は海賊に引き抜かれてしまったらしい。

確かに今ウォーター７は木材が仕入れられない状況なので金額は高くなってしまっている。
だけど海賊達は「暴れるきっかけが出来た」と考えているみたいで、ニヤニヤしながら暴れている。完全にモーガニアみたいなので良いカモだ。
俺は海賊達が暴れているのを無視して、会社の社長と思われる人の前に行って話し掛ける。

「なあオッサン。あいつらを俺がぶっ飛ばしたらあいつらの賞金俺が貰うけどいいよな？」
ま、嫌とは言わせんが。

「なっ！止めときなさい！君が敵うはずないだろう！」
俺は所詮８歳の子供だから社長だけでなく回りの人も一斉に止めだすが無視して海賊の前に立つ。

「おい、ガキ！俺らをぶっ飛ばすって？いい度胸してんじゃねぇか！」
どうやらさっきの会話が聞こえていたみたいだが、子供の戯れ言だと思っているので笑いながらいってくる。回りの手下達も爆笑していて完全に舐めきっているが俺は無視して賞金首リストを取り出す。

「え～、カース海賊団船長、『街壊しのカース』３７００万ベリーだな。」
そのへんの人たちが言ってたとおりの金額だった。レッドラインに近いこの島で３７００万ベリーは小物だから普通にやっても倒せそうだが、市民を人質に取る可能性があるので覇王色の覇気で数を減らす事としよう。
俺は市民に被害がいかない様にコントロールをして覇気を叩きこんでみた。

「……あれ？」

船長も含めて全員アワ噴いてぶっ倒れていた。

「…なんだ、手応えのない奴らだな。」
肩透かしを喰らった気分だ。船長や幹部クラスの奴らは残ると思っていたが丸く治まったので良しとしよう。
回りの人達は唖然としているが、レイリーに鍛えられた俺がこの程度の小物に負ける訳がない。

「おっさん、ぼーっとしてないでこいつら縛んの手伝ってくれ。起きたらまた暴れるぞ。」

「あ、ああ、済まない。」

社長がそう言うと同時に周りにいた人たちは一斉に騒ぎ出した。
「なんだ！あの子は！？」という声がそこら中に挙がったが全て無視して海賊団全員を縄で縛り上げると、俺は全員を抱えて海軍の詰所に向かった。
もちろん海賊たちの宝はいただいたが、海賊船は造船会社の社長にあげた。そのまま中古で売ろうが解体して新しい船を造ろうが好きにしてくれと言ったら感謝された。
とりあえずこれで資金調達が完了したからよしとしよう。

海軍の詰所で無事換金を終えた。
最初は驚かれていたが、この世界で名をあげる人物は幼い頃から逸話が残っていたりするので、そういうものだと判断された。
懸賞金３７００万ベリーとカース海賊団が持っていた宝２０００万ベリー相当の宝を換金して、ホクホク顔でトムズワーカーズに帰っていった。もともと持っていた３００万ベリーを足せば６０００万ベリーになる。これだけあれば流石に足りるだろ。

「トムさん！『宝樹・アダム』で船を造ってくれ！さっき街にいた賞金首を狩ってきた！」
そう言って俺はトムさんの前に持っていた金を積み上げた。

「たっはっはっ！！っ…！！…！！…！！」

「笑いすぎだよ、トムさん。これだけあれば足りるだろ。それにしてもあんた本当に強かったんだね。街の人が言っていたけど賞金首を手も出さないで倒したって聞いたよ。」
笑いすぎてて話が出来ないトムさんの代わりにココロさんが答えてくれる。

それにしてもトムさんのツボが分からん。ただ賞金首を狩ってきただけなのに。

「ああ、こんだけあれば十分だ！希望のサイズの船なら４０００万ベリーあれば仕入れられるからな！！よし、ドゥアイス！！後はわしらにドンと任せておけ！！トムズワーカーズ総出で最高の船をドンと造ってやる！！」

後でココロさんに聞いたが、思ったより高かったのは輸送費らしい。このウォーター7もそうだが、大海賊時代が始まってからは商船がよく襲われるようになり、物資の輸送がままならない状況らしい。そのため商戦は高い給料を払って強い用心棒を雇ったりするため輸送費が異様に高くなってしまったらしい。

その日の夜は宴会だった。
一応俺の歓迎会らしいが、海列車の開発が進んだ事を祝ってもいた。
途中フランキーが俺に自分の夢を語ってきたりした。
フランキーの夢はトムさんを超える船大工になることらしい。トムさんは世界一周した海賊王の船を造ったから、自分はいつか海賊船に船大工として乗り込んで、自分が造った『夢の船』の世界一周をする姿を見る事でトムさんを超えると言っていた。
確かにフランキーはただの職人より、船大工として船に乗り込んだほうがいいと思う。陽気だからピースメインの海賊の船大工として将来名を馳せそうだ。

次の日からトムズワーカーズは俺の船造りに全力を注いでくれるようになった。『宝樹・アダム』が届くまでは、碇や帆など木材を必

要としない部品を造っている。
俺は暇なので、海に出て海王類を狩って街の人たちに超安値で売ってたりした。
トムさんたちはこの島が好きだから海列車を造ろうとしているので、俺に出来る事で街を良くしようと考えたからだ。しかも狩るポイントは海列車の線路近辺を選んでいるので、海王類たちが『線路の近くは危ない』と思ってくれれば一石二鳥だ。

一週間たった頃に、いつもの様に漁から帰ってきたらフランキーが駆け寄ってきた。

「おい、ドゥアイス！お前の船が出来たぞ！！」

「マジで！？早かったな？」

「トムズワーカーズは世界一の造船会社だからな！」
それに付いては疑う余地がない。
トムさんは言うに及ばず、アイスバーグは丁寧かつ早い仕事をするし、フランキーはトムさんにすら思いつかない様なアイデアを出す。
その３人が総出で造ってくれたのだから、仕事も早いだろう。

「早く来いよ！…って俺を置いてくなぁぁぁっ！！」
叫ぶフランキーを無視して俺はトムズワーカーズの造船所に全速力で走った。
後でフランキーに殴られたんだが、剃を使わなかっただけ感謝してもらいたい。

「おお！来たなドゥアイス！いい船がドンと出来たぞ！」
造船所に着いた俺はトムさんの言葉に出迎えられた。

「ンマー、トムズワーカーズ総出で造ったんだ。最高の船が出来上がった。」

「…すげぇ……」
アイスバーグの言う通り最高の船だ。
パドルは人力、燃料による稼働が出来、装備も万全だ。俺の希望通りに船底には薄い空洞があり、いつでも海楼石を敷ける様になっている。帆も一人での航海がしやすい様に舵を取る所に自動で帆を張ったりたたんだり出来るスイッチが付いている。中には『宝樹・アダム』の木材のストックがあり、ある程度傷ついても修繕出来る様になっている。キッチンは俺の食事量を知っているからか普通の１０倍はある。

「ありがとう…。最高の船だ！！」

「なに、わしらはただ仕事をしただけだ。この船でドンといい旅をしてこい！！」

「ああ、分かっている！！」

「そんじゃ皆、世話になったな！」
船が完成した夜に宴をあげてもらい、その翌日の朝には俺はもう出航することにした。この島は一通り見て回ったが、ハッキリ言って冒険家にとっては余り面白味がない。トムさんが海列車を完成させれば活気は出ると思うが、不思議な生き物はブルしかいないしもう

十分だ。丁度ログも溜まったし。

「おう！また来いよバカヤロウ！」

フランキーが号泣しながら言う。

「なに泣いてんだよ…。別に今生の別れって訳でもねーだろ。」

「バカヤロウ！！誰も泣いてねーよ！確かに友人が出航してしまうという寂しさに俺が胸を打たれたのは確実だが！！」

チンピラみたいな恰好をしているからか、泣いていると思われたくないらしい…。フランキーがそう思っているのならツッコまないが無理があると思うのは俺だけじゃないはずだ。

「ンマー、気にするな。フランキーはこういう奴だ。フランキーじゃないがお前ならいつでも歓迎するぞ！俺も楽しんで船を造れたしな！！近くに来たらいつでも寄ってくれ！！」

「ああ、そうだな！次に来る時は土産話のひとつでも持って来い！」

アイスバーグもトムさんも言ってくれる。やっぱりこの人たちは根っからの職人なんだな…。船造りが楽しくて仕方がなかったらしい。ちなみにココロさんは留守番だ。事務所に誰も居ないのはまずいらしい。

「ああ、任せとけ！目ん玉飛び出るような話を持ってきてやるよ！！」

人に冒険譚を話すのも面白いしな。人に話す事で当時の事を思い出せる。

「それじゃ、またな！海列車完成させろよ！！」

こうして俺の新しい船、『ボイポーラ・アベンチ号』の初めての航

海が始まった。

一時間ほど海を進んでいるとニュースクーが通ったので新聞を一部買った。
そこに書かれていた文字に俺は衝撃を受けた。

『冒険家フィッシャー・タイガー、聖地マリージョア襲撃』

ｓｉｄｅ　ドゥアイス　ｅｎｄ

第六話　新しい船（後書き）

多分この頃まだベガパンクの船開発されてないですよね？
主人公はもとは天才科学者設定なのでこれくらいは考えついてもおかしくないかと
船の名前は適当に付けました。
次からはまた週一月曜更新になります。

第七話　奴隷解放（前書き）

今回主人公出てきません

第七話　奴隷解放

ｓｉｄｅ　ハンコック

私たちが天竜人の奴隷になってから４年が経った。
この４年は地獄の様な日々だった…。
私たちの『飼い主』の天竜人は拷問好きな人間だった。暇潰しで刃物で刻み、機嫌が悪いと殴られ、機嫌がいいと毒を盛られた。
不幸中の幸いな事に、刃物で刻む時は紋章にしていたので、消えない傷は紋章以外にはない。

死んだ方がマシだと考えたのは一回や二回じゃなかったが、私たちを支えていたのは一ヶ月しか一緒に暮らせなかった弟の存在だった。
私は皇帝になって、４人で暮らす環境をつくると誓ったのだ。それを考えると、こんなところで死ねないという気持ちでいっぱいになった。

そうして生きる決意をしていたから、地獄の日々から抜け出せる契機が訪れたのだろう。

「走れ！！二度と捕まるな！！」
そう言って私達を魚人の冒険家フィッシャー・タイガーが逃がしてくれた。
彼はレッドラインを素手でよじ登り、聖地マリージョアを襲撃した。

天竜人の奴隷には魚人や人魚がたくさんいて、彼らを解放するためだった。
言わば私たちはついでだが、それでも彼は差別することなく人間の奴隷も解放してくれた。

マリージョアから逃げる事は意外と容易かった。
天竜人は自分第一の考えなので、海軍に自分達の保護しか要求しなかったからだ。お陰で追っ手は誰も来なかった。魚人や人魚はそのまま故郷の魚人島に向かい、人間と巨人は船で逃げた。

私たちが逃げた先はシャボンディ諸島だった。
逃げ出した者の中には、奴隷ではなく「気に入った」という理由だけで天竜人の妻に成らざるを得なかった者も居て、彼女たちは大抵シャボンディ諸島から連れて来られた者たちだったからだ。
それに人間の奴隷は全員海賊などの犯罪者だ。犯罪者が多く集まり、無法地帯が多いシャボンディ諸島はうってつけだった。

しかしそこまでだった。
私たちは他の元奴隷たちと別れた後はどうしていいか分からなくなってしまった。
私たちの故郷であるアマゾンリリーに帰るにはカームベルトを越えなければならない。私が知るカームベルトを渡る事の出来る船は、遊蛇が引く九蛇の海賊船だけだ。
マリージョアが落ち着いてしまったら、また天竜人がシャボンディ諸島にやって来てしまう。もし見つかったらマリージョアに連れ戻されてしまい、またあの地獄の日々が始まる。それだけが怖かった。

シャボンディ諸島に来てから一週間が過ぎた。

私たちは元々九蛇の海賊団の船員だ。それに天竜人に戯れに食べさせられた悪魔の実の能力もあるので、無法地帯でも生きていける力はあった。
その辺の無法者から金を奪い、その日を生きる生活をしていた。

しかし今日は違った。
フィッシャー・タイガーの一件に掛かり切りだった海軍がこの島にやって来たからだ。
海軍がマリージョアに掛かり切りだったため、シャボンディ諸島は最近いつも以上に荒れていた。それを止めるべく海軍の精鋭が無法地帯を中心に派遣された。
私たちはまだ幼い3人の女子だ。そんな者たちが無法地帯にいたら、元奴隷であることがバレてしまう。

「どうする？姉様。このままじゃ見付かってしまうわ。」

「大丈夫だ、マリー。海軍たちは暴れている海賊たちを捕らえにきたのだ。たとえ見付かってもそちらを優先するはずだ。」
不安気に言うマリーに、自分にそう言い聞かせた。

「とは言え見付からないに越したことはない。慎重に「お前らそこで何をしている！」っ！？」
会話に気を取られて海軍の接近に気付く事が出来なかった。

「女3人か…。成る程な。」
海兵がニヤニヤしながら言う。
ダメだ、こいつは私たちの境遇に気付いている！

「フフフ、天竜人の所へお前たちを連れていけば俺も昇進だな！」
その言葉に私たちは、この4年で植え付けられた恐怖を思い出し固

まってしまった。
その隙を海兵は見逃してくれるはずもなく、私たちに飛び掛かってきた。

もうダメだと思い、絶望で世界が真っ暗になっていた。目は開けているはずなのに何も見えない…。

……
……
…
しかしいつまで経っても私を襲うはずの衝撃を感じなかった。
疑問に思ったからか、視界が元に戻っていった。
認識出来る様になった私の視界に飛び込んで来たのはアワを吹いたさっきの海兵だった。

「…た、助かった、の、か？」
自分の置かれている状況を把握出来ないでいると、一人の初老の男が現れた。

「やれやれ、この辺りを海軍にうろつかれると困るんだがな…。君たち、大丈夫か？」

「は、はい…。」
言葉からすると彼が助けてくれたようだが、まだ頭がついていかない。

「君たち、無法地帯をうろついてる所を見ると訳ありだな？」
まあ海兵にもバレたのだ。彼も私たちの境遇を理解したのだろう。
でも彼は「訳あり」という言葉を使った。これは私たちへの気遣いだろう。

「ふむ、大変な目にあったな。良ければうちで匿うがどうする？遠慮はしなくて構わんぞ。私もフダツキの身だからな！」
男は笑いながらそう言ってくれる。
このままこの場所に居ても、さっきの二の舞になるだけだと判断した私は、戸惑いながらも頷いていた。
妹たちも賛成の様だ。
私たちは既に背を向けて歩いている男についていった…。

「さっきは助かった。感謝する。」
男の家に向かっている最中に、まだ先程の事に対してお礼を言っていない事に気付き、感謝の気持ちを伝える。

「ああ、気にしなくても構わんよ。私は若い女が大好きだからな！」
ふざけているのか本心なのか良く判らない。

「ああ、私はレイリーという。レイさんとでも呼んでくれ。」
そうか…、レイリーというのか…。ん？レイリー？どこかで聞いたような…、ってレイリー！？

「「「シルバーズ・レイリー！？」」」
ソニアもマリーも同時に気付いたらしい。ってそんな事を言ってる場合じゃない！

「あの冥王と呼ばれてる！？」

「海賊王の右腕の！？」

「なんで、そんな大物がシャボンディ諸島に！？」
私たちは軽いパニックに陥っていた。

「その名で呼んでくれるな。今はこの島でコーティング屋をしついる。それで君たちの名はなんというのだ？」
レイリーのその言葉でパニックから立ち直る。同時に恩人に対してまだ自己紹介をしていない自分達を恥じんだ。

「済まない、自己紹介が遅れた。私はボア・ハンコック。二人は妹のサンダーソニアとマリーゴールドだ。」
私が自己紹介をすると、レイリーは少し驚いた顔をした。

「ボア！？君たちは出身は何処だ？」

「女ヶ島、アマゾンリリーだ。」
何にレイリーは驚いているのか判らないが質問に答える。

「フッ、わっはっはっはっ！！！そうか！！」
い、いきなりレイリーが壊れた様に笑い出した。何が何だか判らない。

「あ、あの、レイさん？大丈夫？」
ソニアが心配そうにレイリーに話し掛ける。…ソニアも壊れたんじゃないかと心配しているようだ。

「なに、心配するな！着いたぞ！！そこの階段を登った先だ！」
どうやら話している間に着いたらしい。目の前には長い階段がある。
私たちはレイリーを心配しながら長い階段を登りはじめた。

「…レイさん。私たち、お金持って無いわよ…。」
マリーが呟く。マリーが言ってなければ私が言っていただろう。
階段を登りきった私たちの視界に入ってきたのは『シャッキー，Ｓぼったくりｂａｒ』と書かれた看板だった。
このツッコミ所満載の状況で思わずツッコんでしまったマリーを責められる人間がはたしているだろうか？いや、いない。

「心配するな。お前たちから金は取らんよ。」
そう言ってレイリーは中に入っていった。
仕方がないので私たちも後に続く。

「シャッキー、今帰った！」

中には被害者はおらず、店主と思われる女性が一人いるだけだった。

「あら、レイさん！お帰りなさい！一ヶ月ぶりね！」シャッキーと呼ばれた店主がレイリーを出迎える。
というか一ヶ月レイリーは家に帰ってなかったのか…。
そんな事を考えているとシャッキーが私たちに気付いたようだ。

「あら、後ろの娘たちは？貴方の隠し子？」

「わっはっはっはっ！！あながち間違ってないな！！」
…本当にレイリーは壊れたんじゃないだろうか？
シャッキーの（多分）１００％冗談のセリフを半分位肯定している。
多分私も妹たちと同じ様な目でレイリーを見ているのだろう。

「あら、どういう意味？」

「シャッキー！彼女たちの出身はアマゾンリリーだそうだ！しかも名前はボア・ハンコック、サンダーソニア、マリーゴールドというらしい！！」
シャッキーの質問にレイリーは豪快に笑いながら答える。
「っ！？そういう事ね！」
っ！？シャッキーまでも何か理解し始めた！？意味が判らない…。
「あ、あの…、レイさん？意味が判らないんだけど…。」
「ああ、済まないな！年甲斐もなく興奮してしまった！」
ソニアの問いにレイリーが反応した。どうやらようやく説明してくれるらしい。

「息子の姉は娘みたいなものだろう？」

「「「……え？」」」
「フフっ、ここはドゥアイスが育った家よ！！」
……理解出来ない……。
何故初対面のシャッキーの口からドゥアイスの名前が出てくるのだ？
「８年前にこの島に捨てられていたドゥアイスを私が拾ったのだ。」

「「「……っ！？ま、まさか！？」」」
私も、ソニアも、マリーもようやく何を言っているか理解が出来た。
「そっ、それじゃあドゥアイスは生きているのね！？」
声を出す事が出来ない私とマリーの代わりにソニアはレイリーに聞く。

「ああ、ピンピンしてるよ！多分世界一元気な８歳児だろうな！！」
レイリーのその言葉を聞いた瞬間にようやく実感した。
「よか〝った〟！！ドゥアイス〝は生き〟て〝た〟んた〝！！」
涙が止まらない…！
この４年間で涙は涸れたと思っていた…！
こんなに嬉しい事は今までなかった…！！
隣を見るとソニアもマリーも顔をくしゃくしゃにして泣いていた。
私も似たような顔をしているだろう。
でもそんな事、どうでも良かった。

しばらく泣き明かし、ようやく落ち着いた頃に疑問が浮かんできた。
「レイリー、それでドゥアイスは今どこに居るんだ？」
今の時間は夕方だ。８歳という年齢を考えても、今のシャボンディ諸島の治安を考えても家に帰っていないのはおかしい。
「それなんだが…。間の悪いことにあいつは一ヶ月程前から旅に出たんだ。」
「「「なっ！？」」」

旅に！？８歳の子供が！？

「そんな！？ドゥアイスはまだ８歳でしょ！？危険すぎるわ！！」
マリーがヒステリックに叫ぶ。マリーは末っ子だったためドゥアイスの誕生を誰よりも心待ちにしていた。だからせっかく生きていることが判ったのに８歳で一人旅させているレイリーとシャッキーが信じられないのだろう。私も同じ気持ちだ。

「なに、心配するな！今のあいつは強いぞ！さっきも言っただろう？あいつは世界で一番元気な８歳児だ。」

「で、でも、いくら強いっていっても８歳だもの…。」
粘るマリーに、シャッキーは溜息をついて新聞を渡す。

「？シャッキー、この新聞は？」
戸惑っているマリーの代わりに私が聞いてみる。

「５面の下の方を見なさい。あの子の記事が載ってるわ。」
シャッキーの言葉を聞くと同時に、私たちは新聞に群がった。
そこには
『子供の賞金稼ぎ現れる！』
と書いてあった。

「あの子、レイさんに鍛えられたのよ？貴女たちより強いわよ！」
シャッキーの言葉に私は納得した。
あの『冥王、シルバーズ・レイリー』が直々に鍛えたのなら、そこら辺の海賊に負けるはずがない。
「……レイリー、シャッキー。今までドゥアイスを育ててくれてありがとう！」
冷静になれた私は、まだ言っていなかった礼を伝えて頭を下げた。

ソニアもマリーも私に続く。

「どういたしまして！でも私たちも楽しかったわ。」

「ああ。あいつは面白い子供だったからな。」

二人は本心から言っているのか、笑顔を浮かべながら私たちに言ってくれる。

ドゥアイスがこの二人に拾ってもらえて本当によかった。一度オークションで売られた時に、この島の人間を見て心配だったから…。

それからはシャッキーが歓迎の宴を開いてくれた。

宴の最中にドゥアイスが私たちのことを憶えていることを教えてくれた。

考えてみればドゥアイスが憶えていてくれなければ、レイリーとシャッキーが私たちのことを知っているはずがない。まだ生後一ヶ月しかたっていなかったのに物心付いていたなんて頭がいいんだな…。

「そういえば君たちは九蛇の海賊団の一員だったのだろう？これからどうするんだ？」

宴が終わった後レイリーが言い出した。

「ドゥアイスのことも探したいが、まずはアマゾンリリーに帰りたいな。ドゥアイスがいつでも帰ってきてもいいような環境をつくっておきたい。」

最初は早くドゥアイスに会いたいと考えていたが、レイリーが鍛えたと言っているし旅にでた先がグランドラインの前半の海なのだから生きていけるだろう。

「そうか。しかしアマゾンリリーの皇帝になるのは並大抵のことではないぞ？それにドゥアイスは今旅を楽しんでいるだろう。旅は続

けたいと言うと思うぞ？」

「分かっている。しかし昔誓ったのだ！それにドゥアイスが旅を続けたいのなら構わない。ドゥアイスが旅をしている事はあいつが帰ってこれる環境を作らない理由にはならない。」

「そうか…。ならば私の友人を紹介しよう。アマゾンリリー出身の者だ。彼女に案内してもらえれば故郷に帰れるだろう。」

「本当か！？それは助かる！」

私たちは海賊団でも、あくまで戦闘員。グランドラインを航海出来る程の航海術はない。万が一グランドラインは航海出来たとしても、アマゾンリリーのあるカームベルトは無理だ。

「それからこの紙を持ってくといいわ。」

シャッキーが小さい紙切れをマリーに渡して言う。

「この紙は？」

「ビブルカードという紙だ。新世界の技術で、その紙が動く先にドゥアイスがいるはずだ。探すようになったら使うといい。」

「「「！？」」」

三人同時に驚くのは何回目だろうか？

しかしこれで確実にドゥアイスに会いに行く事が出来る。

それからレイリーはビブルカードの特性を教えてくれた。

この紙はドゥアイスの生命力も示しているらしく、小さくなると命の危険が迫っていることを示し、危険が去ると元の大きさに戻るらしい。

ただドゥアイスは修業をしながら旅をするとレイリーに言っていたらしく、少し小さくなったからといって余り心配するなと言われた。

「レイリー、シャッキー。世話になったな。この恩は決して忘れない。」
数日後レイリーの友人だという、豆みたいな婆さんがやって来た。
この婆さん、話を聞くとアマゾンリリーの先々代の皇帝だったグロリオーサらしい。
当時は私たちの生まれる前だったので、話にしか知らないが、名君だったと聞いていた。
しかしある日突然国を捨てて外海へ旅立ったらしい。理由を聞いても教えてくれなかったが…。

とりあえずニョン婆（そう呼べと言われた）に案内してもらいアマゾンリリーに帰る事になった。

「気にするな。息子の姉だ。」
レイリーが助けてくれた時と同じ言葉を言う。

「それでもよ、レイさん。いつかまた会いましょう！」

「それじゃあ、そろそろ行くぞい。」
別れの挨拶を済まし船に乗り込む。

「レイリー、シャッキー！いつかきっと恩を返す！」
「ええ、期待して待ってるわ！」

ドゥアイスは生きていた！見付ける手段も得た！

地獄の４年は修業は出来なかったが、代わりに悪魔の実の能力も得た。

後は私が皇帝になるだけだ！

再び誓い直して、私たちはアマゾンリリーへと船を進めた。

ｓｉｄｅ　ハンコック　ｅｎｄ

第七話　奴隷解放（後書き）

次は来週になります

第8話　ＩＮ箱庭（前書き）

今回殆どＯＮＥＰＩＥＣＥ関係ないです。ほぼＨＵＮＴＥＲ×ＨＵＮＴＥＲです。ＨＵＮＴＥＲ×ＨＵＮＴＥＲを余り知らない人は目をつぶってください。
一応このＳＳはＯＮＥＰＩＥＣＥのＳＳなので今回はかなり流してます。それでもいい方はご覧ください。

第8話　ＩＮ箱庭

ｓｉｄｅ　ドゥアイス

「ぶぇっくしょいっっっ！！」
俺はとても８歳児があげるとは思えない豪快なくしゃみをしてしまった。
おかしいな…。体調管理には気を付けているから風邪ではないと思うんだが…。レイリーとシャッキー辺りが俺の噂でもしているのか？などと、とても前世が科学者だったとは思えないような非科学的な事を考えてしまった。

それにしてもタイガーがこんなに早く動くとはな…。早く魚人の仲間を救いたいとは言っていたが…。
力になってやりたいのは山々だが、まだ政府にケンカを売るつもりはないからな。
まあハチがタイガーは魚人達に慕われていると言っていたから、助けてくれる仲間はいっぱいいるだろう。

そんな事を考えているうちに、俺はログをたどってロングリングロングランドという島に上陸した。
名前の通り何もかも長い島だ…。
そこにいた村の人にこの島に付いて説明を受けた。
どうやらこの島は一つの長いリング状の島で、普段は海によって１０の島に区切られているそうだ。一年に一度起こる干潮で本来の陸

地が現れ、その陸地を3年に一度渡って移住を繰り返しているらしい。
どうやら俺は運がいいようで１０分の１の確率を引いたらしい。たまたま上陸した島にたまたま村があったんだからな…。
しかも明日がその移住する日らしく、村の人たちは明日の移住に備えて荷物を整理しているところだった。
これはラッキーかもしれない…。

「この島にダフトグリーンは生えてるか？」

「ああ、丁度この島にだけ生えてるぞ。でもこの島のダフトグリーンは毒が出てるから近寄らない方がいいぞ。」
やっぱり俺は運がいい！
ダフトグリーンは動物を寄せ付けない植物だ。
俺は箱庭を創ったはいいが、まだ入ることが出来ないでいた…。もし入ってしまうと外からの攻撃を守る人間が誰もいなくなってしまい、動物が箱庭を壊してしまう恐れがあったからだ。一応神字で普通の攻撃等では壊れないように創ってはおいたが、命にかかわる事なので軽々しく入る訳にはいかなかった。
ダフトグリーンの近くに箱庭を置いておけば動物が近寄る心配はないし、しかも明日村の人が移住すれば人間が近寄る心配もなくなる。
しかも毒タイプなら入る時と出る時だけ気をつけていれば、この島にやってきた海賊たちも近づこうとはしないだろう。
俺は感謝を伝えると、早速村人が教えてくれたダフトグリーンの場所まで走って行った。

さて、俺は念願の箱庭の中に入ったわけだが…。
あの女神はお節介が過ぎるようだ…。

「箱庭へようこそ…。さてドゥアイス様、説明を聞きますか？」

「とりあえずこの状況を説明してくれ！」

そう、なぜか今俺の前にはＧ・Ｉに出てくるゲームマスターのエレナ（もしくはイータ）にそっくりな女の人がいる。
俺は箱庭を創ったらその中にトリコの食材を入れておいてくれとは言ったが、Ｇ・Ｉを創ってくれとは言っていないはずだ。あの女神は俺が願いを言ったときに不満そうだったからお節介でこの機能を付け足したのだろう。

「おそらくドゥアイス様の想像通りだと思われます。」

「そうか…。それじゃあ詳しい説明をしてくれ。」

このエレナもどきを創ったのはあの女神だろう。あいつは俺の考えも読んでいたようだ。

「かしこまりました。それでは説明させていただきます。ドゥアイス様は原作のＧ・Ｉのルールは知っていますか？」

「ああ、それは記憶している。」

俺は自分で言うのもなんだが天才だ。記憶力には自信がある。一度見聞きしたものは忘れない。

「かしこまりました。それでは原作との相違点のみを説明させていただきます。」

「ああ、そうしてもらえると助かるな。」

「礼には及びません。さて、まずはこのスタート地点から行くこと

が出来る場所が二つあります。一つは原作におけるＧ・Ｉの世界。もうひとつはほとんどトリコの世界と言ってもいいでしょう。人間は誰もいませんが。ただしトリコの世界は離脱（リーブ）がないと入る事が出来ません。」

成程…。離脱（リーブ）がないとトリコの世界から帰るすべがなくなってしまう。ということはまずはＧ・Ｉに入らなければならない。クリアを除けば、離脱（リーブ）をＧ・Ｉからの脱出用とトリコの世界からの脱出用の二枚以上確保してからでないとトリコの世界には入れない。

俺は頷きながら次の説明を促した。

「更にＧ・Ｉ用の指輪を付けたまま現実世界に戻ると『カーヅ』という呪文を使えるようになります。これは現実世界の非生物をカード化する事が出来る呪文です。」

「……今なら現実世界に戻れるか？」

「はい、可能です。まだＧ・Ｉ内に入った訳ではないですから。」

その言葉を聞くと同時に、俺はマッハで現実世界に戻り、船をカード化して帰ってきた。

宝はどうでもいいが船は置いとく訳にはいかない。まさか中がＧ・Ｉ化してるとは思わなかったので、一日に一回様子を見に行けばいいと考えていたのだ。

「すまない、待たせた。続けてくれ。」

「次にＧ・Ｉ内の説明です。Ｇ・Ｉ内にはドゥアイス様以外のプレイヤーは存在しません。見かける人間のような者は私を含めて全てＮＰＣとなっております。原作の様に複数のプレイヤーが協力をしなければ手に入らないカードはありません。全て自分だけの力で手

に入れることが出来るようになっております。」

「つまり、原作の様にレイザーがいたとしてもそいつはＮＰＣだし、『一坪の海岸線』を手に入れるために１５人で同行（アカンパニー）しなきゃいけないという様な条件は無くなる訳だな？」
確かに他にプレイヤーがいない以上、そんな条件満たす事は不可能になる。

「はい、その通りです。次にバインダーとカードの説明です。バインダーは指定ポケットは原作通りですが、フリーポケットは無制限になります。そしてカード化限度枚数が違います。これは実際にプレイしてお確かめください。さらに呪文カードは攻撃呪文や対攻撃呪文カード等、ドゥアイス様以外のプレイヤーがいないと意味がないカードは消去させていただきました。それと同時に指定ポケットカードで意味の無いカードを消去して、新たな指定ポケットカードを創らせていただきました。」
フリーポケット無制限はありがたい。カード化限度枚数は俺一人しかいないのだから違くなるのは当然だろう。呪文カードに関してはその通りだとしか言いようがない。指定ポケットカードの改変は、攻撃呪文や対攻撃呪文カードに関するカードを無くしたと言うことだろう。代わりにどんなカードがあるのか楽しみだ。

「さらにトリコの世界で手に入るもの全てもカード化することが出来ます。こちらは手に入れてもすぐにはカード化しません。ブックと唱えて初めてカード化するようになっております。」
その場で食いたいのにいちいちカード化されたらめんどくさいしな。

「次にゲームクリア後ですが、指定した3枚とゲームで使用していただいたバインダーをそのまま現実世界にお持ち帰りいただけます。現実世界でカードを使うためにそうさせていただきました。この時

現実世界やトリコの世界で手に入れたカード、離脱(リーブ)、指定した3枚以外は全て破壊されます。」
当然と言えば当然だな。そうじゃなかったら、さっきカード化してきた船や宝も破壊されてしまうし、離脱(リーブ)が残ってくれないと一生トリコの世界にいけない。離脱(リーブ)は現実世界で使っても何も意味がないので問題ないのだろう。

「クリア後に現実世界でブックを使用していただければ解りますが、指定したカードは、現実世界では『マスターポケット』に入れさせていただきます。この『マスターポケット』はクリア後、バインダーの一番最後にクリアした証として現れます。もし再プレイ時に前回指定したカードをまたG・I内に持ち込んだ場合、そのカードは現実世界から持ち込んだものとして認識する為に付けさせて頂きました。」
よし、この機能なら何回もクリアしてカードを手に入れる事が出来るな。
原作では再プレイ出来るかどうか分からなかったけどよかった。

「最後に、再プレイ時はショップに預けてあるお金のみ引き継ぐ事が出来ますので、クリア直前は金銭カードは全てショップに預ける事をオススメさせていただきます。」
これは有難い。ダブリカードや指定ポケットカードは全て売ってからクリアすれば、再プレイ時に金に困る事はなさそうだ。

「以上で説明を終了させていただきますが、何か質問はございますか？」
今までの説明を聞いていてひとつだけ思い浮かんだ疑問が有ったので聞くことにする。

「クリアして現実世界に持ち帰ったカードをゲインしたとしよう。

このゲインしたモノをカーヅで再びカード化することは出来るのか？」

「はい、可能です。一度クリアして現実世界に持ち帰ったカードは現実世界のモノとして扱いますので。結論を言いますとドゥアイス様がカード化出来ないものは現実世界の生物のみです。」

よかった。それさえ聞ければ問題ない。

「もうよろしいですか？それではドゥアイス様、どちらの世界に行かれますか？」

「いや、どちらも何も、離脱（リーブ）がないとトリコの世界に入れないんだろう？だったらG・Iしかないじゃん…。」

「私の仕様ですのでお気になさらず…。それではドゥアイス様、G・Iをお楽しみください…。」

こうしてツッコミは軽く流されて、俺はG・Iの世界に飛ばされた。

さて俺はG・Iに着いたわけだが、中はほぼ原作そのままだった。スタート地点は草原の真ん中で始まった。しかし原作と違って他のプレイヤーが居ないため視線がなく、何処へ目指せばいいのか判らない。

とりあえず適当に歩いてみたら原作通りアントキバに着いた。

俺の元々の目的は念の修業のためだったので、とりあえずビスケ式の修業をしようと考えた。

そのためにはまずG・I内の金を手に入れなければならない。

原作に倣い、巨大パスタを食べてカードを貰って換金をした。なん

か巨大パスタが俺仕様になってて原作の１０倍のサイズでガルガイダーも１０枚貰えた。
換金した金で地図と土木用道具を買った。原作ではスコップとトロッコをマサドラで買ってたけどアントキバでも普通に売ってた。

ここで俺は初めて発を身につけた。レイリーとの修業の時から考えてた能力だ。
ぶっちゃけＮＡＲＵＴＯの影分身だ。カストロのダブルと９割一緒だ。この能力は完全に修業用の発として制約と誓約を付けた。
?:箱庭内でしか使用できない。
?:本体と分身はオーラ総量を等しく分ける。
?:分身の経験値はダメージも含めて全て本体にフィードバックする。
原作ではゴンとキルアで組み手をすることで流の修業をしていたが、俺には相手がいない。影分身を使う事で全く同じ技量の相手との組み手をすることが出来、更に経験値は２倍という最高の修業が出来る訳だ。

ちなみに俺は強化系だった。バランスがいいので万々歳だ。影分身とは相性が悪いが、修業用の能力なので構わない。
最初は異世界から転生した事を考えたら特質系かと思っていたが違った。まあ特質系だと能力を考えるのが難しいから良かった。

早速俺は影分身を使い、二人掛かりでマサドラまで真っ直ぐに山を掘って行った。
この修業で体力、オーラ総量、集中力を鍛えていく。
それと同時に影分身との組み手による流の修業もこなす。

更に食事代を稼ぐ為に出会ったモンスターを狩って、それをアントキバで換金する。俺の一日の食費は１００万ベリー（Ｇ・Ｉ内の通貨もベリーだった）を超えるので結構狩らなきゃいけない。
マサドラまでたどり着いたら山掘りの代わりに系統別の修業を始めた。
俺は強化系なので、強→変→強→放→強→操→強→変→強→放→強→具→強と一日一系統の修業をした。原作でも山なりでやれと書いてあったしな。
原作にない操作系や具現化系の修業は自分で考えた。まずは簡単なものを考えて試してみて、出来たら少しずつ難易度をあげていった。操作系は指に紐で繋いだ葉っぱを手を動かさずに移動させて、具現化系は右手に持った小石を左手に具現化させるといった内容だ。

そんな修業を半年程繰り返し、堅の時間も影分身を出した状態でも３時間を超え、いくつか発を開発したので、ゲームクリアを目指す事にした。

俺が真っ先に手に入れたカードは
００３・涌き水の壺
００８・不思議ヶ池
００９・豊作の樹
の三つだ。
言わずもがな、俺の食費削減のためだ。

中でも不思議ヶ池は最高だった。魚を捕まえて、池に放せば１→２→４→８と倍々に増えていってくれる。

その後は順調に指定ポケットカードを増やしていった。最初に言っ

ていた意味のないカードの代わりに指定ポケットカードになったカードで素晴らしいカードがあった。
０８７・不思議ヶ畜場
０８８・豊作の畑
両方分かると思うが不思議ヶ畜場は不思議ヶ池の畜産バージョンで、豊作の畑は豊作の樹の野菜や穀物バージョンだ。
これで俺の食費はさらに削れる。

やっぱりＳＳランクのカードの入手は大変だった。
大天使の息吹は簡単に手に入ったが、カード化限度数は１だけで引換券は存在しなかった。しかも一度手に入れたら一ヶ月は入手出来ないオマケ付きだった。

他のＳＳランクカードは一坪の海岸線と同様に、原作ではゲームマスターと思われるキャラとのバトルだった。
こいつらＮＰＣの癖にバリバリ念を使ってきて、原作ほどではないにしてもめっちゃ強かった。現実世界では念能力者が俺しかいないので余り意味はないと思っていたが、念のため凝の練習をしといて良かった。

そして最後の０００番のカードは最悪だった。
原作はクイズの優勝者に与えられたが、この世界ではプレイヤーが俺しか居ないため趣旨が変わっていた。
俺が９９枚目を指定ポケットにはめた瞬間に俺の周りは戦場化した。今まで集めた指定ポケットカードの中で、直接の戦闘で倒さなければ手に入らなかったカードの敵とのサバイバルが始まったからだ。
雑魚もいたが、ゲームマスターも３人居た。正直イジメだろコレ。
こんなに命の危険を感じたのはレイリーの前で口が滑ってしまった時以来だった。

ゲームマスター以外の雑魚を一掃した後は正にサバイバルだった。
逃げては影分身を出して影分身に休ませ、解除して休息をフィードバックさせる。疲れてきた相手を倒す。という手段を取った。
しかし相手も3人いたのでこの作戦が上手くいく確率の方が低かった。
おかげで全員倒すのに一週間かかった…。

箱庭に入って半年、ようやくゲームクリアする事が出来た。
最後のカードを指定ポケットにはめたら強制的に移動させられた。
移動させられた先は箱庭の入口だった。

「お久しぶりです、ドゥアイス様。ゲームクリアおめでとうございます。それでは現実世界に持ち帰る3枚のカードをお選びください。」
相変わらず淡々と事務的な事しか言わない。こいつの中身のモデルはエレナやイータではなくネギまの茶々丸かもしれない。

「０２６、０４１、０８７で頼む。」
０４１は原作では超一流パイロットの卵だったが、この世界には飛行機は存在しないので改変されていた。ここでは超一流コックの卵だった。どうせならやっぱり美味しく食事を摂りたいので、これを選んだ。
０８７は言わずもがな食事の為に選んだ。０２６は原作通り7人の働く小人で、これがあれば俺が寝ている間も航海してくれるし、俺が出来る程度の料理はしてくれる。

「かしこまりました。それではその3枚をマスターポケットに収納させていただきます。

さて、ゲームクリアしたわけですが、この後どうなさいますか？」
これは既にきめてある。
「またＧ・Ｉに送ってくれ。まだ取りたいカードもあるし、念の修行もまだしたい。」
「かしこまりました。Ｇ・Ｉ内で手に入れたカードは、指定された３枚と離脱（リーブ）以外は全て破棄させていただきました。
それではまたＧ・Ｉをお楽しみください。」
こうして俺はまたＧ・Ｉに入っていった。
もう少し念能力を磨かないとトリコの世界は危険だと判断したからだ。
とりあえず修行を繰り返して、ゲームマスターを圧倒出来る程度の力を付けなくては！

ｓｉｄｅ　ドゥアイス　ｅｎｄ

第8話　ＩＮ箱庭（後書き）

最近プロローグがテンプレ過ぎて萎えるという声をいくつかいただきました。
私も同じ気持ちなのですが、この設定をＯＮＥＰＩＥＣＥの世界に持ち込みたかったのでテンプレじゃないと難しかったんです。その内いい設定が思い浮かべばプロローグを書き直したいと思います。

第九話　ＩＮアラバスタ（前書き）

今回も独自（？）設定があります。
最近執筆スピードが落ちてきました。
パソコンに触る時間があまりなくなってきたのもありますが、原作に絡ませると難しいです。
けど意地でも週一は守ります

第九話　ＩＮアラバスタ

ｓｉｄｅ　ドゥアイス

二年ぶりに現実世界に帰ってきた。
外には毒ガス発生タイプのダフトグリーンがあるので、息をとめてすぐに離れた。
ログは当然溜まっているので、海岸に着くとすぐにバインダーから船を出して次の島へと出航した。

あの後、Ｇ・Ｉの欲しいカードを片っ端から取ったり、修行をしたり、研究をしたりした。
箱庭がまさかのＧ・Ｉ化しているとは思わなかったので、改めて別荘を造った。
この別荘は女神の手が入らなかったみたいで、時間軸が同じなネギまのダイオラマ球と考えてくれていいと思う。
この別荘の中にはＧ・Ｉ内で手に入れたモノが実体化して置いてある。だから中は食料の山になっている。超一流コックの卵は１０枚手に入れて、中で俺の食事を作っている。腹が減ったら別荘の中に入って飯を食う。

あと中での作業用の発『ゲームの開発者（インスタント・プログラマー）』を作ってみた。
と言ってもただＮＰＣみたいな奴を出すだけの発だから大した制約はない。

？ＮＰＣは別荘から出れない。
？ＮＰＣの外見はランダムで選べない。
？ＮＰＣは最大５００体まで出すことが出来る。
？ＮＰＣの身体能力は使用者の４分の１になる。
？ＮＰＣの経験値は一切使用者にフィードバックしない。
この『ゲームの開発者（インスタント・プログラマー）』のおかげで食材を取ってきたりしないですんだ。他にも色々な仕事をしてくれている。

一週間ほどの航海で次の島に着いた。やっぱり7人の働く小人のおかげで夜俺が寝ているときも航海することが出来たので移動が早くなった。

着いた島の名前はジャヤというらしい。
この島は無法者が集まる島のようで、完全に無法地帯となっている。海軍の駐屯地や賞金首の換金所の様なものが無く、代わりに海賊たちが利用するリゾートホテルや酒場が沢山ある。

一通りこの島を見て回ったが、今この島にいる海賊団の数は１８。賞金首は確認できただけでざっと２０人は超えていた。
しかし今回は手を出すのをやめて置こうと思う。
この島は海賊たちが落とす金で成り立っていて、もし俺がこいつら全員捕まえたら島の人たちは困るだろう。それに賞金首の換金所がないと次の島までこいつらを連れていかなきゃいけない。首を斬るのは嫌だしな。

本当はこの二年間で現実世界で何かあったか情報を知りたかったんだが、賞金稼ぎの俺では情報を手に入れる事が出来ない。というより俺はまだ１０歳なのでこんな島に居ては不自然すぎるのでまともに姿を晒す事も出来ないでいた。二年前にウォーターセブンで賞金

首を倒したことは新聞に載ってしまったので、『あの、二年前に現れた賞金稼ぎの子供だ！』みたいな事になったらめんどくさい。俺は別に名を挙げたいわけではないので、今回はケンカを売らずに島を出ることにした。

とはいえ素通りするのもアレなんで、全ての海賊船の宝は戴いておいた。

絶で見張りに近づいて気絶させる→宝を戴く→自分の船に宝を積む×１８をしてからジャヤを出航した。

おかげで3億ベリーほど稼ぐ事が出来たぜ！！

……十分ケンカ売ってんな……。

でもバレてないみたいだから良しとしよう。出航した後、島の方から海賊同士の戦闘音が聞こえてきた。お互い疑い合っているのだろう。後は海賊同士ケリを付けてくれ！

そんなわけでジャヤにはログが貯まる４日間しか居なかった。食料はＧ・Ｉのカードで問題ないしな！

二週間程航海を続けて次の島に着いた。

サンディ島という島で、人口１０００万人を超える王国、アラバスタ王国がある島だ。

かなり大きな島で一通り見るとなると時間がかかりそうだ。

俺はまずナノハナという港町に来ていた。

軽く食事をしながら周りの人たちの話を聞いていると、この国の王は名君と言ってもいいような賢人であることが分かった。

スイレンという村で旱魃が発生して、村人たちを助ける為に国王たちは自分たちの生活費を削って資金を搾り出したらしい。

俺は前世の記憶があるため王国には余りいいイメージがなかったが、この国は理想的な王国だ。

ナノハナは食事が終わるとすぐに出た。俺は修業の成果で普通の人より五感が優れているのでナノハナの香水が鼻にくるからだ。
ナノハナを出ると砂漠を進んでまっすぐ北へ向かい、首都であるアルバーナを目指した。
国王のネフェルタリ・コブラも一目見てみたいし、やっぱり賑やかであろう首都には行きたい。

真っ直ぐ砂漠を北に向かっていくと、なんかでっかいカルガモが俺を追い抜いていった。
５０メートル程先に行くと立ち止まって振り向いた。

「クェ（笑）」

「……」

ほほぅ、カルガモごときがこの俺に喧嘩売るとはいい度胸だ…
俺は荷物を『カーヅ』でカード化すると、『呪筋錠』をはずしてダッシュでカルガモを追い抜く為に走り出した。
ちなみに念は使わずに純粋な身体能力だけを使っている。
「クェッ！？」

「なっはっはっ！俺に勝てると思ったか！！」

「グェーーッ！！」
追い抜いたらカルガモのプライドを刺激したのか、スピードを上げて追いかけてくる。

「くっ！やるなカルガモ！しかしカルガモごときに負けたら末代までの恥だ！負けねぇぞ！」

それからは一進一退の好レースだ。コイツはサイズもそうだが普通のカルガモじゃないみたいだ。『呪筋錠』を取った俺と競走出来る動物はそうは居ない。
しかしこのレースのゴールは何処だ？

アルバーナに着いてもレースは終わらなかった。カルガモが今は3メートル程勝っていて先を走っているが、真っ直ぐ宮殿を目指している。

「おいっ！宮殿がゴールでいいなっ！？」

「クェッ！！」
俺が提案すると言葉を理解出来るのか頷いてくる。

「よしっ！なら悪いがショートカットさせて貰うぜ！」
俺は持ち前の運動能力を生かして建物をジャンプで飛び越えて行く。

「クェッ！？」

「悪いなカルガモ！お前は所詮カルガモ！どんなに速く走れても、『飛べないカルガモはただのカルガモ』なのだ！」
こんなにカルガモを連呼したのは初めてだ。

「グ、グェーーーッ！！」

「んなっ！？」

俺が挑発するとカルガモは垂直に建っている建物の壁を走り出しやがった！
やはりコイツはただのカルガモじゃない。
建物が建っている事から分かる様に既に俺達はアルバーナの市街地を走っている為、住民達からガン見されている。
けど生憎それどころじゃねぇ！

「ん？おい、そこの子供！この先は宮殿だ！引き返しなさい！」
宮殿の門へと続く長い階段の途中で兵士が声をかけてくる。
だけど勝負の途中で立ち止まる訳にはいかないので無視だ！

ようやくゴールが見えた！しかし俺の隣ではカルガモが並走している。
このままだと首を前に出して走れる分カルガモに有利で負けてしまう！
あまり使いたくはなかったが仕方が無い！

「剃！」

「クェッ！？」
俺はラスト数メートルのところで剃を使って一気に開いていた門をくぐった。一瞬遅れてカルガモも門をくぐる。
カルガモからしたら隣を走ってた奴が瞬間移動した様に見えただろう。
門をくぐったら二人（？）ともぶっ倒れた。

「ハァ、ハァ、俺の、勝ちだっ！ゲホッ！」
数時間ノンストップで砂漠の中を走ってきたから喉が目茶苦茶痛い。

「グ、グェッ！グェーーッ！」

なんかカルガモが文句を言ってそうだが、俺には理解出来ないし今のは俺の勝ちだから知ったこっちゃない。

「おいっ！そこの子供！お前が侵入者だな！？」

……ヤバい。ここが宮殿という事を忘れてた。既に俺の周りには１０人程の兵士が武器を構えて立っている。侵入者である事は否定出来ないし、なんて答えりゃいいのかわからん。

「おいっ！なんとか言ったらどうなんだ！？」

「クェ！クェーーッ！」

「ん？お前カルーか？随分早かったな？」
どうやらカルガモの名前はカルーと言うらしい。安直な名前だ。
そのカルーが俺の前で羽を広げて立っている。どうやら俺を庇ってくれているようだ。

「カルー！そこをどきなさい！」

「クェッ！」
兵士の命令にもカルーは首を横に振って拒否する。
カルー…。お前って奴はカルガモのくせに「ノーサイド」の精神が分かるとは…！

「何事だ？」

「チャカ様！」
なんか偉そうな人が出て来た。見ただけでこの人は強いと分かった。

話が分かる人なら説明したいところだ。
そんな事を考えてたら兵士の一人がチャカって人に話し終えたみたいで俺に近付いてくる。
他の兵士は居ないので、チャカさんに全て任せる事になったようだ。

「君、何でこの宮殿に侵入したんだ？」

「えーっと、ここがゴールだったからです。」

「意味がわからない。分かる様に説明してくれ。」

それから俺はカルガモに挑発されて競走が始まった事を説明した。
説明中にカルーが頷いてくれた。
「本当か、カルー？」

「クェ！」カルーが頷いてくれた。

「にわかには信じられんな。超カルガモのカルーと競走して勝つなんて有り得ない。」

「グェーーッ！」

「…どっちなんだ？」

「そいつ俺に負けたって認めたくないんですよ。」

「グェーーッ！」

「ほら」
どうやらカルーは超カルガモという種族のようで、めちゃくちゃ足

が早い種族らしい。カルーはまだ子供で、超カルガモにしては小さいらしいが、おかげで疑われてしまった。

「…どうやら本当の様だな。分かった、信用しよう。ところで君は異国の子か？」

「はい、シャボンディ諸島から来ましたドゥアイスといいます。」信用はしてくれたが、疑問は残るみたいで聞いてきた。ついでに自己紹介。

「親はどうしたんだ？まさか一人で来たわけじゃないだろう？」

「いや、一人旅をしてます。一応賞金稼ぎをしながら冒険してます。」

「なっ！？それじゃ君が2年前にウォーターセブンに現れた子供の賞金稼ぎか！？」

おっ、俺の事知ってた。やっぱり子供の賞金稼ぎは俺以外いないみたいだから、近場の国には伝わってるみたいだ。

「はい、多分それ俺です。まあ賞金稼ぎは副業というか、あくまで冒険に必要な資金の調達の手段なんですけど。」

「成る程。それならカルーに勝つのも理解出来る。」

チャカさんはそう言うと何やら考えだした。

「ドゥアイス君、君さえ良ければ軍の訓練に参加してくれないか？」

「は？」

「戸惑うのも無理はない。しかし君の実力を見たいし、君の様な子供が訓練に参加して強さを見せてくれれば兵士たちも負けん気で気合いの入った訓練になるだろう。」
成る程、確かに俺みたいな子供に負けると悔しいだろうし、その後は必死になって訓練に打ち込むだろう。
この国は平和でいい国だが平和過ぎるから兵士たちも訓練に身が入らないのだろう。

「もし訓練に参加してくれるなら、不法侵入の件は水に流すし部屋も貸そう。」

「…わかりました。訓練に参加させてもらいます。」

半分脅しだが俺も嫌ってわけじゃないから別に構わない。それに訓練に参加すれば国王に会えるかもしれない。

「そうか！それでは早速訓練所に案内しよう！少し待っててくれ。この事を国王とイガラムさんに報告してくる！」
そう言うとチャカさんは走ってどっかに行ってしまった。
国王はともかくイガラムさんって誰だ？

数分後、チャカさんが髪をひたすらに巻きまくったおっさんを連れてきた。彼がさっきチャカさんが言っていたイガラムさんだろう。

「ドゥアイス君、この人がこの国の護衛隊隊長のイガラムさんだ。実際この国のナンバー2の方だ。」

「初めまして、ドゥアイスと言います。」

護衛隊長がナンバー2ってよほど国王から信頼されているのだろう。

「あ〝あ〝…、ゴホン、マ…マ〜マ〜?。ああ、初めまして。私がさっきチャカが言った護衛隊長のイガラムだ。」

…胃じゃなくて喉が絡んでる人だな…。

「既に訓練に参加してくれる事は了承を得たと聞いている。しかし今日の訓練は既に終了してしまったのだ。明日からの訓練に参加してもらえると有難いんだが構わないか?」

「ええ、俺はいつでもいいですよ。」

「そうか。しかし、あらかじめ君の実力を把握しておきたい。良ければチャカと模擬戦をしてくれないか?」

これはラッキーだ。現実世界での戦闘はウォーターセブン以来だ。まともに戦うとなるとレイリーとの修行から全く無い。自分の実力を把握するチャンスでもある。

「はい、分かりました。チャカさんさえ良ければ俺にとっても有難い話です。」

「そうか!それでは早速始めよう。ドゥアイス君は得物はいるか?一応チャカに合わせて竹刀を用意はしたが…」

実は俺はG・I内に居る時から剣術の練習をしていた。と言っても俺の剣術は持ち前の身体能力を生かして動くため、剣術とは言えないとは思う。一応太刀筋だけ素人には見えない様にしっかり刃を立てる様にして、後は素振りをすることである程度のレベルまで引き上げた程度だ。

だからこそ有難い。これからは剣を鍛えていきたいし、そのためにはうってつけの相手だ。G・I内では相手に剣を使う奴は居なかっ

たから、対剣は初めてだ。

「それでいいです。俺も普段剣を使うんで…。」

「そうか。それではこの竹刀を使ってくれ。」

「分かりました。それではチャカさん、よろしくお願いします。」
俺は『呪筋錠』を付けながら言う。稽古の時は散々やらされた挨拶。
レイリーはそのへんは特に厳しかった。

「ああ、よろしく頼む。」

「それでは、始め！！」
イガラムさんの合図と共に俺もチャカさんも同時に動き出す。
『六式』も『念』も『覇気』も使わない。『六式』は政府の武術。
相手は国の護衛隊のため知っている可能性がある。そうなれば海軍
でもない俺が何処で知ったのか問題になり、政府から追われる立場
になる可能性もある。それに俺は純粋な体術と剣術でチャカさんに
勝ちたいから使わない。

「ふっ！」
チャカさんが竹刀を振ってくるが、レイリーの竹刀から生き延びた
俺の動体視力は尋常じゃない。
見聞色の覇気を使えばあっさりよけれるところをあえて竹刀で受け
る。次は俺の攻撃だ。
『呪筋錠』を付けていても俺はチャカさんより速いスピードで動く
事が出来る。スピードの差は戦闘では大きい。レイリーの様に見聞
色の覇気を使える人間なら別だが、使えない人間にとっては相当で
かい。
そのため少しずつ俺の攻撃を捌ききれなくなってきている。次で終

わらせる！

「龍巣閃！！」

『るろうに剣心』で主人公が使う『飛天御剣流』。俺の身体能力があれば再現することが可能だった。

「ぐっ！」

一度に全身の急所を攻撃するこの技をチャカさんは捌ききれなかった。

「そこまで！」

イガラムさんが終了の合図を出す。

俺の勝ちだ！

「はっはっはっ！チャカよ、お前も子供に負けるとはまだ修行が足りないようだな！」

「「国王様！？」」

「っ！国王！？」

なんかまた新しいおっさんが出てきたと思ったら国王だったようだ。

「君がドゥアイス君か？見事な戦いぶりだった！その歳であっぱれだな！」

「あ、ありがとうございます。」

流石に国王クラスの人と話した事はないから恐縮してしまう。

「国王様！万が一を考えて下がっていてくださいと申したじゃありませんか！」

そりゃそうだ。俺は別に犯罪者じゃないが、異国の得体のしれない子供だ。しかも賞金首を倒す事が出来る力を持っている。そんな子供の前に軽々に一国の主が顔を出していいはずがない。

「そう言うなイガラム。大丈夫だと判断したから出てきたのだ。」

「いや、俺が言うのもなんですが、俺めっちゃ怪しいと思うんですけど…。」

「はっはっはっ！本当に怪しい人間は自分のことを怪しいとは言わんよ！君は信じるに足る子供だ。好きなだけこの国に居てくれ！」確かに噂通りいい人ではあるな。人は権力を握ると腐ってしまうものなのだがこの人はそんなことはない。まあいい人といい国王は別物だが…。

「そう言っていただけるとありがたいです。それでは少しの間お世話になります。」

「うむ！それでは食事にしよう！私の娘に是非会ってもらいたい！」王女か…。また軽々に王女に会わせるのもどうかと思うんだが、国王がいいと言うのだから良しとしよう。

「王女に会うのは別に構わないというかむしろ光栄なんですけど、食事はいいです。」

「なぜだ？遠慮しなくても構わないぞ？」

「俺の食事量を知ってもそのセリフを言えたら、俺は国王を尊敬します。」

「……そんなにか？」

「はい。俺も自分の胃袋がどうなっているのか分からないです。」マジで。ＨＵＮＴＥＲ×ＨＵＮＴＥＲのブハラみたいに、食った量と腹の膨れ具合が全然違う。

「…とりあえず今日だけでもどうだ？それ以降は見てから決めようと思う。」

「…分かりました。それじゃ今日だけ御馳走になります。」

こうして俺のアラバスタでの生活が始まった。国王が「今日だけでお願いします」と頭を下げる２時間前の出来事だった。

ｓｉｄｅ　ドゥアイス　ｅｎｄ

第九話　ＩＮアラバスタ（後書き）

「ログを辿るとロングリングロングランドの次は空島じゃないのか？」と思われた人もいると思います。
確かにその通りなのですが、そこは独自設定です。
元々ジャヤと空島は同じ島なので、ログも似通った磁力を発していると考えました。原作でルフィたちが空島にログを奪われたのは、元々ログはジャヤを指していたが似通っていてなおかつ強い磁力をもった空島に近づいたため磁力を奪われたと考えてください。だからジャヤの次に指す島はアラバスタになりました。
まあ原作以外の島を書くほど想像力がないための言いわけですけどね（笑）
次に『るろうに剣心』の飛天御剣流ですが、この剣術は「読みの速さ」「剣の速さ」「動きの速さ」から生み出される剣術のようです。
「読み」は見聞色の覇気、「剣」と「動き」はドゥアイスの身体能力なら使えると考えました。
いずれドゥアイスの刀も登場させます。既に考えてはいるのですが登場させるのは結構先になりそうです。

第十話　ビビ（前書き）

今回はマジで苦労しました。おかげでストックがなくなってしまった。

第十話　ビビ

side　ドゥアイス

「お願いっ！！私にケンカの仕方を教えて！！」

食事を取るために国王に連れられて大食堂に向かっている最中に国王の娘、つまり王女様に会ったわけだが、国王が俺のことを紹介するやいなや王女様はそうおっしゃった。
俺自身何を言われているのかよくわかっていない。

「えっと…、王女様？」

「王女様だなんて呼ばないで！ビビでいいから、私もドゥアイスって呼ぶから！！敬語もいらないわ！」

「あ、ああ…」
未だにこの状況を掴めていないので思わず国王にアイコンタクトをとってみたが、国王は「私には無理だ」と言わんばかりの表情を浮かべてきた。

「えっと、とりあえず何で？」
王女がケンカする相手なんかいるのか？普通は王女に手をあげたら罪に問われてもおかしくないと思うんだが…。
まあこの国は国王がアレなんでそんなことにはなりそうもないけ…。

「今度負けられないケンカがあるの！前一度ケンカしたんだけど負けちゃって…。」
この言葉を聞くと国王もイガラムさんも納得顔をした。前のケンカの事は把握しているらしい。

「じゃあ、何で俺？」
俺じゃなくても王女が頼めばイガラムさんでもチャカさんでも引き受けてくれそうだ。

「ドゥアイスはまだ子供なのにチャカより強いんでしょ？子供でも強くなれる方法をドゥアイスは知ってるんでしょ？だったらドゥアイスに教えてもらいたい！！」
まあ言ってる事はわかるが、俺の判断じゃ無理だ。一国の王女に生半可に戦い方を教えてしまっていいものかどうかは国王が判断しなきゃいけないと思う。
そういう意味で国王に視線を送ったら笑顔で頷かれた。
それでいいのか国王よ…。

「わかった。俺で良ければ教えるよ。」

「本当っ！？ありがとうドゥアイス！！」
素直でいい子なんだが王女としてはお転婆が過ぎるな…。この国が平和なうちはいいかもしれんが、少しでも治安が悪くなったらすぐに攫われてしまいそうだ。

「ビビ。その話はその位にして、まずは食事にしよう。」

「そうね、パパ！
ドゥアイス、どっちが多く食べれるか勝負しよう！！」

「ハッハッハ！俺に大食い勝負を挑むなんて１００００年早いぞ！」
俺が本気で食うと給仕係の人たち全員倒れるぞ。国王も「余り挑発しないでくれ！」とビビに視線を送っている。俺の話は半信半疑みたいだが段々心配になってきたようだ。

食事が終わるとビビが「参りました…。」と若干引きながら言い、国王と給仕係は「これ以上は勘弁してください！！」と言ってきた。イガラムさん、チャカさん、ペルさん（食事前に会って紹介された）は引きながらこの状況を見ている。
俺としては「だから言ったじゃん」って感じだ。とりあえず国王と給仕係には明日からの食事は自分で調達するむねを話したら泣いて喜んでいた。

ビビにせがまれて一緒の部屋で寝ることになった。
流石にそれは無いだろうと苦笑いを浮かべてどう断ろうと考えていたら、あろうことか国王が了承しやがった！イガラムさんたちは俺と同じ考えのようだったが、王族二人に押し込められてしまった。
もう一度言わせてもらおう。それでいいのか国王よ…。
ビビは一緒のベッドで寝ようと言ってきたがそれは断固拒否した。
部屋の扉からイガラムさんが殺意を含んだ視線を送ってきたからだ。
ビビは文句を言ってきたが俺の命のために我慢してもらった。

それから一週間ほどは割と忙しかった。
護衛軍の訓練とビビの特訓に付き合わなければならなかったからだ。
護衛軍はやっぱり国が平和なため実践経験が足りていなく、錬度が低かった。とりあえずイガラムさんに2日に一回は筋トレをすることを進めておいた。あとはチャカさんの言ったように俺が叩きのめして護衛軍のプライドを刺激したりして兵士たちのやる気を煽った

らすごい勢いでトレーニングに望んでいた。
ビビにケンカはいつやるのかと聞いたら「次にあいつを見かけたら！！」と答えた。日程が分かっていれば特訓のメニューとかも決めれるんだけど、確かに子供のケンカで日時を決めろというのもおかしな話だ。仕方がないので精神的な事を中心に教えた。所詮と言ったらビビには失礼かもしれないが子供のケンカだ。ベタに「負けたと思わなければ負けじゃない！」みたいな事を教えておいた。

そして一週間たったその日ついにビビのケンカが始まった。

「姫様だからって手を抜くなよコーザ！」「生意気王女なんかやっつけちまえー！」「ビビちゃん頑張れー！！」「おいお前ら！コーザは俺たちのリーダーだぞ！！」
周りにいる子供たち（肉体年齢は俺も大してかわらんが）がビビと相手の少年、コーザに声援を送る。俺はビビの後ろに立っている。

「わたしが勝ったらあんた達のリーダーはわたしよ！！」

「お前なんかに負けるかチビ助！！俺は村でずっとリーダーを張ってきたんだ。」
なるほど、ビビは仲間が欲しかったんだな。多分普通に「仲間に入れて」と言っても入れてくれるだろうが、それは「王女様だから」といった理由で子供たちが遠慮した結果になるかもしれない。このケンカでリーダーのコーザを倒せば、王女だからとか関係なくメンバーに認められると考えたのだろう。

それより俺はさっきから後ろで隠れて見ている国王とイガラムさんが気になる。あれでバレてないつもりなのか？

「ところでお前誰だ？この辺じゃ見ない顔だな？」
いきなり王女に喧嘩を売られて少しパニクっていたコーザが少し落ち着いたのか俺に話しかけてくる。

「ん？俺は…ビビの喧嘩の師匠かな？まあ気にすんな。」
いちいち説明すんのもめんどくさいので軽く流しておくことにしよう。

「ビビ、ちょっとこっちに来い。」

「なに、ドゥアイス？」

「はっきり言ってあの程度の付け焼刃じゃコーザは倒せないと思う。多分あいつは俺と同じくらいか1コ下くらいだからな。まだ5歳のお前が真っ向勝負に出ても勝てないよ。」
コーザの年齢は身長から推測したがそんなには大きく外れてないと思う。この位の歳だと喧嘩は体の大きさがモノを言う。俺みたいに日頃から鍛えているなら話は違ってくるが、ビビみたいに鍛えてない子供では体の大きさがそのまま喧嘩の強さに直結してしまう。
それが分かっていたのかビビはおとなしく頷いた。ビビからしたら仲間に入れて貰いたいだけだから本当は絶対に負けたくないわけじゃないのかもしれない。ただ認めてもらうためにはボロ負けだけは避けたいのだろう。

「そういうわけだから真っ向勝負は避けろ。見た感じコーザは短気っぽいから怒らせて攻撃を単調にして反撃してみろ。後はビビの気合次第だな。」

「うん！ありがとうドゥアイス！！」

「よし、そんじゃガンバレ。」

それからは正に子供のケンカだった。ほっぺたを引っ張りあったり殴ったりで二人はアオタンだらけ。
俺としてはさっきから後ろの瓦礫から聞こえる「そこだ、ビビ！右ストレートだ！」とか「あんのクソガキャぁーっ！」とか騒いでる大人達が気になって集中できない。今はみんな熱中して二人のケンカを見てるから気づいてないが時間の問題だ。

結果、予想通りビビはコーザに負けたが、ただの王女じゃないと認められたのかコーザのグループ、『砂砂団』の副リーダーになることになった。ビビも友達が沢山出来て嬉しそうにしている。
俺も満足だったんだが一つ問題が出来た。

「今日からドゥアイスは砂砂団の参謀だ！文句あるやつは居ないか！？」

『ないーーー！』
そう、俺もビビの健闘を支えた参謀役として認められてしまい、砂砂団の参謀として猛烈な勧誘を受けてしまっている。

「お前らちょっと待て！勝手に話を決めるな！」

「なんだよドゥアイス？参謀じゃ不満なのか？でもリーダーは譲れないし、副リーダーはビビに決まったぞ？」

「違う！！勝手に砂砂団に入れるな！」
俺は一応国王の客人として宮殿に居る。訓練にも参加しなきゃいけないし、勝手に砂砂団に入って遊んでる訳にはいかないのだ。

その旨を伝えようとすると、もはやバレバレだった国王とイガラムさんが普通に現れた。

「いいじゃないか、ドゥアイス君！旅も楽しいだろうが、たまには同年代の友人と遊ぶ事も必要だぞ？」

「しかし…」

「君は私に遠慮しているのだろう？しかしこれはこの国の為にもなる。いくらこの国が平和だからといってビビが宮殿の外で遊ぶのは少々危険が伴う。かと言って護衛を付けてはビビも他の子供たちも好きに遊ぶ事ができなくなってしまう。君が砂砂団として一緒に居てくれるのならそんな心配も必要なくなるしな。」

俺がさっきコーザたちに言おうとした事を国王に伝えようとしたら、それを察したのか俺の耳元でひっそりと言った。

一理ある。確かにこの国は平和だが、ここはグランドラインの国で今は大海賊時代。この国にいるのは国民だけではない。海賊の出入りも盛んで、中には海賊と名乗っていないだけの悪党がいるかもしれない。

俺も国王の後ろで聞いていたイガラムさんも納得して頷いた。

「しょうが無いな。でも俺は冒険家だからいつまでこの国に居るか分かんないぞ？」

「そんなの関係無い！仲間は仲間だ！」

俺が国王との会話をごまかしながら事実を述べると砂砂団の面々が一斉に俺に言ってきた。正直現世では同年代の友達がいなかったから結構嬉しい。

それからは訓練を早朝にしてもらい、ビビたちと遊ぶ時間を作った。
まあ作ったのは俺じゃなく親ばか丸出しの国王だけど。
結構砂砂団の子供たちとも仲良くなった。リーダーのコーザが俺の一つ下で、後はコーザと同じかそれより下だったので自然と砂砂団の保護者的な立ち位置になってしまった。
砂砂団は基本的にみんなで遊んでいるだけなのだが、たまに宮殿に忍び込んだり悪さするときがあるので、その時はあらかじめ宮殿の兵士たちに伝えてある。兵士たちも怒った振りをしながら遊びに付き合ってくれる。ただ火薬庫や武器庫など危ない処には入れないようにはしてもらっている。

そんな生活が一ヶ月程続いたある日、いつも通り早朝の訓練をしていたのだが長引いてしまった。いつもは訓練後待っていたビビと一緒に遊びに行くのだが、今日は待ちきれずに一人で遊びに行ってしまったようだ。
兵士の一人が言うには心配だからとイガラムさんがついて行ったみたいだから大丈夫だとは思うが一応先を急いで、いつも砂砂団のメンバーが集まる広場へと向かった。

「おい！どうしたんだお前たち！ここで何があった！？」
広場に行くと倒れた砂砂団のメンバーとイガラムさんと国王がいた。
なんで国王が…、いやそれどころじゃない！

「どうしたんですか！？」

「ドゥアイス君！ビビを狙ったものにやられたらしい！済まない、無理にでも君を待つように言い聞かせておくべきだった！」

どうやら国王が付いてきていた事に気づいたイガラムさんが国王に説教している間にビビとはぐれてしまったらしい。

「おい、ケビ！ビビが何処に行ったか分かるか？」

「今遺跡の方に行ったよ！コーザも後を追っていった。お願いだドゥアイス！コーザとビビを助けてくれ！」

「言われるまでもない！俺も砂砂団のメンバーだ！」

そう言ってダッシュで遺跡に向かった。

「何やってんだテメェらーーっ！！」

俺が遺跡に着くと、チンピラたちがコーザとビビを襲おうとする直前だった。

もちろん問答無用で蹴り飛ばす。

「ドゥアイス！」

「ビビ、コーザ！大丈夫か？」

「私は平気。でもコーザが！」

ビビの言葉を聞いてコーザを見るとうずくまって震えている。

よく見ると目の下を切ってしまって血が出ていた。

「これは医者に診せたほうがいいな…。そろそろ国王とイガラムさんが来るだ「「ビビ！」様！」来たみたいだな。イガラムさん、コーザを医者に診てもらってください。」

怒りのあまりチンピラたちにケリを入れてる国王に話しても無駄っぽいのでイガラムさんに頼むことにした。

「ああ！すぐに診てもらおう！ありがとうドゥアイス君！」

「例なんかいらないですよ。ビビもコーザも俺の仲間で友達です。国王、そのへんにしとかないとくたばっちまいますよ。」

ビビに説教しようかと思ったがやめておいた。
コーザが言った「死んでも守れ」という言葉で友達を失う怖さを知ったようだ。コーザが医者に観てもらったあとも泣きっぱなしだった。
今回の事でビビも自分が王女であることを改めて理解しただろう。
俺が居なくなった後も勝手な行動をしなくなりそうだ。

トトさんが『ユバ』というオアシスに町を開く事になった。コーザも付いて行くらしい。
『ユバ』はまだ無人のオアシスで、アラバスタ西部にある。一年ほど前に発見されたようで、アラバスタ西部の中心に位置しているため町を開けばアラバスタ西部の交差点として機能するであろう大切なオアシスだ。国王は信頼できる者に開拓団の代表を任せたかったみたいで、トトさんに任せることにしたらしい。
コーザがアルバーナを去ることになったので、いい区切りだと思って俺もこの国を出ることにした。
ビビにごねられると思っていたが思ったよりサバサバしていた。どうやら薄々分かっていたらしい。ごねられなくてホッとした気持ち

もあるのだが、何か悲しい…
困ったことがあったら俺を頼れと言ってビブルカードは渡しておいた。

「皆さん、本当にお世話になりました。」

「こちらこそ世話になったよ。君のおかげで兵士たちも訓練に身が入るようになったし、ビビの護衛までしてもらった。寂しくなるが旅を楽しんでくれ。」

国を出る時に皆が見送りをしてくれたので挨拶をしたら国王がそう言ってくれた。
俺自身訓練は為になったし、ビビたちの様な同年代の友達が出来た事は嬉しかった。

「ドゥアイス、今までありがとう！コーザ達と友達になれたのはドゥアイスのおかげよ！お兄ちゃんが出来たみたいで本当に楽しかった！」

「ハハッ！俺も妹が出来たみたいで楽しかったぞ。」
これは本当の気持ちだ。今まで自分より年下の子と親しくなったことがなかったからな。ビビはお転婆だったし、世話をしている内に妹の様に思えてきた。

「是非またこの国に来てくれ。君ならいつでも歓迎するよ！」

「はい、いつかまた寄らせて貰います。

あ、忘れてた。国王、俺が使わせて貰った部屋に俺が旅をして見つけたモノを置いておきました。お土産代わりなんで貰ってください。」

「本当か？悪いな。ありがたく頂いておくよ。」
一ヶ月以上も宮殿に滞在させてもらったからな。ビビにはビブルカードを渡しておいたが、国王にも土産の一つは置いておきたい。

「それじゃあ、そろそろ失礼します。本当にありがとうございました！ビビもまたな！」

「うん！またね！！」「本当にまた来てくれよ！」

こうして俺はアルバーナをあとにした。土産、喜んでくれればいいが…

side　ドゥアイス　end

ドゥアイスの残した土産を見るために、ドゥアイスの使っていた客間にやってきた国王一行はフリーズすることになる。
そこにはその土産と置き手紙が置いてあり、置き手紙には『俺が旅先の無人島で見つけたモノです。一日に１４４０？の水が湧き出る不思議な壷です。喜んでくれたら嬉しいです』と書かれていた。
ドゥアイスが残した土産は『湧き水の壷』。無論この壷はアラバス

タの国宝になることになる…

第十話　ビビ（後書き）

コーザの年齢はどこ見ても書いてなかったので適当です。

第十一話　七武海（前書き）

今回ちょっと短いです。
キリをよくするとここになっちゃいました。

第十一話　七武海

side　ハンコック

ついにやった！

レイリーとシャッキー、それにニョン婆に救われてから3年たった今、ついに私はアマゾンリリーの皇帝になることができた。

ニョン婆に連れられてアマゾンリリーに帰還した後は修行に明け暮れて3年間を過ごした。ニョン婆の帰還について皇帝（前）が何か言ってくると考えていたが、そんなことは無かった。

というより皇帝は体調を崩しており、その原因が男が持つウイルスにあったらしい。以前ニョン婆が皇帝だったときも同じ病にかかったが、一命を取り留めた経験があるようだ。

そのウイルスに耐えた経験を持つニョン婆を迎え入れるのは必然だった。

しかしニョン婆が言うには、このウイルスにかかってしまっては国を出る以外に助かる方法が無いらしく、皇帝は自分の地位を捨てる決意は持てなかったのでどんどん体調を悪くしてしまい、ついに武々の大会直前に亡くなる事となった。

武々では皇帝が亡くなった今、私の敵はいなかった。

私は今では国で一番の覇気の使い手だと自負しているし、この国では悪魔の実を知っている者がおらず、奴隷だった頃に余興で食わされたメロメロの実の力はとても有効だった。
決勝でも私を脅かすほどの使い手は現れず、結果私の優勝で武々は幕を閉じた。

そして今日、私の戴冠式が行われる。
といってもアマゾンリリーは海賊国家であるため皇帝自ら戦闘に参加することが多く、王冠はあくまで儀式でしか使用しない。おそらく私がこの王冠をかぶるのはこれが最初で最後になるだろう。
私の頭にソニアが王冠をかぶせてくれた。（ソニアもマリーも私の側近として側にいることが決まったが、年功序列でソニアがこの役目を担った）戴冠式が行われているこの広場中から国民たちが盛大な拍手をしてくれる。

これからがある意味本当の勝負だ。
今から私がする演説によってドゥアイスがこの国に住む事が出来るか否かが決まる。
私は拍手をやめない国民たちを手で制し、沈黙を待った。
やがて広場が沈黙でつつまれた。

「皆の者！わらわが新皇帝になったボア・ハンコックだ！」
ニョン婆に言われて、公の場では一人称を『わらわ』にした。少しでも国民に威厳を見せなければいけないようだ。
「わらわが皇帝になったからには今まで以上にこの国を強い国にしたい！共にこの国を守れるよう、皆より一層修行に励んで欲しい！」
私が声を張り上げて説くと、歓声があがる。これからが本題だ。

「一つだけ皆に頼みがある！わらわの弟をこの国に迎え入れて欲しいのだ！」
私がこの言葉を言うと、予想通り広場中から戸惑いの声があがる。
ある者は１０年前の『忌み子』を思い出し、ある者は私に弟が居る事に驚いている。

「皆が戸惑うのも無理は無い。男は『ウイルス』を持っているという事はこの国の常識だ。しかしわらわが海賊団からはぐれてしまったときに助けてくれたのは男だった！しかしわらわはウイルスにはかかっていない！海賊団の者も外海で男に接触をしている！しかし皆ウイルスにはかかっていない！
だから正確には『男はウイルスを持っている』と言うより、『男の中にはウイルスを持っている者がいる』と言った方が正しいだろう！」
私の説明に皆少し納得したようだ。それでもドゥアイスがウイルスを持っていないという証拠にはならないので不安は拭えていない。

「わらわの弟、ドゥアイスはこの国で産まれたし、わらわが昔海賊団からはぐれてしまっていたときに偶々出会った、ドゥアイスを育ててくれた女性もウイルスにはかかっていなかった！おそらくドゥアイスはウイルスを持ってはいないだろう！
頼む！どうかドゥアイスを受け入れてくれないか！？」
皆に誠意を見せるために頭を下げて頼み込む。
広場は男と生活することを想像した事と、皇帝に頭を下げられた事で戸惑いで溢れている。
仕方がない。余り使いたくは無かったが最終手段だ。
「……駄目か？」

「「「「いいえ！！！万事ＯＫです！！！」」」」

私が食べたメロメロの実は、食べた者の魅力を引き出す力があるらしい。

私は自分で言うのもなんだが美しい容姿を持っていたが、ここまで無差別に魅了するようなものでは無かった。だがこの国に帰ってきて皆が私に魅了されるのを見ると嫌でも分かる。

こうして一つの問題は片付いた。

戴冠式から三日後、私たちは遠征で外海に出ていた。

前皇帝は無差別に様々な船を襲っていたが、私は違う。そんなことをしてはドゥアイスの姉を名乗るのは許されない。

ドゥアイスは今、賞金稼ぎをしているが、レイリーとシャッキーに育てられた男だ。海賊だからといって無条件で襲ったりはしないはずだ。ドゥアイスのカモになる海賊はモーガニアだろう。

だから私たち九蛇の海賊団も、標的はモーガニアの海賊にすると決めた。

３つ程海賊団を潰したら、私が賞金首になった。金額は８０００万ベリーだ。

モーガニアの海賊団ばかり潰していたから、賞金をかけられるとは

思わなかったが考えが甘かったようだ。
丁度船に積荷が乗らなくなってきたので、いい区切りだと思いアマゾンリリーに帰還しようと考えていた所で船員の一人が慌ただしく部屋に入ってきた。

「蛇姫様！海軍の船が近づいてきています！どうなさいますか！？」
蛇姫とは私の愛称のようなモノだ。知らない間に付けられていたが別に嫌でもないので好きにさせている。

「あちらに戦闘の意思があるのなら応じればよい。私も甲板に出るとしよう。」
そう言って甲板に出ると確かに海軍の船が見える。だが割と近い距離にいるのに大砲を撃ってきたりはしないので戦闘の意思はないのかもしれない。
ある程度の距離まで近づくと海軍の一人が機械を通して話をしてきた。

「九蛇海賊団船長ボア・ハンコックだな？話を聞いて欲しい！こちらには戦闘の意思はない！」
予想通り戦闘の意思はないようだ。海軍が海賊と戦闘する気がないのはおかしな話だ。そんな話は一部に限られる。

「私は海軍本部准将のモモンガという！ボア・ハンコック！お前を七武海に勧誘しに来た！」
予想通りだ。ありがたい。こんなにも早く目的を達成出来るとは思わなかった。
この国の皇帝である以上、海賊行為を行わなければならない。しかしドゥアイスは賞金稼ぎだ。ドゥアイスの理念に反する事はしたくないが、アマゾンリリーの皇帝に相応しい行動はしなければならなかったのだ。

私や妹達の達した結論は七武海だった。七武海ならば海賊をカモにして海賊を続けることが出来るし、政府から追われる心配もないし、ドゥアイスと一緒の船に乗っていたりしている所を海軍に見られてもドゥアイスが責められる事はなくなるだろう。

「その勧誘、受けよう。」

「っ！？随分と早い決断だな？」
モモンガという男が驚いている。確かに即答するのはおかしな話だから無理もない。

「元々わらわ達は国の為に海賊をしているだけだからな。海賊王になりたいといった野心はないのじゃ。ならば追われる心配の無い七武海はうってつけの称号じゃ。」

「なるほど、それならば理解できる。ならば問題無いな？」

「ああ。」
本当は世界政府などには近づきたくもない。しかしこの事をこの男に言ってしまうと、そこから私や妹達の過去がバレてしまう可能性がある。

話が終わり、船長室に戻るとソニアとマリーが入ってきて、共に喜んだ。これでドゥアイスを迎えに行く準備が出来た！
一度アマゾンリリーに帰ったらすぐに迎えに行くとしよう！

ｓｉｄｅ　ハンコック　ｅｎｄ

第十一話　七武海（後書き）

モモンガ中将に勧誘してもらいました。
この頃は准将くらいかなと
多分本当はバギーのように伝書バットで済ますんじゃないかと思いますけど。エースの様に勧誘をけられたら、戦闘になりそうですし

第十二話　再会（前書き）

申し訳ないです。
書きあげてはいたのですが更新するのを忘れていました。

第十二話　再会

side　ドゥアイス

ハンコックが七武海になった。ニュースクーから買った新聞に載っていた。
これには驚いた。とりあえず九蛇の皇帝になれた時点で驚いたが、まさか七武海になるとは…
別にハンコックが強くなったことに驚いている訳ではない。九蛇の皇帝が七武海になったことに驚いている。
アマゾンリリーはカームベルトに守られている天然の要塞国家と言ってもいい。わざわざ七武海になってまで政府に近づく意味があるのか、という事だ。
もしかしたら俺が海列車の件で海楼石に関してのアイディアを出したのが政府に伝わって、海軍の軍艦はカームベルトを通る事が出来るようになったのかもしれない。
間接的にとは言え、育てて貰った恩をアダで返してしまったのかもしれない…
そう考えるとなんだか申し訳ない。

今俺はアラバスタからログを辿って新しい島を目指している最中だ。
でもアラバスタにいる時にイガラムさんから聞いたところによると次の島は「何もない島」らしい。
文字通り何も無い島のようで、人も住んでいなければ植物も生えて

いない島らしい。
正直つまらない事この上無い。ログは三時間程で溜まるようなので上陸すらしないだろう。

そんな事を考えて船を進めていたのだが、８時の方向から割と大型の船が見えた。
というより俺の記憶が正しければ、あれは九蛇の海賊船のはずだ。

しかし何故この近海に九蛇の海賊船がいるんだ？
九蛇の本拠地、アマゾンリリーはカームベルトの中にあるが、位置的には割とマリージョアに近い所にある。グランドラインの入口の双子岬の方は小物の海賊が多く、略奪しても大した金にならないだろう。
七武海は基本的には政府の命令を受けて動くわけではないので別に不思議ではないが、九蛇の海賊団の場合は別だ。
九蛇の海賊団はアマゾンリリーの収入源だ。別に名を上げたいわけでもないし、世界を制したいわけでもない。ただ国を支える為だけに海賊行為をしているだけだ。
大した収入源にならない小物の海賊団を狩る為に危険なグランドラインを航海するとは思えない。

小物の海賊なら逆に強い海賊と戦闘になることの方が危険だと感じるだろうが、七武海レベルは航海の方がよっぽど危険だ。いくら海の知識があっても前兆の感じられないサイクロンなどが発生するからだ。
俺も一度巻き込まれそうになって肝を冷やした。

話が逸れたが、ハンコックたちは俺のことを覚えているだろうか？
生まれてから一ヶ月しか暮らしていないが、俺にとっては紛れもない家族だ。

と言うより覚えていてくれなければ、この後戦闘を仕掛けられてしまう。
家族に武器を向けることは出来ないのでその場合は逃げなくてはならないんだが…

ｓｉｄｅ　ドゥアイス　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　ハンコック

「蛇姫様！小船を発見しました！いかがなさいますか！？」

「本当か！？わらわがよいと言うまで絶対に攻撃はするでないぞ！」

私が王下七武海になってから2週間経った。
一度アマゾンリリーに帰還して、すぐにシャッキーから貰ったドゥアイスのビブルカードを使い、ドゥアイスを探す航海に出た。
別にアマゾンリリーに帰ってきてくれなくてもいい。ただ、アマゾンリリーはドゥアイスを受け入れる準備が出来たことを伝えたかった。
そしてドゥアイスに近づいてきた証なのか、ビブルカードが頻繁に

動く様になり、いよいよかと心待ちしていたときに船員から連絡が入った。
船員達にも今回の航海は私の弟を探す航海であることは伝えてある。ドゥアイスは一人旅をしているはずなので、一人旅に使われそうな小船を見つけたらすべて報告するように言ってあった。

「姉さま！今回こそ間違いないかな！？」

「わからない…。だがビブルカードの動きを見ても確率は高いはずだ。」

実は「小船を見つけたら全て報告しろ」と言ってあったため、今回の報告は5回目だったりする。
そのたびに私たち姉妹の心臓は高鳴り、そしてことごとく裏切られてきた。ビブルカードを使うのが初めてだったため、毎回期待してしまっていたのだ。

特にマリーはひどく、三回程倒れた。
末っ子だったためドゥアイスを誰よりも可愛がっていた弊害だ。まさかここまでブラコン気質になるとは…」

「…姉さまも大して変わらないわよ……」

……途中から声に出ていたらしい。律儀にソニアがツッコんできた。
失礼な！私は2回しか倒れていない！！
そんな会話をしながら船の甲板に向かった。

「報告にあった小船はどこじゃ！？」

「はい、正面１２時の方向です！蛇姫様！！」

甲板に着き、見張り台にいる船員に尋ねるとそう返ってきた。

確かに一隻の小船が見える。

一人旅の船にしてはやや大きめだが、レイリーから聞いたところによると、ドゥアイスの船はゴールド・ロジャーの船を造った船大工が手がけた船のはずだ。

そうポンポン取り替えていい船じゃないので、途中で他の人を乗せても大丈夫なように、少し大きめに造ってもらったのかもしれない。

「よし！船に近づけ！間違ってもわらわがよいと言うまで攻撃をするでないぞ！」

高まる期待をなんとか押し殺して船員に号令を出す。

一度船長室でも言った言葉だが繰り返した。

「！？蛇姫様！！船に乗っているのは子供です！！」

「「「っ！？」」」

私も、ソニアも、マリーも、息をのんだ。

今ドゥアイスは１０歳のはずだ。普通の１０歳児は一人でグランドラインを航海したりはしない。

船の姿が大きくなるにつれ、胸の鼓動も速くなっていく。

そして、肉眼でもその姿を確認出来るようになったとき

「えっと…、俺のこと、覚えてる？」
とシアンの面影を残した少年が、不安そうに尋ねてきた。
「「「っ、忘れるわけ、な〝いだろう〟！！！」」」

ｓｉｄｅ　ハンコック　ｅｎｄ

ｓｉｄｅ　ドゥアイス

困った…

ハンコックたちに再会して声をかけたのだが、ハンコックとマリーが泣き崩れてしまって、それをソニアがなだめている。
一ヶ月しか一緒に暮らしていない俺をここまで思ってくれていたなんて嬉しいが恥ずかしい。

それにしても三人ともに言えるが、特にハンコックは綺麗になったな。
そのせいで他の船員は泣いてるハンコックに目を奪われて何もしてくれない…

「えっと…、そこの船員さん。俺そっちの船に乗っても良い？」

「は？あ、はい！いいと思いますよ？」

俺が皇帝であるハンコックの弟として伝わっているのか、俺に敬語を使ってきた。

とりあえず許しが出たので、自分の船をカード化して九蛇の船に乗船することにした。

さて乗船したんだが未だにハンコックとマリーは泣いていて、ソニアはそれをなだめている。

というか心の中では呼び捨てにしているが、実際どう呼んだらいいんだろう？

精神年齢は俺の方が高いけど、一応義理とは言え姉だ。呼び捨ては微妙なんだが姉とも呼びづらい。三人いるし…

そんなことを考えていると、一旦諦めたのかソニアが俺に話しかけてきた。

「ドゥアイス、本当に久しぶりね。会えて嬉しいわ。」

「うん、俺も嬉しいよ。一ヶ月だけとはいえ俺を育ててくれたからな。」

俺がそう答えるとソニアが俺をそっと抱きしめてきた。

「本当に無事で良かったわ…。レイリーから聞いたわ。貴方も私たちの事を覚えてくれてるんですってね。」

「えっ！？何でレイリーの事知ってんの！？」
いや、レイリーの事自体はむしろ知らない人の方が珍しいんだが
「少し前に海で遭難して、シャボンディ諸島に流れ着いた時に助けて貰ったの。だからシャッキーの事も知ってるわ。」
成程、それなら納得だ。レイリーの事だから若い娘を思わず助けたのだろう。
「「ドゥアイス！！」」
「のぅわっ！？」
そんなことを考えていると、ようやく我に還ったハンコックとマリーが俺に飛びついてきて変な声を上げてしまった。
「本当にドゥアイスなんだな！？本当にシアンの息子のドゥアイスだな！？」
「う、うん。そうだよ。」
余りにも勢いが有りすぎて戸惑ってしまう。
というか覇気を込めて抱きしめてくるから背骨がミシミシいっている！
「全く…。あなたたち！私たちは船長室に行くからアマゾンリリーまで進路を取って！何かあったら船長室に来なさい！」
「「「「はい！！」」」」
俺がハンコックとマリーのサバ折りを食らってるのを見て、ソニア

が船員たちに号令を出した。
そして何も言わずに俺たちを引きずって船長室へと向かった。

船長室に着いたあとまたハンコックとマリーが我に還り、ようやく落ち着いて話が出来るようになったので呼び捨てでも良いか尋ねたら好きにして良いと言ってくれたのでホッとした。

その後は今までの空白の時間を埋めるかの様に４人で話し合った。

ハンコックが九蛇の皇帝になったのも、七武海になったのも俺がアマゾンリリーで暮らせるようにするためだったらしい。
これには涙が出そうだった。普通恩人の息子とはいえ高々一ヶ月しか一緒に暮らさなかった弟の為にそこまでしないだろう。しかもハンコックは俺の旅にも理解を示してくれているから、帰りたい時に帰ってきていいと言ってくれた。さっきソニアがアマゾンリリーに進路を取れと言ったときに少し疑ってしまった自分が恥ずかしい…

天竜人の件を聞いたときに、思わずマリージョアに殴り込みにいきそうになったが３人に止められた。
タイガーが奴隷たちを解放したのは新聞で知っていたが、まさか３人が奴隷だったなんて…
最初聞いたときはつい疑ってしまった。というより理解したくなかったのかもしれない。ハンコックが背中の紋章を見せてきて―（この時は恥ずかしくなって目を逸らしてしまったが）ようやく理解することが出来た。
間接的に３人を助けることが出来ていたことは嬉しかった。

「お前は私たちを蔑んだりしないのか…？」

ハンコックが不安そうに聞いてきた。さっきの行動で気づいて欲しかったんだが…

「ハンコック！お前たちはアマゾンリリーで産まれるはずのない俺が産まれても面倒見てくれたじゃないか！それなのに何で俺が３人を蔑まなきゃいけないんだ？
それに俺は冥王、シルバーズ・レイリーに育てられた男だぞ？そのへんの男と一緒にするな！！」

「っ！？
ふふふ、そうだな…。これは済まない」
いくら弟とはいえ、奴隷の事を話すのは躊躇ったようだ。俺の返答にようやく３人が笑ってくれた。

そこで一つ思いついたので実行することにする。

「ブック！」

「ドゥアイス…、さっき自分の船を消した時も思ったけど、それは悪魔の実の能力？」

「いや、これは超能力みたいなもんだ。俺普通に泳げるし。でも普通の人からすれば悪魔の実も覇気もコレも不思議な能力には違わないから大して変わんないかもね。」

さっき一人だけ俺のカーヅを見ていたソニアに大天使の息吹を取り出しながらそう返した。

「ゲイン！」

「わらわに何を望む？」

俺がカード化解除をすると大天使が現れた。３人は何が起きているのか分からずに呆然としている。

「えっと、ハンコックの背中の火傷を治して欲しいんだけど…」

そう、「天竜人の紋章」などと大層な名前が付いているが、所詮は焼印で付けられた火傷だ。火傷ならばこの大天使の息吹で治せるはずだ。

「お安い御用…。ではその者の火傷を治してしんぜよう。」

大天使はそう言うと、息吹をハンコックにかけた。これでハンコックの焼印は消えたはずだ。外見では全く分からないけど…

「では、さらばだ。」

仕事が終わるとすぐに大天使は消えてしまった。一応お礼位は言いたかったんだが…

「……ドゥアイス、今のは何だ？」

我に還ったハンコックが俺に聞いてきた。

「だから言ったじゃん。俺の能力。結構応用性があるんだ。」

正確には俺の能力じゃないが、この事を説明するには前世の事とか神の事を話さなくてはいけなくなるので、こう説明しておく。

「今のは月に１回しか使えない治癒能力の一つなんだ。これで背中

の紋章が消えてるはずなんだけど…」

「「「！？」」」

俺がそう言うとソニアとマリーが二人がかりでハンコックを脱がし始めた。俺はこうなると予想していたので瞬時に目を逸らす。

「「なっ！？ほ、本当に紋章が消えてる！！」」

「ほ、本当か！？」

喜びよりもまだ戸惑いの方が大きいのが空気で分かる。
この世界ではまだ、皮膚の移植とかは考えられていないと思うし無理もない。実際タイガーは奴隷解放の後はタイヨウの海賊団で紋章を焼き直しすることで身分をバレないようにしていたと聞く。

「っ！？」

後ろを向いてそんなことを考えていたらハンコックが抱きついてきた。
上半身裸だから胸の感触が直に伝わってる！

「ハ、ハンコック？」

「う、うううっ！あ〝り〝がどう！」

「わ、わかった！わかったから一旦離れてくれ！！」
姉とはいえ、ハンコックほどの美人に上半身裸で抱きつかれてはたまったもんじゃない！
いやむしろ姉だからか…

なんとかソニアとマリーにハンコックを引き離して貰い話の続きに入った。引き離して貰った頃にはハンコックは泣きつかれて寝ていたが

「悪いけどソニアとマリーはもう少し待ってくれ。さっきも言ったけどあの能力は月に一回しか使えないんだ。今回は年功序列でハンコックを治したけど…」

「そんなの全然構わないわ！この忌まわしい紋章を消せるのなら後一ヶ月や二ヶ月位喜んで待つわよ！！」

「そうよ、ドゥアイス。本当になんてお礼を言ったらいいか…。」

「礼なんかいらないよ。３人だって俺のために俺の帰れる環境を作ってくれたじゃん。」

そう、どっちかって言うとむしろこれがそのお礼だったりする。俺にはシャボンディ諸島っていう帰れる場所はあるが、やっぱり元日本人としては産まれた故郷も大事にしたい。それを実現してくれたみんなには感謝しかない。

ハンコックの寝顔を見ながら俺はそう思った。

ｓｉｄｅ　ドゥアイス　ｅｎｄ

第十二話　再会（後書き）

ちなみにこの小説でのソニアとマリーは綺麗です。
ソニア→顔ちっちゃい
マリー→痩せている
ってな感じです。
元々はハンコックのキャラを立てる為にあんなキャラデザにしたんだと思いますので

第十三話　懐かしの故郷（前書き）

月に一回は週三更新したいと考えてましたが結構厳しいです。
とりあえず週一を守り続けます。

第十三話　懐かしの故郷

ｓｉｄｅ　ドゥアイス

あの後俺の歓迎の宴が開かれた。
海賊団のメンバーは色々複雑な心境のようだ。一般のアマゾンリリーの国民に比べたら遠征等で外海に出ることも多いので男を見慣れてはいるようだが、それでもこんなに身近に男がいたことはなかったみたいで珍獣を見るような目で見てくる。
それでもハンコックの弟ということが幸いして割とフレンドリーに接してくれる人が多かった。

しかし一部では男をアマゾンリリーに入れてもいいのかという敵意も感じる。

ちなみに宴では俺の喰いっぷりを抑えておいた。食料が限られる船の上ではあんまり喰ってしまうとハンコックたちの立場を悪くしてしまうからだ。

一週間ほど航海を続けてアマゾンリリーに着いた。
１０年振りの生まれ故郷だ。普通の人間だったら生後一ヶ月で離れた故郷のことなど懐かしくは感じないだろうが、俺の場合は記憶があるため別だ。

ハンコックは国を出るときに、今回の航海は俺を探す旅だということを言ってから国を出たようで、港には男を見るために沢山の人が出迎えていた。

それにしてもハンコックの人気は異常だ。
さっきから国民たちが「キャーっ！！蛇姫様ーっ！！」とか「美しさが留まる所をしらない！！」とか言っている。
確かにハンコックはものすごく綺麗だとは思うが、同性をここまで魅了するのはやはりメロメロの実の力のようだ。この力のおかげで俺は生まれ故郷が帰れる場所になったのだから感謝はするんだが、やっぱり異常に見えてしまう。

「ドゥアイス、この部屋を自由に使ってくれ。隣は私の部屋になっているから何かあったら呼べ。」

「本当にいいのか？こんないい部屋を使っても。」

ハンコックたちに連れられて九蛇城にやってきたんだが、ハンコックの部屋の隣に案内された。
おそらく代々皇帝の側近が使うであろう部屋だった。そんな部屋だから調度品も豪華なものが多く、正直に言えば身分不相応な部屋で息が詰まるんだが。

「皇帝の私がそう決めたのだ。誰にも文句は言わせはしない。」

「気持ちは有難いんだけど、ここまで豪華だと正直息が詰まるんだけど…。それにいくらハンコックの弟だからといって、こんなに優遇されていたらハンコックに不信感を抱く人も出てくると思うよ。」

それが一番の心配だった。俺を可愛がってくれるのは嬉しいんだが、それでハンコックが皇帝として立場が悪くなってしまったら最悪だ。

「そ、そうか？確かにそれは困る。私が皇帝から退いては、ドゥアイスがこの国に居られなくなってしまうな。」

「うん。ハンコックの隣の部屋というのは嬉しいんだけど、今はまだ早いと思う。俺がこの国の人たちに認められてからじゃないと…。」

「それもそうだな…。確かに少し横暴だったかもしれない。感謝するぞ、ドゥアイス。お前が正してくれなければ私も、私が嫌っていた先代皇帝の様になってしまう所だった。」

ハンコックたちは俺を追い出した先代皇帝を凄く嫌っている。正直俺を追い出したこと自体は国を治めるものとしては仕方がない判断だったと思ってはいるが、ハンコックが言うにはその後俺を命懸けで産んでくれた母のシアンも馬鹿にしていたようだ。それは確かに許容出来ないし、話を聞く限り色々とワガママも目立っていて亡くなったときも悲しむ者は殆ど居なかったらしい。菅〇人並みの支持率だ。

「それじゃあ、もっと質素な部屋を用意してくれると嬉しいな。元々俺は旅を続けるつもりだったから、帰ってきたときに手入れが簡単な余り広くない部屋の方がいい。」

「うむ。この城の2階に使っていない部屋があるからそこにしよう。あそこな「失礼します！」…、何事じゃ？」

ハンコックの言葉を遮って、海賊団の戦闘員の一人が部屋に入ってきた。
あの人は俺に敵意の視線を送ってきた一人だ。
「蛇姫様！やはり私は男がこの国にいるということは許容出来ません！！」
「今更何を言うのじゃ、キキョウ！！そなたも認めておったろう！？」
「あ、あれはついー！」
このキキョウという人は良くいえば流されない、悪く言えば頭が固い人みたいだ。そんな人でもハンコックの魅力の前では思わず流されてしまうらしい。
「いくら蛇姫様の弟君で子供とはいえ、弱く品の無い男をこの国に置いておく事は出来ません！！」
「ふむ…。確かに今回の件はわらわのワガママじゃ。しかしわらわの弟を弱いと決めつけるのはどうかな？」
「キャー！！キキョウ様〜〜！！」
「ドゥアイスく〜〜ん！！」

予想通りハンコックは俺とキキョウさんを戦わせることで認めさせようと考えたらしい。
俺も一応この国の生まれで、この国の考え方は分かっているつもりだ。
この国では強いものが正しく、美しいとされる。俺の場合は性別が違うから美しさは関係無いが、強さを示せば認められるというのは同じだと思う。

だからこの武々は大歓迎だ。俺もいつかは誰かと戦わなくてはいけないと考えていたけど、思ったより早くその機会が訪れた。この機会が遅ければ、その分ハンコックに対する不信感も募っていただろう。

意外にも俺にも声援をくれる人がいた。ハンコックの弟ということが９５％だろうけど、君付けで呼んでいる所を考えると子供であることも幸いしているようだ。

「ドゥアイス殿！覚悟はよろしいか！？」

「ええ、いつ始めてもいいですよ。」

「うむ、準備が出来たようじゃな。それでは武々を始める！
キキョウ！ドゥアイスが勝ったらドゥアイスがこの国に居る事を認めるな？」

「はい！私はこれでも長年海賊団の戦闘員を務めてきました。自分の強さには自信があります。その私に勝つことが出来るのならば、認めないわけにはいかないでしょう。」

確かにキキョウさんからは長年の戦闘経験を積んで身に付けた、確かな自信と覇気が備わっている。
でも俺は冥王に育てられた男だ。負ける気はしない。

「よかろう！それでは…始め！！」

ハンコックの合図と同時にキキョウさんが刀を振りかぶって俺に襲いかかってくる。この国の戦士の殆どが覇気を使える様にキキョウさんも例外ではなく、覇気が込められているのでかなりの威力だ。
しかしレイリーと比べると大したことはなく、危なげなくよけることが出来た。

「なっ！？よけたっ！？」

「流石海賊団の一員ですね。次はこっちの番です！」
そう言うと同時に俺は剃でキキョウさんの周りを移動する。
キキョウさんは見聞色の覇気の使い手でもある。見聞色の覇気の使い手相手の時、一番簡単な対処法は「先読みされても追いつかないくらい速く動く事」だ。
俺が2年前にレイリーに一撃入れる事が出来たのも速さによる所が大きかった。

「速い！先読みしても追いつくことができないなんて！」
おそらくキキョウさんは見聞色の覇気を速さで破られるという事うぃ経験した事がないのだろう。徐々に見聞色の覇気が乱れてきた。
やっぱり経験を積んでいるとはいえ、レイリーとは段違いだ。

「はっ！！」

「なっ！？」

見聞色の覇気が乱れてきたキキョウさんは、その分視覚に頼っていた。勿論目で追えるほど剃のスピードは遅くないが、残像程度でも目に入れていれば予測が可能になるからだ。
そこを狙って地面を破壊して土煙を起こすことで、キキョウさんは更にパニックに陥った。もはや見聞色の覇気は機能していない。

「ぐっ！」

「…まだやりますか？」
最後の剃でキキョウさんの側まで移動し、左手で首を掴んで地面に押し倒した所でキキョウさんに聞いた。

「……参りました。」

「そこまで！」
キキョウさんが負けを認めるとハンコックが終了の宣言をする。
それと同時に今まで剃のスピードで何があったか良く分かっていなかった観客がわいた。

「まさか、キキョウ様が負けるなんて！」「男ってこんなに強いの！？」「流石は蛇姫様の弟君だわ！」「キャー、ドゥアイスく～～ん！！」

気分はいいが、精神年齢３０を超えている俺にとっては恥ずかしい。特に君付け

「みな、ドゥアイスの強さは見ての通りじゃ！！他に文句がある者はおらぬか？ならばこれにて武々を終了する！！」
ハンコックのその言葉を聞いても反論は一切出ずに、その日の武々は終了した。

武々が終わったあと、俺がこの国に来たことに対する宴が開かれた。海賊船でも行なったが、あれは俺とハンコックたちの再会記念の宴らしい。
今回の宴ではやたら体に触ってくる人が多くて困った。海賊団の戦闘員でない人たちは男を見るのが初めての人が多く、まさに珍獣のように扱われた。
ハンコックたちのおかげで俺を『忌み子』として扱う人は少なく、楽しい宴となった。
思わず俺もいつも通りの食事をしてしまい、普通の国民たちはおろか、ソニアやマリーにすら引かれてしまったが…。まあ今回は前回の宴と違って島という事で、食料も余り気にしないですんだから良しとしよう。

「ドゥアイスは旅を続けるのよね？今回はいつまでいるの？」
宴が終わったあと、ハンコックに呼ばれて部屋に行くとソニアとマリーもいて、マリーにそう聞かれた。

「今回は半年位いようかなって思ってる。皆とも再会できたのにすぐに別れるのは嫌だし、他の人たちからも認めてもらえる様に少しは国の力にならないと…。」

俺がそう答えると3人とも「半年は一緒にいれるのか」という感情と「半年しか一緒にいることが出来ないのか」という感情が混じった顔をした。
俺としてはこれ以上はきつい。別に先を急ぐ旅ではないのだが、あんまり長居してしまうと俺が一旦とはいえ皆と別れるのが辛くなっ

てしまう。
俺がそのことを3人に伝えるとソニアは苦笑いをして、ハンコックとソニアは恥ずかしそうに顔を赤らめた。
…なんかソニアが一番年上に見える…。

「う、うむ！それならばしょうがないな！」

「そ、そうね！姉さま！！しょうがないわよね！！」

「それよりドゥアイスは明日からどうするの？」
恥ずかしがっている2人を放置してソニアが俺に聞いてくる。多分俺が居ない間も似たような事があったのだろう。
自分で言うのもなんだが、ハンコックとマリーは俺のことを溺愛している。ハンコックは皇帝になるほどの苦労の反動のせいで、マリーは末っ子だったから年下の兄弟姉妹が欲しくてしょうがなかったからだと思うが…。

「本当は皆と一緒に海賊船に乗って戦闘経験を積みたいんだけどね…。流石に、七武海とは言え賞金稼ぎが海賊行為をするのはね…。だから普段は漁でもしようかなって考えてる。」
ハンコックは俺のために七武海になってくれたが、同じ船に乗っているだけならともかく、戦闘に参加してしまったら俺まで海賊団の一員になってしまう。そんなことになったら、もう賞金稼ぎを続ける事は出来ないだろう。
漁はシャボンディ諸島でもやっていたし、自分の食料は自分で取らなきゃ迷惑をかけてしまう。別荘で食料を取ってきてもいいが、それではこの島の皆に認めてもらうことは出来ないだろう。

「蛇姫様。失礼する。」
俺がそんな事を考えていたら一人の婆さんが入ってきた。

「なんじゃ？ニョン婆。私たちは今姉弟の絆を深めておったのじゃ！邪魔をするな！」
ハンコックが『私』と言っているということは、ハンコックがある程度信頼をしている人みたいだ。
ハンコックのセリフはスルーの方向で

「邪魔をするニャて…。そなたがドゥアイスじゃニャ？」

「そうだけど…。マリー、この豆みたいな婆さん誰？」

「おぬし！豆て！！」
だって本当に豆みたいなんだもん。

「この人は一応先々代の皇帝でグロリオーサっていう人よ。通称はニョン婆。レイリーと知り合いだったみたいで私たちをアマゾンリリーまで連れてきてくれた人よ。そのあとも色々アドバイスをくれるわ。」

って事は3人が天竜人の奴隷だったことも知っているのか。それでも3人に協力してくれているということは、確かにハンコックが信頼するのも頷ける。

「へ～、この人が…。昔から豆みたいだったのか？」

「だから、おぬし！豆て！！そこはそんニャに重要な所ニャニョか！？」

だって気になるじゃん。昔からだったら、こんなんでも皇帝になれる位強かったってことだし…

「まあ、特に用はないんじゃが、レイリーに聞いたことがあってな。一度会いたいと思うておった。」
レイリーの奴、なんて言ってたんだろ？あのドＳジジイの事だからどうせろくな事言ってないと思うが。
ん？なんか寒気が…。

「用がないだと！？用もないのに私たちとドゥアイスの会話を止めよって！！」

「ニョに！？こ、これは覇王色の覇気！待て、蛇姫！話せば分かる！」

この時がハンコックが覇王色の覇気の持ち主だと発覚した瞬間だった。
さっきの寒気はハンコックの覇王色の覇気のせいだと自分に言い聞かせた。断じてレイリーの超常の力などではない！！

ｓｉｄｅ　ドゥアイス　ｅｎｄ

第十三話　懐かしの故郷（後書き）

原作では護国の戦士だったキキョウですが、この頃は海賊団だったという設定にしました。
ドゥアイスの事でハンコックに異論を唱えそうな人は彼女しか思いつきませんでした。

第十四話　再船出（前書き）

割と短めです。

第十四話　再船出

ｓｉｄｅ　ドゥアイス

あれから3ヶ月程が経った。

キキョウさんを武々で倒したこともあって、アマゾンリリーの皆は俺を快く迎えてくれている。

一部は快過ぎる人もいるが…。

俺のファンクラブが出来てしまったのだ。俺が子供であることも大きいが、その上ハンコックの弟でもあり、海賊団でも強い方に入るキキョウさんを倒した事によって変な人気が起こってしまったのだ。

ちなみに会員ナンバー1はハンコックで2がマリーだ…。

まあそれはおいといて、普段は漁をして、たまに護国の戦士の訓練に参加するという生活をしている。

正直別荘の食材を使えば俺の食料はおろかこの国の食料もまかなえるが、そのためには国中に俺の別荘を知らせなければならなくなる。それにこの漁の目的の一つは国の皆に俺を認めてもらう事だ。キキョウさんを武々で倒したことで認めてくれる人も沢山いるが、まだ不安気に俺を見ている人もいる。そうした人に徐々に認めてもらうように時間をかけてわかり易い結果を残すためにも漁をしているのだ。

そのかいあって少しずつだが俺を不安気に見ている人が減っていた。

護国の戦士の訓練には割とあっさり参加することを認められた。と

いうよりむしろ頼まれた。
海賊団のメンバーは国中の戦士の中から選ばれるエリートだ。その中でも強い方に入るキキョウさんを倒したため、護国の戦士から是非指導してくれと言われた。
これは嬉しい申し出だった。俺も筋トレや念の修行は欠かさないが、やっぱり沢山の人と戦闘経験を積まないと実戦での勝負勘などが鈍ってしまう。護国の戦士は俺の実力を知っていて、自分たちが殺す気で挑んでも敵わないと分かっている ―（偉そうだが事実だ）ため、遠慮せずに本気で挑んできてくれるので、実戦と変わらない訓練が出来る。

当たり前の話だがソニアとマリーの背中の紋章は大天使の息吹で消しておいた。
ハンコックの時と同じく年功序列でソニアの紋章を先に消した。
今の俺の実力ならば3日もあればG・Iはクリアすることが出来た。殆どのカードは入手方法が分かっていればすぐに手に入れる事ができるからだ。

カードを手に入れる為には箱庭の中に入らなければならないので、箱庭と別荘についてはハンコックたちに話しておいた。
3人とも中に入りたがったが、二つとも俺しか入れないという制約を付けて作成したため入ることが出来ない。
とりあえず3人には俺が箱庭の中にいて国に姿を見せない理由を国民の皆に説明する事を頼んだ。
3人は自分たちの背中にある「ゴルゴンの目の呪い」を祓う為に城内にこもっていると説明したようだ。殆ど嘘は付いていない。
しかし大天使の息吹はひと月に一度しか手に入れることが出来ないのがネックだ。それにエレナもどきに聞いた所によると、大天使の息吹はストックを貯めておく事も出来ないらしい。身内に怪我人が

いつ出ても対応出来るように数枚はバインダーにストックして置こうと考えたのだが、それは許されなかった。原作でゴンが使った擬態（トランスフォーム）と聖騎士の首飾りのコンボも通用しないみたいだ。残念だがしょうがない。元々はG・Iのカードを使おうとなんて考えていなかったので諦める事にした。

この件で俺は島中の人から認められる事となった。誰も祓う事が出来ないと言われていた「ゴルゴンの目の呪い」を祓った事で、元々ウイルスを持つと思われていた俺が、むしろ病魔を祓う存在として認識されたようだ。
過激なハンコックファンからは「貴方のおかげで蛇姫様と一緒に湯浴みをすることが出来た！」と鼻血を出しながらお礼を言われたことには引いてしまったが…。
そのせいで俺のファンクラブの会員数は激増してしまった。どんだけ国民を魅了してるんだ、ハンコック…
ちなみにハンコックのファンクラブもある。会員数は国民の9割を超えるようだ。

ハンコックたち、九蛇の海賊団はひと月に一度、4日程航海をする。海賊団のメンバーから聞いた話によると、俺が来る前はもっと航海する時間は長かったらしい。
ニョン婆曰くこれもウイルスの一種と言っていた。こんなんで俺がまた航海に出たとき大丈夫なのか心配だ。

「ドゥアイスは何故賞金稼ぎになったのだ？」

あれからまた3ヶ月程経ち、そろそろ出発する旨を伝え、胸の痛みを訴えてベッドを転がっていたのが治まるとハンコックが聞いてきた。珍しくソニアとマリーは居ない。

「うん？レイリーたちから聞いてないの？」

ハンコックたちがシャボンディ諸島にいた頃、元々レイリーの知り合いだったニョン婆を呼ぶまでの数日間、ハンコックたちはシャッキーのバーで暮らしていたはずだ。それならば俺の事を聞いていると思っていた。

「うむ。一応シャッキーに聞いてみたのだが『本人に聞きなさい』と言われて断られた。」

シャッキーらしいと思った。レイリーは結構自分が海賊時代の話をしてくれたが、シャッキーは俺が面白い島について聞いても『自分の目で見てきなさい』と言ってあまり教えてくれる事は無かった。

「別にそんなに深い意味はないよ。俺はただ単純に冒険をしたいだけだ。冒険家だと本とか出さないと収入ないし、海賊だと海軍に追われちゃうし、海軍だと好きに旅出来ないし世界政府嫌いだし。ただの消去法だよ。」

他にも気に食わない海賊をぶちのめせるとかあるけど。

「そうか…。いやドゥアイスが九蛇の海賊団に入ればもっと一緒にいられると思ってな。」

「そういうことか。別に海賊が嫌ってわけじゃないんだけど九蛇はなぁ…。」

俺はレイリーに育てられたから海賊に偏見は全くと言って無いが、九蛇の海賊団は国のために結成された海賊団だ。他の海賊と違って自由に海を旅する事は出来ないだろう。
それが分かったのかハンコックも諦めの入った顔で頷いた。

「そんな顔しないでよ。これからはアマゾンリリーを拠点にするからちょくちょく帰ってくるつもりだし、いざとなったら俺のビブルカードがあるでしょ？」

「う、うむ。それもそうか…。
それより次は何処へ向かうのだ？」

「とりあえずグランドラインの始点の双子岬を目指すよ。イーストブルーに入りたいんだ。」

今の俺ではカームベルトを越えることは出来ないので、レッドラインを通ってイーストブルーに入るつもりだ。俺の場合、カーヅを使えば船を乗り捨てる必要もないし。
ハンコックたちに送ってもらえば良い話だが、このアマゾンリリーはサウスブルー寄りのカームベルトの中にある。流石に俺の旅の為にグランドラインとカームベルトを縦断してもらうのは心苦しい。
イーストブルーに入りたい理由は海賊王が処刑された死刑台を見たいのと、最も平和な海と呼ばれているイーストブルーをこの目で見てみたいという理由だ。
それらを伝えるとハンコックは前者については苦笑い、後者については納得の表情を浮かべた。
理由についてはもう一つあるけどそこは言わないでおいた。

「それではドゥアイス、気を付けて行くのだぞ。」

3日後、俺は九蛇の海賊船に連れてもらってカームベルトとグランドラインの境に来ていた。
先日のハンコックとの会話を伝えたソニアとマリーは案の定『イーストブルーまで送る』と言ってくれたが断った。
ハンコックに言うのを忘れていたが、双子岬に住んでいるクロッカスさんにも会ってみたいのだ。
クロッカスさんは海賊王の船の船医を務めた人で、何か面白い話を聞けるかもしれない。

「分かってる。ハンコックたちこそ体に気をつけてよ。」

「大丈夫よ。貴方のおかげで『ゴルゴンの呪い』も解けたし。」

俺の言葉にソニアが答える。他の船員の前なので『ゴルゴンの呪い』と表現している。

「それじゃあ、行ってくる。」

俺がそう言って船を出すと、ハンコックたちだけではなく、他の船員も声をかけてくれる事に心が温かくなった。
本当にアマゾンリリーが故郷になったんだな、と思った瞬間だった。

side　ドゥアイス　end

第十四話　再船出（後書き）

アマゾンリリーの位置は原作の図を見て判断したので多分間違ってないと思います。
この小説ではレッドラインを通ればグランドラインから抜け出せるとしたんですが、原作では違うんですかね？
標高が高いからカームベルトを通った方が生存率が高いという設定なのかもしれませんけど。

第十五話　リトルガーデン

side　ドゥアイス

旅を再開した俺は、元々の目的地だった『何もない島』に向けて舵をとった。
念の為にアラバスタでエターナルポースを購入しておいてよかった。そうでなければ女ヶ島でログを書き換えられて次の島に行けなくなる所だった。
別に島自体にはあまり期待していないが、何か島を飛び越えるのは嫌だ。それに何かを発見できるかもしれないし…。もしかしたら…。出来れば…。ほんの少しでもいいから…。

と思っていたが、話通り何も無い島だった。大陸並みに広かったけどまあ、分かってはいたが少しは期待してもいいだろう？宝くじだってあたるかもしれないんだ！

そんなわけで上陸して3時間でログを取って、すぐに次の島へ向かった。
今回のハズレの島の分、次の島には大いに期待したいところだ。

「期待したかいがあった！！」
思わず叫んでしまった。

あれから3日程航海を続けた先にたどり着いた島はなんと太古の島だった。恐竜がいる。

しかし元いた世界の歴史にそのまま当てはめていい様な単純な生態ではない。
生えてる植物やティラノサウルスがいるところを考えると白亜紀末期の様に感じるが、漸新世末期に登場したはずのサーベルタイガーもいる。
ティラノサウルスとサーベルタイガーが生きた時代は４０００万年ほど差があるはずだ。
こういうところを見ると、やはりここは異世界なのだと感じる。

それはそうとこの島は俺の旅が始まってから最大の魅力を秘めた島だ。
俺も男だ。子供の頃は一度は恐竜に憧れたし、タイムマシンがあるのなら恐竜の時代に行ってみたいと前世の頃は考えたことがあった。
その夢が今日叶ったのだ。これは相当嬉しいことだ。

そんな感動に浸っていると、なんかでっかい足音が聞こえてきた。

「ゲギャギャギャギャギャ！！これは久しぶりの客人だな！
チビ人間の子供が一人でこの島に来たのは初めてだ！！」

「うぉ～っ！巨人族！！」
そう巨人族だった。
シャボンディ諸島に住んでいた俺は巨人族を見るのは初めてではない。
しかし俺が見てきた巨人族は天竜人の奴隷になってしまってまともに歩くことを許されていなかった人たちばかりだった。しかしこの巨人はシャボンディ諸島で奴隷にされている巨人族とは違って、確

かな戦士のオーラを纏っていた。

「ゲギャギャギャギャギャ！！我こそがエルバフ最強の戦士、ドリーだ！！

随分と活きのいい子供だな！！うちへ招待してやろう！！」

「いいの？そんじゃお邪魔しようかな！！俺の名前はドゥアイスっていうんだ。よろしくな！！」

エルバフという巨人族がいる事知っている。ていうかドリーって１００年近く前に暴れた海賊団、巨兵海賊団の二人の船長のうちの一人のだろう。もう一人の名前はブロギー。賞金額は一人１億だったはずだ。

流石に手配書は持っていないが本で読んだことがある。

「こりゃ、うめぇ！！」

「ゲギャギャギャギャギャ！！チビ人間の子供の癖に良く食う奴だな！！」

ドリー（何か敬称で呼ぶと違和感感じる）の家についたら「昼飯にしよう」と言われ、ドリーは昼飯の為に恐竜を一頭狩って焼いた肉を俺に出してくれた。

最初は恐竜を食うというのは前世の記憶のある俺には罪悪感を感じる行為だと思っていたが、一口食ったらそんな気はうせた。

かなりうまかったのだ。牛肉と鳥肉のいいところを足して倍にした感じだった。

「ところでドリーは一人でこの島に住んでるのか？巨兵海賊団は解散したんだろ？」

「ほう、その若さで巨兵海賊団を知っているのか。９０年も前の話を良く知っているな？」

「まあな。でもあんたら昔大分暴れたから知ってる人は知ってるぞ。」

巨兵海賊団は昔の海賊を調べると良く出てくる名前の一つだ。
この世界では歴史学というものを教育に取り入れる事をあまりしていないので、調べなければ知ることは無いが…。

「ゲギャギャギャギャギャ！！確かに昔は暴れたな！！すっかり忘れておった！！
一人で住んでる訳では無い。今この島は俺ともう一人の決闘場になってるだけだ。」

「もう一人って、赤鬼のブロギーか？」

「ああ、俺の名前から巨兵海賊団を思いつくなら流石に知っているか。そのとおりだ。
俺たちの村、エルバフには固い掟がある。争いを始めて互いに引けぬ場合はエルバフの神の審判を受けるのだ。エルバフの神は常に正しき者に加護を与えて生き残らせる。
俺とブロギーは９０年前、争いをおっぱじめちまったのさ。それからケリがつきやしねぇ！！」

もしかしてそれが巨兵海賊団の解散した理由なのか？
だとしたら当時の人たちは運が良かったな…

「……えっと、理由は？」

「ゲギャギャギャギャギャ！！そんなもん忘れちまったな！！お前には理解できんか？」

「いや…、分かるよ。」

前世しか生きていなければ理解することは無かっただろう。しかしこの世界でレイリーに育てられ、闘いを学んでいるうちに戦士としての誇りというものが俺の中にも出来た。ドリーもブロギーも自分が正しかったと証明したいわけじゃなく、その誇りを守りたいだけなのだろう。

「ゲギャギャギャギャギャ！！分かるか！！確かにお前からも戦士としての誇りを感じるな！！その歳で大したもんだ！！ところでドゥアイス！お前酒を持ってないか！？もう久しく飲んでねぇんだ！！」

「持ってるよ。あげようか？」

流石にまだ俺自身は飲まないが、『別荘』の中で『ゲーム（インスタント・プログラマー）の開発者』と００６『酒生みの泉』を使って大量生産している。あくまで念の修行のために使っているが、最悪の場合は売ることも出来るから生産しておいた。しかし普通ようやく１１歳になろうという子供に酒を持ってるかと聞くか？

「そうか！！くれるか！！それはありがたいな！！」

とドリーが言った瞬間、大きな火山が轟音をたてて噴火した。

「おっと、真ん中山だ！
いつしかお決まりになっちまったんだ。真ん中山の噴火は決闘の合図とな！
それじゃあドゥアイス！ケリをつけてくるぞ！！酒を用意して待っておけ！！今日こそブロギーをぶちのめして祝杯をあげるぞ！！」
ドリーがそう言うと、真ん中山の向こう側から角がついた兜をかぶった丸めの巨人が叫びながら現れた。

「オオオオオ！！」

「ヌェェェイ！！」

一撃一撃が全て急所狙いだ。腹を狙えば盾で受け止め、頭を狙えば兜で受ける。
かつては共に海賊団を率いた戦友同士だろうが容赦はカケラもない。
こんな闘いを９０年も続けているなんてとんでもない戦士達だ。
５分程打ち合い、互いの武器も盾も弾かれた後素手で殴り合った。

「６万７千１８３戦」

「６万７千１８３引き分け」

「「…カ」」
それで両者ノックダウン。

「ゲギャギャギャギャギャ！！ブロギー！！さっき客人が来て酒を持ってると言っていた！！」

「ガババババ！！そうか！！ならば今日は宴会だな！！」
二人が豪快に笑い合う。とても先程まで殺し合いをしていた二人には見えない。やっぱり二人はライバルでありながら親友でもあるようだ。こんな関係、少し羨ましいかもしれない。
「ってドリーから酒を用意しとけって言われたんだった！」
焦った俺は急いで別荘の中に入り、中にある酒を全てカード化して外に持ち出した。

「ドリー、お待たせ。」
「おお、待ちくたびれたぞ、ドゥアイス！！」
「ダバババババ！お前がドゥアイスか！！我こそがエルバフ最強の戦士、ブロギーだ！！」
俺が二人が倒れている所に着くと、ドリーが笑いながら文句を言い、ブロギーが名乗った。
「ゲギャギャギャ！おい、ブロギー！！俺を差し置いてエルバフ最強の戦士を名乗るとはどういう了見だ！？」
「ガババババ！！そのままの意味だ！お前より俺の方が強いと言ってるんだ！！」
…あれ？

「言ってくれるじゃねぇか！！ゲギャギャギャギャ！！」

「おぉ、言ってやったぞ！！ガババババ！！」

……おい

「やるのか、貴様！！」

「上等だ！！今度こそ叩き潰してくれる！！」

…また決闘が始まってしまった。お互い譲れない事なんだろうが、少し呆れてしまう俺は悪くないと思う。

「ゲギャギャギャ！すまなかったな、今度は俺らが待たせた！！」

「別にいいよ。お互い譲れないところなんでしょ？」

「ガババババ！！若ぇのにわかってるじゃねぇか！！」

１０分後、壮絶な決闘をまた終えるとドリーが謝罪してきた。二人が言うには真ん中山の噴火自体は一日に一回あるかないか程度なんだが、このように些細なことでも決闘に発展してしまうので結局一日二回ぐらい決闘があるらしい。

「ゲギャギャギャギャ！それじゃあ、宴会を始めるか！！何に乾杯をするか！？」

「ガババババ！！俺たちに酒を恵んでくれた小さな友人にでいいだ

ろう！」

「気にしなくていいぞ。いいもん見れたからな！見物料がわりだ。沢山あるから好きなだけ飲んでくれ！！」

一日１００樽分を一年間造った。

この二人の場合は一樽がコップ一杯分位しか無いが…。

「おい、ドゥアイス！『飲んでくれ』とはどういうことだ！？お前も飲むんだよ！！」

「えっ！？」

「ガババババ！『えっ！？』じゃないだろう！！宴会の場で飲まないなんて許されるわけないだろう！？」

ちょっと待て！！俺はまだ１１歳だ！いくらこの世界が飲酒に関して寛容でも１１歳は早すぎだろう！？

と心の中で叫んだが、この世界という言葉を口にすることは出来ないので戸惑っていた。

「ゲギャギャギャギャギャ！！それじゃあ飲むとするか！！俺たちと小さな友人の出会いに！」

「「乾杯！！」」　「乾杯…」

二人はテンション高く、俺は失礼ながら低く乾杯をした。

まさか１１歳で飲酒をすることになるなんて！シャッキー、ごめんなさい！！

うまかった。

いや、美味いのは前世の記憶があるから知っていたし、『酒生みの泉』で造られる酒は絶品なのも知っているが、まさか今の俺の味覚に合うとは…。

「ガババババ！！ドゥアイス！こんなに美味い酒は初めてだぞ！！」

「ゲギャギャギャギャ！本当だ！俺たちが決闘している間に酒がこんなに美味くなっていたとはな！！」

「ああ、喜んで貰えて嬉しいよ。」

どうやら二人は酒の製造技術の向上だと思っているらしい。まあ多分それも少しはあると思うのでそういうことにしておこう。

「ところでドゥアイス、さっきお前は何もないところから、この酒樽を出していたな。あれは悪魔の実の能力か？」

「うん、まあそんなとこ。」

ハンコックたちの様な家族ならともかく、友達になったとはいえ初対面の人に俺の能力について説明は出来ないし、したところで理解してくれないだろうから、そういうことにしておく。

「そういや、この島ってログ溜まるのにどれくらいかかんの？」

「1年だ。」

「1年！？流石に長いな！」

今まででダントツの最長時間だ。エターナルポースを持ってなかったらエライことになる所だった。

二人が俺のリアクションが今までの人たちに比べて薄い事を疑問に感じたようなのでエターナルポースを持っていることを説明したら納得したようだ。

「よくエターナルポースを持っていたな？この島はグランドラインの前半だから手に入るエターナルポースは少ないはずだぞ？」

「ああ、俺はグランドライン出身だからな。今はこの海を逆走してんだ。」

「ガババババ！！そうか！それなら納得だ！俺たちも昔はそうだったな！
という事は島の西側から入ったのか？」

「いや、西側はとんでもなくデカイ化け物が現れたから迂回して北から入ったよ。」

あれにはビビった。あのでかさは尋常じゃない。カームベルトの海王類が可愛く見えるサイズだった。
多分金魚だとは思うんだが、サイズのせいで自信がない。あんな巨体がいきなり海中から現れるもんだから海が荒れて仕方がなかった。

「ゲギャギャギャギャギャ！！『島食い』に会ったか！あの怪物金魚に出くわして生きていられるとは、やっぱりお前も戦士のはしくれだな！！」

「あのサイズには驚いただろう！！だが驚くのはそれだけじゃないぞ！！あいつは名前の通りその辺の島を食いつぶし、そして出すフンのでかさと長さの方がびっくりしたもんだ！！」

やっぱりあいつ金魚だったんだ。
確かに島を食ったらとんでもないフンが出そうだな。

「確か…、『何もない島』といったかな、あのフンは！」

……え？

「ガババババ！！昔一度大陸と間違えて上陸しちまった事があったな！！後で『フンなんかに上陸しちまった！』と嘆いたもんだ！！」

「……フンなんかに上陸しちまった！」

「「……」」

「ゲギャギャギャギャギャギャギャ！！！！」「ガババババババ！！！！！」

俺の魂の叫びに二人が一拍置いて爆笑する。

「ゲギャギャギャ！そうか！！お前も上陸しちまったか！！」

「ガババババ！！無理もない！！俺たちでも大陸だと思ったんだ！！お前らなら想像も出来んさ！！」

チクショウめ！！道理でレイリーがやたら「一度行ってみるといい」って勧めるわけだよ！！

ひとつ言わせてくれ！

なんで、う〇こにログがあるんだ！！

side　ドゥアイス　end

第十五話　リトルガーデン（後書き）

二人のキャラを壊さないように書いたら「ゲギャギャギャ」と「ガババババ」の連続で書くのが疲れました。
二人の決闘と真ん中山の噴火については予想です。
原作で２回目の決闘の時に「今日は景気がいい」といってるので１日に２回以上噴火する事は余りない事だと思いますが、１００年闘って７３４６６戦ですので１日２回程度闘ってる計算なんですよね。
ウイスキーピークでイガラムが２・３ログをたどればアラバスタに着くと言っていたのでリトルガーデン、何もない島という事にしておきます。
今週は何かと忙しく、来週の更新が月曜にできそうもありませんので、次の更新は来週の水曜の予定です。申し訳ないです。

第十六話　双子岬（前書き）

更新遅れたわりに短いです。
リアルが忙しかったんで勘弁してください。

第十六話　双子岬

side　ドゥアイス

あれからやけ酒をして、俺も樽４つ分ほどの酒を飲んだが殆ど酔わなかった。
どうやら俺は１０歳にして異様に酒が強いようだ。これもあのお節介な神の仕業だろうか？トリコの世界にはめちゃくちゃ美味い酒が沢山あるようだから。

早くトリコの世界に入りたい気持ちもあるが、多分まだ俺の実力ではトリコの世界を渡る事は出来ないだろう。
原作でトリコは馬鹿でかい岩を軽々砕いていたが、ＨＵＮＴＥＲ×ＨＵＮＴＥＲでゴンがあのサイズの岩を砕くのは全力でオーラを拳にこめなければ出来ないだろう。
勿論それがそのまま戦闘力に直結するとは思わないが、トリコの世界では野生動物が相手だ。対人間とは勝手が違うのでもう少し身体能力を上げてから挑まなければ死んでしまう。

さてあの宴会から１ヶ月程が経った。
ドリーとブロギーは毎日の様に決闘を繰り返しているが、引き分けを続けている。
まあ９０年以上勝負のつかない決闘が俺がいる時に決着がつくとは思っていないが…。

俺はこの1ヶ月間この島を探検し尽くした。
恐竜を始め、沢山の絶滅した動物たちを見ることが出来た。中には俺の元いた世界でもこの世界でも存在を確認されていない生物もいて興奮したものだ。
もう見るところもないのでそろそろ島を出るつもりだ。

「という訳だ。」
その旨を決闘後、力尽きてぶっ倒れている二人に言ってみた。

「ゲギャギャギャギャギャ！！そうか！もう出るか！これは寂しくなるな！！」

「ガババババ！！全くだ！！これでしばらく酒にありつけなくなるな！！」

「そっちかい！！」

ドリーの言葉に「そんなに豪快に笑いながら言っても説得力が無い」とツッコもうとしたが、次のブロギーの台詞にツッこんでしまった。だがまあ納得だ。シンミリしている二人は、くたばったレイリー以上に想像出来ない。
……それは言い過ぎか。

「まあそういう訳だ。俺が持ってた酒全部置いてくから大事に飲めよ。また来るかもしれないけどいつになるか分かんないからな。」

あれから俺は『別荘』での酒造を優先して行い、一日に１０００樽分の酒を造り続けた。それを全て置いていくので、二人のサイズでもしばらくはもつだろう。

二人の前でそれをゲインすると、その量に少し二人が目を丸くする。
「ガババババ！！これは有難い！！これなら当分は大丈夫だな！！」
「ゲギャギャギャギャギャ！！ドゥアイス！！こんなに必要なかったぞ！！すぐにブロギーをぶちのめしてエルバフに帰るからな！！」
…おい、そんなこと言うと…
「ガババババ！！おい、ドリー！！貴様誰に向かってそんなこと言っとるんだ！！」
「ゲギャギャギャギャギャ！！お前以外に誰が居ると思っとるんだ、ブロギー！！ついにボケたか！！」
「ガバババババ！！」
「ゲギャギャギャギャギャ！！」
「……」
「やるのか貴様！！」
「オウ！ぶちのめしてくれる！！」
予想通り喧嘩が始まってしまった…。
「そんじゃ俺はもう行くから二人とも頑張れよ…。」

「オウ！！縁があればまた会おう！！」

「いつかエルバフの村にも来るといい！！」

決闘を繰り広げながらも俺にちゃんと返事はしてくれた。
そんな二人を見ると自然に笑顔になり、清々しい気分でこの島を出航することが出来た。

さてリトルガーデンを出航した俺が次に目指す島は「ウィスキーピーク」だ。
この島は名前の通り酒造が主な産業となっているが、もう一つ裏の顔がある。
賞金稼ぎの集まる島でもあるのだ。

双子岬からグランドラインに入った場合、この島は7つある最初の島の一つになる。
意気揚々とグランドラインに乗り込んでくる海賊たちをカモとしている訳だ。
グランドラインの後半になればなるほど、その分死線をくぐり抜け、海賊たちはその力を増していく。
そんな強力な海賊を相手にすることが出来ない賞金稼ぎたちが徒党を組んでいるのがこの島の賞金稼ぎという訳だ。
この島に限らず、7つあるグランドライン最初の島のいくつかはこういった賞金稼ぎたちの温床になっている。

同じ賞金稼ぎとしては情けないとも思うが、俺がとやかく言うことでもないので放っておく。

ウィスキーピークに着いたが、上陸することはせずに岸辺でログをとった。一日でためる事が出来たのですぐに出航することが出来た。

そしてついにグランドラインの始点である双子岬に向けて航路をとった。
わずか三日ほどの航海だったが、双子岬から出る7つの磁力によって海がかつてないほどに荒れていて航海が大変だった。
真夏の様に日が照りつけていたかと思えば、1分後には大雪が降ったりと異常な気候に苦しめられながらも、楽しい航海となった。

そして双子岬に着いたのだが…

「クロッカスさんが居ない…」

岬には灯台が一つあったが誰も居なかった。
俺の双子岬での目的はクロッカスさんに会う事だ。
クロッカスさんに会えなければウイスキーピークに続いて、また素通りする事になる。
それは避けたかったんだけどなぁ、と灯台の中で考えていたんだが、次に耳にした轟音に考えるのをやめた。

「ブオオオオオ！！」

「な、何だ！？」

慌てて表に出てみると、いつの間にかとんでもなくデカいクジラが居て、雄叫びをあげていた。

「うわ〜、でっかいクジラだなぁ」

グランドラインに入ったばかりの奴だったら衝撃的なデカさのクジラだが、リトルガーデンで「島喰い」を見ていた俺にはその程度に思えた。

しばらく、叫んでいるクジラを見ていたら、あることに気づいた。

「このクジラ、背中に扉があるように見えるのは気のせいか？」

周りに誰も居ないというのに思わずつぶやいてしまった。自分でも口にしないと、見たものを信じる事が出来なかったからかもしれない。

そんなことを考えていると、クジラが叫びながら潜ろうとする仕草を見せたので、思わず好奇心に負けてその扉から中に入ってしまった。

中に入ったあとも色んな意味で衝撃の連続だった。

一つは物理的な意味だ。

このクジラが激しく動いているのか、地面が四方八方に揺れている。

普通の人なら歩くことすら出来ないほどの揺れだ。

中には通路があり、しばらく進むと水路にぶち当たった。

生きているクジラにこんなことが出来るのは医療の知識をもった人間だけだ。

クロッカスさんは海賊王の船の船医だった人だ。そう考えるとクロッカスさんがこの先に居る気がしてきた。

そして大きな扉の横に付いた小さな扉を開くと、外に出たと見間違うような風景が目に入ってきた。
おそらく胃袋だろうこの場所に、空や雲が描かれている。
下の海に見えるのはクジラの胃液だろう。

そしてこの空間の真ん中に小さな島と家があった。
その島に飛び移ろうと月歩をしようとしたときに、その家から人が出てきて俺と目があった。

「……」

「……」

何も言わずにデッキチェアに腰掛けて新聞を読み始めた。

「あ、あの…クロッカスさんですよね？」

「……誰に私の事を聞いたか知らんが、そのとおりだ。
お前も名乗れ。それが礼儀ってもんだ。」

確かにその通りなんだが、なんか納得いかない。目が合った人を無視して新聞を読むのはマナー違反の様な気がする。
とりあえずクロッカスさんがいる小島まで飛んで挨拶をすることにした。

「俺はドゥアイスって言います。一応賞金稼ぎと冒険家をやってます。」

「…まだ子供のくせに物好きがいたもんだ。

それで誰に私の事を聞いたんだ？」

「あ、はい。“冥王”シルバーズ・レイリーにです。」

「何、レイリーにだと？お前は何者だ？」

僅かに俺を警戒しながらクロッカスさんが聞いてきた。
確かに子供がレイリーの知り合いというのは違和感があるだろう。

「えっと、俺シャボンディ諸島に捨てられていたところをレイリーに拾ってもらったんです。それから旅に出る3年前まで育ててもらったり修行をつけてもらったりしてました。」

「ふふふ、そうか！あのレイリーの息子か！」

「ええ、そう取ってもらってもいいと思います。」

俺的にはシャッキーが親で、レイリーは師匠っていうイメージなんだけど否定するのも違う気がする。

「そうか、よく来たな！最初は誰が私のワンマンリゾートに入ってきたのかと思ったが、仲間の息子なら話は別だ。ゆっくりしていくといい。」

どうやら俺を歓迎してくれるらしい。
何年経っても仲間は大切な物なんだなと再認識した。
なんか俺も仲間が欲しくなってきたな…

side　ドゥアイス　end

第十六話　双子岬（後書き）

私の中での強さのイメージは

トリコ＞ＨＵＮＴＥＲ×ＨＵＮＴＥＲ＞ワンピースです。

勿論全てがそうとは言いませんが…

ですのでこの小説でもそんな感じでいきたいと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1946u/

Ｄ×Ｄ×Ｄ

2011年9月28日03時17分発行